
闇中輝眼

銀河狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇中輝眼

【Nコード】

N1730B

【作者名】

銀河狼

【あらすじ】

廃墟となった埠頭の冷凍倉庫の一棟で、殺人の依頼をする一人の女性。しかし彼女はまるで狼のような大型の獣によって殺されてしまう。しかし、その彼女の切なる願いを聞き届けようと動き始める、謎に満ちた、作り物のように生気なき、美しい青年と、世界的に名を轟かせる、富豪であり、モデルである女性、そして童顔のかわいらしい少年。彼らはある目的のために、男を死へと誘う。ダークファンタジー。

Scene 1

時代はデジタルの波に吞まれ、古き良き時時代は懷古主義者達の金字塔と化している。

しかしその現代においても、レトロでありながらも若者の間で、根強く好まれる娯樂があった。

命の危険はなく、テーマパークのアトラクションのような、作りのスリルではない、筋書きのない恐怖を味わうことの出来る最高の娯樂。

それが、肝試しである。

ネーミングこそちよつとあれだが、夏の風物詩ばかりではなく、昨今は一年中を通して楽しまれているが、お化けの作り物やこんにやくで脅かすようなチャチなものではなく、本物の心霊スポットを探検するのが通のやり方だ。

おかげで、不法侵入という犯罪が後を絶たないのが、警察の頭痛の種だ。

かつては口コミか、せいぜい電話で伝わっていた怪談話も、インターネットの普及により、それ専用のホームページを介して、短時間で爆発的に全国へと伝わるようになり、新たに『都市伝説』と名を変えて、退屈な日常にほんの少しのスパイスを加えている。

難点をいえばそうした場所はたいがい郊外、もしくは廃れた田舎などに多く存在し、都心部に暮らす人間にとっては、そうほいほいと気軽に行けそうな近場には少ないということだろうか。

しかもそうした近場は大方有名になりすぎていて、遊び尽くされ、荒らされてしまい、もうスリルの『ス』の字もありはしなかった。

つい、近年までは。

そこは、ひどく寂しい場所だった。

何もないというわけではない。

倉庫、もしくは冷凍倉庫と思われる、巨大な長方形の箱を横倒し

にしたような建物が、ポツリポツリと距離を置いて、そこかしこにそびえ建ってはいる。

用途が物資の保管なだけに、オフィスビルなどから比べれば、常駐する人間が格段に少ないのは当然としても、今やそのどこにも人の気配はなく、閑散として、無味乾燥な金属製の外壁やコンクリートの壁に、傍若無人に描かれている極彩色の落書ですら色褪せ、ただ沈黙だけがこの場を支配していた。

充滿している潮の香りも、近年かなり水質浄化が進んだとはいえ、どこか生臭さが抜けず、寂寥感を誘うというよりは、胃の辺りが重苦しくして、かえって不気味だった。

高度経済成長期に埋め立てにより、貿易の拠点の一つとして東京湾の一角に、華々しく産声を上げたこの埠頭だったが、時代の移り変わりと共に施設の老朽化と、なぜかこの手のものはコンパクトにならないどころか、徐々に大型化、さらには急激にハイテク化する港湾設備に対応しきれなくなっていた。

ちょうどその頃、おりしも世はバブル景気の真っ最中で、荷を満載してひっきりなしに往来する、こちらも時代と比例して巨大化していく貨物船をさばき切ることも難しくなり、倉庫街としてもかなり手狭になっていたこともあって、文字通りの泡銭をつぎ込んで、沖合いをさらに大掛かりに埋め立て、開発し、大規模かつ最新鋭の設備を備えた、新たな埠頭を造成したのだ。

しかし、戦後最大、最長の好景気と沸き返っていたバブルの崩壊と共に訪れた不況の波は、終わりはまったく見えず底も見えず、沖合いを埋め立てられてしまったことで、主力である大型船が入ってくることを不可能になった埠頭は存在意義を無くし、またたくまに見る影もなく寂れ果て、維持管理しきれなくなった旧式の倉庫など売却すらままならず、ほとんどの企業が、やむをえないとそのまま放置、いや事実上放棄したものだから、荒廃はなおのこと著しかった。

一時はそのせいで、急増したホームレスやら良からぬ遊びにふけ

る若者の集団などに、空いた建物を次々と占拠されたこともあったが、物騒かつ薄気味が悪い事件事故が頻発するようになると、今度はお決まりの、幽霊が出るといった怪異の噂がまことしやかに囁かれるようになり始めた。

さらには実際にそうした現象を体験したという輩が、真偽のほどは定かではないにしても、次々に現れるにいたっては、いかに豪胆な連中だろうと敬遠するようになるのはあたり前で、みるみる引き潮のごとく、あっという間にいなくなってしまった。

こうして再び、人の姿はすっかり消え失せ、今度こそ真正正銘のゴーストタウンと化したのである。

そして、都心に程近い、格好の心霊スポットとして、若者達の口に上るようになったというわけだ。

しかし、それもどうやら今年度限りとなりそうで、ここ最近の湾岸地域の再開発の波に乗ってここにも、さまざまなアトラクションを有したアミューズメントパークと、商業施設、ホテル群の建設が、五月頃から着工されることが決まっている。

さして広くもない東京というこの街に、長らく遊ばせておくような無駄なスペースは皆無だとも言いたいのだろう。

再開発に伴い、その周辺の、まだ昭和の末期を思わせる、中途半端に古い街並みをも震撼させていた。

近代化の波に取り残され、いい加減あきらめたかほつとしたところに、降ってわいたような大規模開発なのだから、それも当然である。

そろそろ老朽化が目立ち始めた、ビルの高さはせいぜい十階どまり。

電線が張り巡らされているとはいえ、ずいぶんと空が広く見える。それが夜ともなり、電線が闇へと溶け込んでしまえばさらに顕著になった。

七時を回る頃になれば、飲食店をのぞいた商店は、早々に店を閉め、一番粘っている赤提灯も、日付が変わる頃には店仕舞いをすっ

かり済ませ、従業員すら帰宅の途についた。

まだ埠頭が活気付いていた頃には、数件あったコンビニエンスストアも、バブルの崩壊共に、一軒、また一軒と撤退し、半径一キロ以内には存在しなくなってしまった。

その中であって、妙に近代的なデザインの大型の銀色の街灯だけが、煌々と明かりを降り注いで浮き上がっている。

片側二車線ずつの結構大きな道路だが、ほとんど車の通りもなく、閑散というよりは、異次元空間にでも迷い込んでしまったようだ。

そこを今晩は珍しく、一台のタクシーが疾走していた。

「その先を、右に曲がってください」

「はあ？」

この道三十年、十分にベテランの粹に入っている、見るからにさえない中高年男の見本のようなタクシー運転手の野瀬和巳は、本日最後の客になるであろう彼女の指示に、うっかりそんな反応を返してしまった。

「あの……この先を右ですか？」

この前後数百メートルには、他に右折できるところはないし、てっきり聞き違えたのかと思っ聞き返したとしても無理はあるまい。

何せそこにあるのは、心霊スポットとして有名になりすぎた、例の埠頭だからだ。

ストリートファッションというのか、妙にだらしない格好をした茶髪の若者ならともかく、スーツ姿の、年の頃二十代半ばの妙齡な女性が、しかも一人となればなおさらである。

「……はい、お願いします」

しかし、戻ってきた答えは同じで、彼は狐につままれたような気分になまれつつ、ルームミラーでつつい、行儀悪く後部座席の客の様子を盗み見てしまった。

パールピンクに塗られた、小振りな感じのする形の良い唇は固く結ばれ、そのけして濃くない色合いのせいなのか、はたまた夜のせいなのか、元々色白な小作りな顔を、余計に血色悪く見せていた。

かなり古くから存在している有名な怪談に、タクシーの後部座席の女が走行中に忽然と消えてしまい、その座っていた後がぐっしょり濡れているというものだ。

大体それは墓地の近くで起こるといふ噂で、こんな無骨極まりない埋立地、というのはついぞ聞いたことはなかったが、この女、ひよっとしてその類なのだろうかと勘ぐりたくなるほど、俯き加減で黙り込み、喋ることといえ、ここまでの道順を聞き取りにくい小さな声で指示するだけだった上に、行き先がそこでは出来過ぎだと背筋に強い寒気が這い上がってくるのを止められなかった。

最近まで入り口になる道路には、後を立たない不法侵入者を排除するためのかなり強固なバリケードが築かれていたのだが、再開発が決まって測量やらなにやら関係者の出入りが頻繁になり、先日ついに撤去されてしまったのだ。

どうやら運転手の儂い希望を裏切って、訂正する気はないらしく、内心は勘弁してくれと泣きを入れたい気持ちはあったが、やむを得ず、ウインカーを上げて速度を落とした。

この客を拾ったのは、ここからさらに二十分程度走ったところにある、バブルの折にひらけてできたJRの駅前の繁華街のはずれに程近い場所で、大きな声ではあまりいえないような、評判のよくない店ばかりが軒を連ねていると、もっぱら噂の一角でだった。

いつもは駅前、もしくはその周辺で客を捕まえられるのだが、本日はあいにく事故渋滞に引っかかって、出遅れてしまった。

正直その辺りまで流してしまうと、深夜を過ぎても営業している店があるだけに、空振りになる日が多い。

まったく今日は、何から何までついてねえやと盛大に舌打ちした矢先、道路に面した店の壁一面に取り付けられたネオン看板が作り出す、目に突き刺さるようなけばけばしい蛍光色のさほど明るくない光の中に、ぼんやり照らし出され、右手を上げている人影が視界に飛び込んできたのだった。

どうしようかと躊躇する気持ちがあったのは、そうした評判の悪

い店に引っかかったのだろう、どうにもこの辺は客質も良くないからで、とりあえず無いよりましかと諦めの境地で路肩に寄せていくと、どうやら女性らしいシルエットに、ほっとすると同時に、珍しいこともあるもんだと、思わず口の中で呟いていた。

それというのも、まだ営業している店が多いので、従業員やホステス達が帰途に着くのは、もっと遅い時間になるからだ。

こんな若い女性が、それも一人で飲めるような所はなかったはずである。

深夜にはたいてい、この繁華街の客を最後の一仕事と決めているので、その時々酔客やホステス達、まれにバーテンダーなどの口から、聞くとともに無しにさまざまな情報をもたらされることも、ままあった。

それは酔った挙句の愚痴であったり、仕事からようやく解放された高揚感からくる軽口だったりもするが、職種は違っても同じ客商売だ、軽々しく、耳にした外聞を憚る話題を他にももらしたりはしない、という暗黙の了解が、互いに存在する気安さも手伝っているのかもしれない。

そうして聞きかじった話を総合すると、女が立っている周辺の数軒は、まずほとんどがぼったくりなどの法律に触れるような商売の仕方をしていて、暴力団と直接繋がりがあるのだそうだ。

中には、ホステスが全員、高級売春婦も兼ねているなどということんでもない眉唾な話もあり、そこは何でも大層な会員制で、紹介がなければ店内に足を踏み入れることもできず、客はみな、有名な政治家やら財界の有力者といったVIPばかりなのだという。

なぜ、そんな豪勢な店がこんな無名の盛り場にあるのか、と問えば、都心から遠くもなく近くもないこういう所の方がむしろ目立たなくて良いから、というありきたりな理由が飛び出してきた。

近頃の娼婦といえ、ほとんどは外国人、それも東南アジア系の女性が多いが、話題に上ることは少なくなっても、日本国内において確実に感染者数を増やしつつあるエイズを、極力避けたいという

客からのたつての要望で、全員が日本人のだそうだ。

その時には、たまたま飲んでいて耳にしたからと、面白おかしく話してくれた同年代の客ともども、なんとも突拍子もない内容だと失笑してしまった。

確かに性行為でエイズに感染するのは間違いではないが、日本国内ではどちらかといえば、一時ニュースやワイドショーをにぎわせていた血液製剤や、発症していない感染者の血を知らずに輸血してしまうことによって感染するケースが多い。

ましてやエイズウイルスは感染力が非常に弱いので、避妊具を使用すれば性行為における感染もほぼ防げるという知識が常識になりつつある現在においては笑い話にしかならず、これもまた都市伝説と言えるのかもしれない。

週末でもないのに取り締まりでもあったのか、珍しいほど駐車車両の見えない歩道際へ、高級感の漂うぴかぴかの黒い車体を滑るように横付けし、自分でも惚れ惚れするほどタイミングよくドアを開くと、慣れたしぐさで乗り込んできた女性は、白地に細かい黒の千鳥格子の、見るからに上質な生地を使用した、お嬢様風の丸襟のシヨート丈のツーピースを品良く着こなしていた。

明りが頼りないルームライトだけなのではっきりしないが、一見すると銀行もしくは公務員といった、お堅くて良い所にお勤めのOLのようなおとなしやかな雰囲気の方に、タイトスカートは座っただけで下着が覗いてしまうのではと危惧するほど丈が短く、そこから光沢のある黒のストッキングに包まれたほっそりとした足がすらりと、膝を揃えられて行儀良く、少し斜めに魅惑的に伸びている。身に着けているイヤリングやネックレス、右手の薬指の指輪といったアクセサリー類も、目の覚めるような鮮やかな真紅のルビーで、デザインに統一性が見えるところからいって、セット、もしくはシリーズとして、どこぞの有名な高級ブランドから売り出された代物なのかもしれない。

靴はあいにく見えなかったが、乗り込むまでのわずかな数歩とはい

え、高らかに響いた音からして、結構な高さのピンヒールだろう。化粧も、落ち着いた色合いのピンクを主体にした色調だが、その分ラメやグロスが入っていたりして、派手というよりは華がある感じだった。

染めたわけではないらしい、栗色を強く帯びたセミロングの、前髪にだけに軽くパーマのかかった、これまたちょっとお嬢様風のストレートヘアに良く似合っている。

物慣れない感じが、多少引つかかるが、彼女は水商売、それもあり高級な店のホステスだ。

片側二車線の道路に中央分離帯はなく、一応注意を促す目的の金属製の突起物が道路に埋め込まれ、それに前輪が乗った所で安全確認の一時停止をしたが、こういうときに限ってあいにく対向車も後続車も影も形もなく、スムーズに埠頭へと入り込めてしまった。

「……お客さん」

逡巡に逡巡を重ねた結果、野瀬は我慢できなくなり、声だけかけてみた。

「ここは、女性がお一人で行かれるような場所じゃありませんよ」

野瀬とて、ここに入るのは初めてだが、釣りが趣味だという同僚に聞いた話では、昼間には釣り人がたまに出入りするとかで、話をしてくれた彼は行ったことはないそうだが、何度か誘われたことはあり、また実際そこで釣りをした人に聞いたところ、魚の食い付きは悪くないが、日中でも気味が悪くて、とても一人ではいられないという。

埠頭に入ると、荒れた路面はひび割れ、ところどころに剥がれたアスファルトが小石状になって転がっているので、車体が細かく不規則に振動し始めた。

さっきまでの道路とは、大きさも明るさも比べ物にならないほどみすばらしい街灯というより防犯灯が、申し訳なさそうに広げている光の輪を二つやり過ぎすと、ヘッドライトをハイビームに切り替えても、タクシーの周りには信じられないほどの暗闇が覆い被さっ

てきた。

天気は悪くはないようだが、天空に浮かぶ月は間の悪いことに新月が明けたばかりなのか、地上に光を投げかけるどころか、自分の方が夜空に溶け込んでしまいそうに細く、頼りない三日月だ。

案の定、待てど暮らせど彼女から返事はなく、こっそり溜息をつくど注意を前方へともどした。

道は十分に広いが、こう無駄に広く人気がないと、廃車やら粗大ゴミを捨てにくる不届き者が必ずいるので、けして障害物が無いわけではないからだ。

ライトにぼんやりと浮かび上がる、敷地を取り囲む、枯れた植物の蔓が絡まったフェンスやら倉庫の壁やらが、不気味さを倍増させている。

嫌な事件事故が多かったわりに、ここで自殺する者は意外に少ないらしい。

残っている建物のお大半が冷凍倉庫であり、定番、というのもあるが、飛び降りや首吊りに向かないせいだろう。

「……その角の手前で、止めてください」

埒もないことをつらつらと思い巡らせていた野瀬は、突然声をかけられて我に返り、目を瞬かせた。

対向車などあるはずもないので、障害物の置かれていない道路の真ん中を堂々と走っていたのだが、一直線なものだから、視線は前を見つつも、考えに没頭するあまり、意識はちよつと別の方向に飛んでいたらしい。

慌てて目を凝らすと、左手に、不用意に人が入り込まないようにと、錆とはげかけた落書のスプレー塗料の色が目立つ、銀色のフェンスが取り囲む敷地の先に十字路が見え、さらにそのもつと先の正面には、どうやら突き当たりらしく、黒っぽい防波堤の壁らしきものがライトの中、かろうじてうかがえた。

右手は、腰ほどの高さの金網が途切れることなく続き、その内側に植えられている、結構な高さにまで成長した常緑樹が、うっそう

と繋っているのを見ると、こちらは裏手にあたっているらしい。

うち捨てられ、タイヤまで持ち去られた乗用車が哀れっぽく傾いているその前のスペースに、戸惑いながら、とりあえず車体を寄せる。

ギアをニュートラルに抜いてサイドブレーキを引いたまでは良かったが、彼女が降りる前にもう一度説得を試みるべきだと思っていたにもかかわらず、どうも気がそぞろだったようで、うっかり条件反射で後部ドアまで開いてしまった。

そこではっと気がついて、迂闊さに悶絶したくなったが、やってしまったことにもう取り返しなどつくはずもなく、ましてここでもう一度ドアを閉めたりしたら、別の意味で警戒されてしまう。

そこはどうやら、この敷地への出入り口の前らしく、フェンスと同じ材質に、補強のための角材を打ち付けた簡潔な両開きの門が取り付けられていた。

その取っ手には、古びた頑丈そうな太い鎖が幾重かに巻きつけられ、間にごつい南京錠がぶら下がっているのが、少ない光源の中でも見て取れた。

塀の高さはおおよそ二メートルほどはあり、見るからに運動に不向きな彼女の格好では、あの門が開けられないのであれば中に入るのは無理だ。

それに、彼女が南京錠の鍵を持っているとは思えなかった。

道路の反対側は、ただ金網を乗り越えるというだけなら、できないことはないだろうが、おそらく従業員がいた頃はそれほど大きく育てる気がなかったらしく、意外と狭い間隔で植わっている木は、屈んだくらいでは間に合わないほどの低さにまで枝が張っている。地面は、ここからではもちろんどうなっているかはわからないが、積もりに積もった落ち葉にゴミなどがカモフラージュされ、足元が危険極まりなく、強行突破するなら傷だらけになる覚悟が必要だ。

それならむしろ、ぐるりと回り込んで、ここと同じ様に入り口を探す方がよほど賢いし、ここまで来て取り繕っても意味が無いので

最初から、そちらに車を回すようにしただろう。

Scene 1 (後書き)

一度、出版社に投稿してみたものの、採用されなかった作品を、捨てきれずに書き直したものです。

まだほんのさわりの部分のみですが、気に入っていただけましたら幸いです。

Scene 2

ひよつとすると後からまた誰かが来るのかもしれない、とも思ったが、待ち合わせ場所としては常軌を逸しているし、そうだとしたらまともな相手ではない。

彼女がここへやって来た理由がわからないだけに、縁起でもない妄想が次々と湧き上がり、野瀬はいてもたってもいられなかった。

もちろん、ここを去った後で何が起きても、単なる客に過ぎないし、一応忠告も、警告もしたのだから、全てはそれを無視した、彼女の自己責任になる。

それでもやはり、人生最後に話した相手が自分などという事態は、激しく遠慮したい気持ちだった。

「おいくらですか？」

おそらくタクシーが帰ってしまえば、鼻を摘まれても相手がわからないような漆黒に包まれるだろうに、尋ねる声は涼やかで抑揚も少なく、いつそ不気味なほどに落ち着いていた。

むしろ野瀬の方が、よほど動揺している。

走ったのは二十分ほどだから、大した額ではない。

こんな時間でなければバスを使った方が、バス停からここまで歩かなければならなかったにせよ、よほど安上がりだっただろう。

千円札二枚でも少量の釣銭が戻るメーターの金額を、喉に声を引っかかせながら読み上げれば、彼女はバックから、大振りの、これもブランド品らしい革の財布を取り出すと、結構な厚みのあるその中から、慣れた手付きでピン札の一万円を一枚引き出し、運転手に差し出した。

「お釣はけっこうです」

この御時世に豪儀なことだと、いつもならほくほくしながら思うところだが、今夜に限ってはその気前の良さが、余計に不安になるだけだった。

「……御用が済むまでお待ちしましょうか？」

札を受け取りながらも、つい口から出してしまった言葉の端々に、その心情が溢れていたのだろう、それまでずっと無表情に近かった彼女が、初めてうっすらと微笑んだ。

「御親切にありがとうございます。……でも、いつまでかかるかわかりませんし、携帯は持っておりますから」

返事の内容はまた、予想を裏切らないものだったが、一介のタクシー運転手である自分に対しても礼儀正しいその態度と言葉遣いに、今の職業はどうあれ、過去においては、良家のお嬢様だったに違いないと確信する。

身に沁みた礼儀作法というのは、どんな境遇に落ちようとも、失われてしまうものではないからだ。

そこで野瀬はふたと思い出し、急いで上着の内ポケットを探ると、最近会社から支給されるようになった名刺を引っ張り出した。

自分の名前と社名、そして配車センターの電話番号の入った紙片を、今にも車から降りようとしている彼女に向かって、勢いよく突き出す。

「お帰りの際に、もしよろしければその番号におかけください。ご指名くだされば、すぐお迎えに上がりますから」

降りてしまう前にと、大慌てに慌てたものだから、その威勢の良さとあまりに必死な様子に、ずいぶんとびっくりしたらしい彼女は、しばらくためらっていたが、少女のようなしぐさで小首を傾げると、くすりと小さく笑みをこぼし、綺麗なラウンドにカットされた爪に、桜貝のような色のマニキュアが塗られた、ほっそりとした指先を伸ばしてそれを受け取った。

微笑んだ彼女は、どこか生きること疲れ切っていたかのような暗さが消え、年相応に瑞々しく、美しく見えた。

するりと優雅な身のこなしで外へと出るその後姿を目で追って、どうしてこんなにこの女性の事が気になるのか、やっと合点がいった気がした。

運転手には、同じ年頃の娘が二人いる。

彼女の二親も、おそらく自分とそう年は変わらないだろうから、きつとこれ以上に胸を痛めて、娘の事を心配しているのに違いない。何か深い憂慮を抱えているらしいが、その心の内を明かすことができる人物は、こんな、人目を避けるというにも程がある場所に呼び出すような、胡散臭い相手しかいなかったのだろうか。

もしそうだとしたら、彼女にとっても家族にとってもひどく寂しい話だ

おそらく、何度も大型車が乗り上げたせいで、縁石が壊れているというよりは崩れている歩道の上に、ずっと背筋を伸ばして立っている彼女の服やバックが、ドアに挟まれる位置にないことを確認してから、やりきれない溜息をつき、ドアを閉める。

そのまま立ち去ってくれるようならば、ここで待っていようかとも考えたが、どうやら彼女もタクシーが走り出すまで動く気はないらしく、後ろ髪を惹かれる思いで、仕方なくそろそろとUターンしてその場を離れた。

ルームミラーの中、たちまち小さくなって暗闇に飲まれてしまった彼女の姿に、これで本当に良かったのかと野瀬は、後悔とも罪悪感ともなんとも言い表しがたい、苦く、重苦しい感情を胸の内に持て余し続けるしかなかった。

S c e n e 2 (後書き)

前回投稿の時に、区切りを間違えてしまったので妙に短くなってしまいました。

Scene 3

タクシーのテールランプが遠くなり、やがて視界から消え去るまで、身動き一つせずに見送っていた彼女は、初めて寒さに気が付いたように身体を震わせた。

さすがに真冬から比べれば気温は上がったとはいえ、まだ日中でもコートを手放すのは心許ない時期だ。

夜中ともなれば、いくら冬仕様といっても、上下共丈の短いスーツだけでは、寒さが堪えるのもあたり前だろう。

本当は不信感を抱かれないためにも、コートも羽織ってきたかったのだが、時間に間に合うように営業中の店を黙って抜け出すため、一時的にバックを隠した洗面台の下には、それ以上の物を隠すのはあまりに不向きだったのだ。

それでも、忙しくなって隅々まで目が届きにくくなる時間帯を見計らって、トイレに行く振りをして席を立てば、見咎められる危険性も低くなるので、やむをえなかった。

特に今日は、そう多くもない自分を指名してくれている客は、誰も来る予定はなかったし、うまくすれば閉店まで気が付かれないかもしれない。

警察の手が入ればヤバイとはいっても、その中で働いている女性達も、借金のかたで強制的に、などという時代錯誤な事は無かった。自分も、そして他の女性達も、理由はなんであれ、普通に務めていたのでは決して得られない報酬の多さに惹かれて、自ら職を求めてやってきたのだ。

経営サイドは、店の方針に従って働きさえすれば、後は何も干渉しなかったし、雇われた方からすれば、給金がきちんと支払われれば、客が多少行き過ぎた行為に及んだとしても、チップが増えるとむしろ喜ぶくらいだ。

そうやって自分も、この数年の間に数え切れないほど、金のため

にこの身を、男達へと差し出したのだから。

何気なく歩き出そうとして、その足元すらおぼつかない深い闇に驚く。

こんな、手探り、足探りしたくなるような暗がりに包まれたのは、おそらく小学校に上がる前、姉と一緒に遊んだかくれんぼで、納戸の中隠れて以来だろうか。

あまりの暗さに、恐くて我慢がならず、かといって他の隠れ場所は、たった二人で何度も繰り返したせいであらかた使い切ってしまった、細めとはいえ戸を開けておいたものだから、結局あっさりと姉に見つかってしまった。

自分でそこを選んだにもかかわらず、隠れている間中ずっと、もし見つけてもらえなかったらどうしようという不安にかられ、姉がおかしそうに笑いながら大きな声で、見つけた、と戸を開けてくれた時、妙にほっとしたのを覚えていた。

突然よみがえった懐かしい思い出に、ふと物悲しい微笑をもらす。もう、思い出すこともしないと、心に決めていたはずなのに。

バックの中を探り、あらかじめ用意しておいた、小型ながら強力な懐中電灯を取り出す。

それを点けて、ゆっくりと門の方へと近付いて行くと、シンと静まり返った中、十センチ近い、白のエナメルのハイヒールのたてる靴音が、周囲に恐ろしいほどに響き渡った。

おそらく反響のせいなのだろうが、誰か別の人間が自分の後を、ぴつたりと歩調をあわせて付けて来ている様な錯覚にとらわれ、ついびくびくと、数歩と進まない内に立ち止まっては、何度となく後ろを振り返り、確認せずにはいられない。

いや、むしろ人でも幽霊でもいいから、振り返った先にいてくれれば、その瞬間にこの場から何も考えずに全力で逃げ出し、あの、明かりも、実際に誰も歩いていなくても、ここよりはるかに人の気配のある、広い道路にまで必死に駆け戻って、何をバカなことをしていたんだろうと自己嫌悪に陥りながら、再度タクシーをひろう

なり、呼ぶなりして自宅に帰れるのに。

そんな感傷的な思いに浸っていると、もらった名刺をまだ、右手に持ったままだったことによく気が付いた。

同じ手でバックを開き、中も探って懐中電灯を取り出したというのに。

それだけ平常心を失っている証拠なのだろう。

ぼんやりとその表面に、読むともなしに目を走らせると、最後の最後まで気にかけてくれていた運転手の、心配そうな顔が思い出された。

あの人のいい運転手なら、今すぐこの番号に電話をし、指名すれば、またこんな場所にでも、快く迎えにとんで来てくれるのは容易に想像がつく。

そしてきつと、帰る道すがら、まるで本当の父親のようにこんなと、こんな場所に、こんな時間に、たった一人でやってきてしまった浅はかさに、耳に痛くとも心には温かいお説教を聞かせてくれるに違いないことも。

苦く変った笑みが、唇から零れ落ちる。

知っているはず、わかっているはずだ。

あの日、いつか必ずこんな日がやってくると理解していながら、結果として、あえて同じ道を選んでしまったのは、愚かな自分だ。死ぬほど後悔するとわかりきっていたのに、これ以上どこに行けるというのか。

もうどこにも、逃れられる場所すらないから、今、ここに立っているというのに。

身震いするほどの恐怖を、頭を振ることで、心から無理矢理追い出して、彼女はわざと、それまでとは打って変わって、づかづかと乱暴な足取りで門の前までやってくると、鎖の巻きつけられている取っ手へと光をあてる。

指定されたのはここだと思うのだが、何分にも初めて来た場所なので確証はもてなかった。

この埠頭に入ってから、聞かされた通り道なりに、一応注意深く見ていたつもりではあったが、ともかく暗くて、こんな風に銀色の塀に囲まれている敷地は他になかったと思う。

これで間違っていたら、どうするつもりなのだろう。

茶色に、粉が吹いたように変色している鎖と、これだけは新品らしい、赤銅色の南京錠を前にして、ふと思った。

この、考えていた以上に広い埠頭の中を当てもなく探し回るのか、それとも、無理だとあきらめて引き返すか。

わかっているのは、ここで帰ってしまったらおそらくもう二度と、機会は巡ってこないということだけ。

半ば上の空になりながら目をやれば、タクシーのライトで照らし出された時に見えたのと同じ状態で、がっちりとした錠が頑固に口を閉ざして、無骨に太い鎖にぶら下がっている。

もつと動きやすい格好をしていたとしても、とてもではないがこの塀を乗り越えられる、スポーツ選手並みの運動神経の持ち合わせはないので、ここが開かなければ中へ入れない。

安堵するような、残念なような気持ちが交錯する中、なんとなく南京錠に手を触れて、しっかり掛かっているのを試してみるつもりで引っ張った。

その途端、心臓がどくりと、大きな音をたてて脈打つ。

手と一緒に、鎖は涼やかな音をたてて片側がどんどん引き出されていき、南京錠を下げたまま、端がだらりと地面へと向かって滑り落ちたのだ。

手を放すことすら忘れて、彼女は凍りついた。

確かに現実としてとらえているのに、全てが信じられなくて、せわしなく視線が、手の中の鎖と、そこから地面に付きそうなほど下に、垂れ下がっている先端とに、行ったり来たりを繰り返す。

それでも、操られているかのようにギクシャクと不自然な動作で、何度となく南京錠を、取っ手やら鎖やらにぶつけて甲高い金属音を乱発させながら解いていくと、すぐに鎖は自らの重みで完全にはず

れ、アスファルトの上へとジャラジャラと蛇のようにとぐろを巻いた。

その途端、元々仮の物なので大して作りではない門は、鎖がその前にわだかまってストッパー代わりになっているのと反対側の扉を、軋みをたてて傾ぐような格好で自然と、人が通れるほどの隙間を開けてみせたのだ。

まるで、彼女を誘っているかのように。

故意によるものなのか、はたまた最後に鍵を閉めた人間のミスで偶然そうなったのか、いつからそうになっていたのかはわからないが、門はきちんと施錠されているように見えるだけの状態になっていたのだ。

緊張のせいかな耳鳴りが聞こえ、新たな恐怖が、彼女の全身を包んだ。

それでも。

ぐくりと生唾を飲み込んで、そろりと、しかしできるだけすばやくその隙間へと身体を滑り込ませると、そこで立ち竦んでしまった。全身からどっと、冷汗が噴出するのがわかる。

心臓が早鐘のように暴走し、神経が張り詰めるあまり貧血でも起こしたように、視野が急速に狭くなった。

一気に血の巡りの悪くなった指先が冷えて、感覚も鈍くなっている。

明らかに人気のない敷地の中へと、完全に入り込んだ彼女は、今にもこの場にへたり込んでしまいそうな、極限的な精神状態に、少しは落ち着きを取り戻そうと大きく深呼吸をした。

冷え切った空気が、肺の内側を鋭く刺激し、意識がはっきりする。それによって元の広さに戻り、闇にもだいぶ慣れてきた視界に、二十から三十メートルほど先になるうか、ぼんやりと冷凍倉庫らしい、白っぽいコンクリートの外壁が、ぼんやりと闇の中に浮かび上がっていた。

一瞬泳いだ視線が、しかし確かな意思を持って今一度、先を睨む

ように見据えた。

一步を踏み出そうとしてふと、手の汗を吸ったせいか、多少よれてしまった名刺に再び意識がむいた。

反射的に捨てようとした手が、躊躇する。

しばらく悩んだ後、結局決心がつかず、そっと、バックの中へとしまいこんだ。

それが振り返ることを否定した自分に残すことを許された、唯一の未練のような気がしたからだ。

後ろはもう、できるだけ気にしないことにした。

門までの調子では、いつになったらあの建物までたどり着けるのかわからないからだ。

そうは割り切ってみたものの、どれほど放置されていたのかわからない足元は、雑草の侵略に敗れ去ったアスファルトがあちこちで砕けているので、思った以上に足場が悪く、自然に足運びも慎重にならざるをえない。

こんなことなら店での見栄えは悪くなくても、中ヒールを履いてくるんだったと悔やまれるが、もう後の祭りだ。

あまり不自然にならないようにと気を配ったのが、かえって徒になったようだ。

あたりは耳に痛いほどの静寂に包まれ、聞こえるのは自分の足音と、浅く早い呼吸音だけ。

倉庫の正面に着いたところで、入りすぎていた肩の力を抜き、建物に沿って懐中電灯を走らせてみた。

奥へと向かう壁には、階数ごとなのか、何のために付いているのかよくわからない、シャッターが下ろされた出入り口のようなものがあり、その前は手すりのついた狭い露台があるのだが、それだけで、階段も何も、上下を繋ぐものは存在していない。

その1階と思しき部分も、床面は路上から首くらいまでの高さがある。

おそらくは物品を保管する倉庫内の床が、その高さなのだろう。

明かりを絞って光量を強め、上部を照らしてみると、上に同様のものが三つ見えるので、おそらく四階建てだと思われた。

こちらに他に出入り口らしい所は見当たらない。

正面には、かなり幅も高さもあるシャッターが三つ、細い支柱を挟んで、連続して横に並んでいるが、そのどれもがしっかりと下まで閉まっていた。

どうやら比較的新しいタイプの冷凍倉庫らしく、乗り入れた車両ごと、エレベーターで各階を移動していたようで、上へ行くための外付けのスロープもない。

どこもかしこも、きつちりと閉め切られている様子に、門が開いていたのはやはり偶然で、ここではないのではなかっただろうかという不安が、再びこみ上げてきて、それでもとりあえず建物をぐるりと一周してみようと、シャッターの前を歩き始めた。

それで何もなければ、いいかげんあきらめもつく。

時々、躓いて転びそうになりながら、それでもなんとかシャッターの前を無事横切り終わると、どうやら受付か事務所の入り口らしいドアがあった。

スチール製の、何の変哲もない銀色のドアは、放置されていた期間分薄汚れてはいたが、どこも歪んだり曲がったりしていないし、ノブについている鍵穴にも決じ開けられた形跡はなく、空き巣などの被害も受けていないようだった。

ひんやりと冷たいノブを握る。

ずっと恐怖を感じ続けているので、だんだん感覚も麻痺してきていた。

それがどんなに嫌な感情や状況であっても、その状態に置かれ続けると、人間というのは慣れてしまえるのだという。

精神崩壊を避けるための、防御本能の一種らしいが、今がそういう状態なのだろう。

それでも一瞬、間をあけてから手を捻る。

ロックされている時特有の、すぐに回転が止まる手ごたえはなく、

内蔵されているバネの重々しい抵抗と共に、ほんの僅か、ドアが手前へと動いた。

「ひっ！」

門の時同様、てっきり開くわけがないと思っていただけに、全身がショックで一斉に竦みあがった。

硬直は声帯にも及び、口からこぼれたのは、息を呑んだ拍子に出た、悲鳴というのもおこがましい『音』だった。

そのくせ仰天するあまり、後ろに勢いよく退こうとしたものだから、思いっきり足が絡まって、盛大にひっくり返る。

「痛たたたた……」

それこそ両足が空に向くほど景気良く転がってしまったので、地面に強く打ってしまった腰と背中を涙目になってさすりながら、やつとのことで上体を起こした。

しかし、手が離れるよりも後退の方が早かったようで、ドアは、長らく閉まりっ放しだったにしては大した音も立てず、意外なほど滑らかに動いていた。

そしてちょうど、四分の一ほど、蝶番を支点とした円運動を行なうて停止する。

風はない。

ぴたりと動かなくなったドアの前に、足を横に崩して座った格好で、固唾を呑んで見守ってしまった彼女は、あちこち痛みを訴える身体を宥めながら、慎重に立ち上がった。

幸い足を捻ったりはしていなかったが、他につかまれる物がないので、顔を強張らせたままドアノブに縋り、さらに濃い闇色の中を及び腰で覗き込んだ。

そこは、ちょっとした大きさの部屋で、倉庫側に腰ほどの高さにある簡易なカウンターと、かなり大きめなガラス窓のはめられた窓口が作られていたが、ただの受付にしては広すぎるので、事務所か何かと兼用されていたのかもしれない。

閉鎖の際に運んでしまったのか、債権者が持ち去ったのか

はわからないが、室内は何一つなく、コンクリート打ちっぱなしの床が寒々しい。

抜き足差し足、なるべく静かに踏み込んでみたが、屋内の分、音が抜けずに反響するので、靴音が余計に大きく聞こえて、気になっただけではない。

ガラス越しに倉庫内部を照らしてみれば、埃が付着して多少見通しが悪いその向こうに、トラックが走る通路とその左手、一段、という言葉では間に合わないほど高くなっている先からが冷凍倉庫らしく、ステンレスのようなスライド式の両開きらしい扉が、鈍く光を反射している。

手前の奥に、トラック用のエレベーターらしい扉が、また微妙に見えていた。

この中をどうやって探したものと途方にくれながら、奥に向かって進んで行くと、窓口の先に、どうやら倉庫内へと出られるらしい、この入り口と同じ形状のドアを発見した。

しかも、倉庫内に向かって開いているのだ。

慌てて周囲を見渡すが、この部屋は建物の中にあるというだけの箱状なので、何も置かれていない今、内部に隠られるような場所は一切ない。

急に強い冷気を感じた気がして、身震いしながら、思わず自分で自分の身体を抱きしめるように腕を回した。

誰かがいる。

敷地の入り口からここまで、全てを偶然で片付けるには、あまりに出来過ぎていて。

倉庫の中で確かに、それを成した人物が自分を待っているのだ。ここで間違いなかった。

そう思った瞬間、全身が寒気立った。

今までの漠然としたものとはまったく違う、心臓といわず脳を直接驚かすにされたような、パニックすら起こせない、強烈にして純粹な戦慄。

気が狂いそうになって、あちこちに懐中電灯を振り回し、照らしてみるのが見つからない。

来い、と言っているのだ。

直感でそう感じ、からからに干上がった喉が、息をするたびにひゅうひゅうと、病人のような細かい音をたて始めた。

自分の意思で、自分の足で、来いと。

彼女は、敷地内に足を踏み入れてから始めて、後ろを振り返った。開いたままにしてきた、ここに入るためのドア。

距離にすれば十メートルとはいはずの、いくぶん闇の薄い外が、やけに遠く思えた。

どうしてここに居るのだろうか？

何も考えられなくなりそうなほど、心は慄いているのに、唐突にまた、その問いが浮かんだ。

以前から、インターネット上に、ある不可解な噂が流れていた。

一度、ぎゅっときつく目を閉じ、汗ばむ両手で祈るように、懐中電灯を握り締める。

ネット上を不規則に、消えては現れるそのサイトでは、金銭でないものを報酬に、ある事を請け負ってくれるという。

そろりと目を開け、きゅっと唇を噛み締めると身を翻して、原初の恐怖をより刺激する、さらに暗い闇へ入るためのドアへと向かった。

今から思えばまるで導かれたように、接触できたそのサイトに、戸惑いもなく、思いの全てをぶつけるように書き込みをしたら、数日後に、メールアドレスを書いておかなかったにもかかわらず、メールが送られてきて、ここを指定された。

平らなコンクリートの床だというのに、足がもつれ、砕けそうになる膝に、必死に力を込める。

そして、迷いながらも結局、了承するメールを送ったから。そのままでは通れないので、もう少しドアを押し開ける。

普通ならば、性質の悪すぎる冗談としか思えないその内容を、信

じずにはいられないほど、追い詰められていたから。

何の光源もない空間は、広さがある分、懐中電灯の明かりすら、呑み込んでしまいそうだった。

「あの……」

支配する痛いほどの沈黙の中に、彼女が振り絞った声は、蚊が泣くような頼りなさで、拡散した。

「どなたかいらっしゃいませんでしょうか……？」

すでに空いて久しい倉庫で、しかも誰の許可も取っていない、いわば不法侵入者としては非常に不適當な呼びかけではあるが、他にどうしていいのか見当も付かない彼女にとっては、至極まじめで、精いっぱいの行動であった。

「……あの……御依頼申し上げました、立花美和子です……」

靴音と共に、声が虚しく反響を繰り返す中、それでも美和子と名乗った彼女は懸命に呼びかけ続けた。

いや、一度声を出してしまうと今度は、止めた後の静寂が恐ろしくなってしまったのかもしれない。

先ほどの部屋と同様、あるのは埃ばかりの倉庫部分を、あちらこちらと忙しなく見回しても、全体を視界に納めきれず、不安ばかりが募っていった。

その漆黒の中、微かに、何かが瞬いた。

美和子はその下を、気付くことなく通り過ぎていく。

それも無理はない。

おそらく大型トラックの通行時に邪魔にならないように、床からならゆうに、五メートル以上の天井付近に張ってある、かなりの太さのパイプの上に、それは存在していたのだから。

まして、さらにパイプから天井までは、大人なら四つん這いになるのがせいぜいくらいの隙間しかない。

それは、パイプの上に寝そべるような格好で、まったく闇に同化して潜んでいた。

いや、まったくというのは語弊があった。

たった一ヶ所、隠しきれない部分があったからだ。

ダークグリーンに煌めく一対の瞳。

まるで夜の闇の中に浮かぶ野生動物の目のように、とても人間のものとは思えない輝きを発していた。

だが、どうやってそこまで上ったのだろうか？

もちろん、脚立のようなものは見当たらない。

そんなものがあれば、美和子とはとくに、その存在に気が付いたに違いない。

また、床から直接、パイプかどこかにロープ状の物を引っ掛けるにしたも、大の大人が上で寝そべれるほどの太さで、しかもこの高さである。

映画に出てくる忍者やスパイが使うような、先にかぎ状の重りがついている特殊な形状でなければ、投げたとしても巻きつきも、引っかかりもするわけがない。

まして、壁をよじ登ってパイプに取り付くのはそう難しくなくとも、そこからここまでその上を這ってくるなど、昼間でも真っ暗であろうこの中では、障害物も多くてとても無理だ。

それに、こんな場所を指定してきただけでも、とても尋常とは思えないが、なぜ危険を冒してまで、あんな場所に潜んでいるのかもわからない。

顔を隠したいのなら、サングラスやマスクだけで、十分のはずだ。何もかもが不可解な存在が、そこにはいた。

美和子は、半ばくらいまで歩いても返事がないので、肩を落とし、それでももう一度と、気を取り直して口を開こうとした時だった。

ゆらりと、闇の気配が揺らめいた。

「……聞こえていますよ」

はつきりとした、男の声だった。

不意打ちに、美和子は勢いよく後ろを振り返ったが、誰もいない。もう一度、前を見ても、誰もいない。

右も左も、見えるのは闇だけ。

声だけの見えない存在に、瞳孔がキュウっと引き絞られ、それまで我慢に我慢を重ねてきた何かが、切れた。

「誰！？ どこに居るの！！」

金切り声を上げ、気でも違ったごとくくるくると、声の主を探し出そうと必死になってダンスを踊るように回転する滑稽な姿を睥睨し、気配は無音の笑いを漏らした。

「ついでに、お姿も良く拝見できます」

極度に抑揚の低い声ではあったが、その中にうつすらと、美和子が怯える様を楽しんでいる含みが感じ取れた。

そこでようやく彼女は、『声』が、上から降り注いでいると気がついた。

探し回るのを止め、こわごわと仰のいて、その鮮やかなダークグリーン双眸と目があう。

突然、すっと、身体を支える力が抜けて、崩れるように、冷たく、埃の積もっている床の上にへたり込んだ。

人間ではない。

あんな、見るものを凍てつかせずにはいられない、孤高の星の氷炎を宿せる人間などいるわけではない。

目を見た瞬間、本能が警告した。

しかし人間ではないというなら、いったいなんだというのか。

発する言葉に不自然さはなく、むしろ流暢ですらある。

彼女はこの瞬間に、本当に、取り返しをつかないところまで来てしまったことを、まざまざと実感したのだ。

「詳しい話を伺いたいのですが？」

笑い声が聞こえたわけではない、それでもはつきりと、闇が笑いを形作るのが見えた気がした。

冷水を浴びせられでもしたように、美和子は身震いする。

その言葉が、恐怖で埋め尽くされていた彼女の心を、正気へと立ち返らせていた。

ギリリと音が聞こえそうなほど、きつくかみ締めた唇には、うつ

すらと血が滲んだ。

慄いていた瞳に、それまでとは比べ物にならない、激しい光が宿る。

ゆらりと、パイプの上を睨みつけたまま立ち上がるその姿は、儼さすら感じられた美しさは消え去り、さながら、地獄からさ迷い出た幽鬼のようだ。

「木内貴史を……」

美和子は思い出していた、どうしてここに来たのか、を。

「義兄を、姉の夫を殺してください！ 私達姉妹を破滅させ、姉を死に追いやったあの憎い男を！」

どこに、こんな激情が隠れていたのだろう。

そう自分でも不思議に思うほど、声は火を吹かんばかりの憎悪をまとってあふれ出した。

もしかすると、抑圧され続けた本性だったのだろうか？

息を切らす彼女の前に、沈黙が降りた。

人殺しを頼まれているというのに、ダークグリーンの瞳には、まったく動揺の色はない。

ただそこに存在して、彼女を見つめている。

「……報酬が金品ではないことは、わかっていらっしやいますね？」

声は若く、そこから判別すれば、年の頃は二十代前半くらいとも思えるが、やけに丁寧な、若者らしからぬ話し方をする。

相変わらず淡々としながらも、交わされる会話は、とんでもない内容ばかりだ。

立花美和子と名乗った美女は殺しを望み、この何ともつかぬ存在は、報酬如何によってはそれを受ける気らしい。

彼女は、最終確認ともとれる宣告を聞いて、全身を強張らせた。

「もちろん、です」

わずかな間の後、こくりとうなずき、寒さからではない色を失くした唇が、震えながらそれでもしっかりとそう答えた。

「結構です」

冷たさすら感じるほどに、変わらぬ声がそう告げると、ダークグリーンがすつと上へと移動し、天井ぎりぎりあたりで停止する。

考えてみれば、もちろん這いつくばったままでは何もできないにしても、それが四つん這いになっただけなのだから、奇妙な格好なものには変わりない。

「確かに、ご依頼お受けしました」

その応えに、美和子はぎこちなく、しかし満足そうなほの暗い笑みを浮かべた。

これでいい。

両腕をだらりと下げ、わざと力を緩めた手から、懐中電灯とバツクが、重々しい音と一緒にコンクリートの上に落ちた。

これで何もかも、終わらせることができる。

カラカラと転がる本体にあわせて、歪に変形した光の輪が、壁と床を移動していく。

パイプの上のダークグリーンが、唐突に掻き消えた。

瞬きでもしたのか、それほどの刹那。

何かが、喉笛へと喰らいついた。

生暖かい息を感じる暇もなく、牙のような尖ったものが、たやすく柔肌を破って食い込んでくるのを、美和子は感じとった。

悲鳴を上げたと思った。

しかし開いた口から飛び出したものは、喉を食い破られたことによつて溢れた、大量の血液だ。

痛みというより、焼け付くような感触が彼女を襲う。

いつの間にか仰向けに倒れた身体の上に、その何かが乗りかかって、鋭く爪を立てて押さえ込んでいた。

陽炎のような揺らめきが、美和子の全身を覆い、それが、身体の上に乗っているものに流れ、すいこまれていく。

否、それは命そのものだ、と、ぼやける視界の中で、漠然と理解した。

命が流れると共に、記憶もまた流れていく。

何もかも幸せだった幼い頃。

家は比較的裕福で、両親の仲も良く、絵に描いたような家族だと周囲から羨まれていた。

それが崩れたのは、両親の命を奪った交通事故だ。

この世に置き去りにされた姉妹の元に残された、二人では大きすぎる屋敷と、賠償金と保険金を含んだ財産を食い物にしようと、蛆虫のごとくたかってきた自称『親戚』の大人達。

世間知らずで怯えることしかできなかった自分を、きっと恐かったのは同じだったに違いないのに、必死になって守り通してくれたのは、五つ違いの姉だった。

お嬢様育ちのおっとりとした性格だと思っていた姉は、まるで人が変わったように、その蛆虫を振り払うために獅子奮迅した

遺産を、父が経営していた小さな会社を奪おうとする親戚達の甘言や脅しに屈せず、逆にありとあらゆる手段を講じて咬みつき、追い払い、進学するはずだった大学を、通信制に切り替えて社長に就任すると、それからの人生を、ただがむしゃらに生き抜いていった。自分が姉という存在を頼りにしたように、姉もまた、守るべき自分という存在がいたから、あれほどなりふり構わず進めた。

姉を親代わりに大学を卒業し、これからはやっと思返しができる。そう喜んでいた矢先に、その男は、姉の前に現れた。

ハンサムな、優しい男に思えた。

物腰も柔らかかで、大人で、処世術にも長けていた。

木内貴史と名乗った男に、姉はおろか、自分までもがすっかり虜になってしまった。

それでも、姉が幸せなればと、身を引いたのに。

結婚して、初めて知れた男の本性。

気が付けば会社は人手に渡り、食べていくには困らない程あった財産も全て、木内によって食い潰されていた。

それでも飽き足らずに、ついに姉は、貢ぐ金欲しさに風俗へと身を落とした。

そうして、慣れない仕事にボロボロになった挙句、あっさりこの世を去ってしまった。

姉の保険金、それはまだ良い。

唯一残っていた、思い出の詰まった家すら、遺言状のせいで義兄の手に渡った。

葬儀にすら、まともに参列しなかった義兄に、涙すら出なかった。そんな姉を哀れみ、義兄をひどく憎んでいた。

そのはずだったのに。

姉と結婚した直後から、誘惑されて関係を結び、そして死後は、同じ道を歩んでしまっている愚かな自分。

あの男が殺したいほど憎い。

でも、殺せないほど愛しい。

いつでも相反する思いに、引き裂かれそうになりながら、男を繋ぎとめて、偽りでも愛を囁かれれば、一も二もなく喜び、酔いしれていた。

しかしそれも、二十台も半ばを迎えた自分では、そう長くは続かないだろう。

憎いのなんのといいながら、結局あの男を、他の女に渡したくないだけなのかもしれない。

ビクビクと、美和子の身体が断末魔の痙攣に震え、陽炎がゆっくりと小さくなってくる。

その最後の一滴にいたるまで命をすった証のごとく、自分を見据えているダークグリーンの瞳の片方が、鮮やかな真紅に変化していくのを、陶然と見ていた。

それが彼女の、最後の意識だった。

Scene 4

闇は、真っ赤な光に切り裂かれていた。

埠頭を埋め尽くした、パトカー及び覆面パトカーの中にただ一台、場違いのように止まっているタクシーの前で野瀬は、二人の刑事に向かつて浮かない顔で経緯を説明していた。

「もちろん止めましたよ。ここは女性が一人で来るような場所じゃないのは、噂だけとはいえ、十分知ってましたから。」

ここで降ろした女性の容姿、服装、どこで乗って、その時や降りた時の様子など、事細かな質問に、記憶をできうる限りほじくり返して答えた。

「どうしてもって言われなきゃ、こんな所で降ろしたりしませんよ」
語気の強さとは裏腹に、後悔しきりらしい顔付きは、どんどん意気消沈していく。

あの時、彼女が前に立っていた門は広く開け放たれ、何人もの警察関係者が、忙しく出たり入ったりを繰り返している。

そんな様子に、人相はあまりよくないわりに人情家らしい角刈りの、同年代の刑事の館川保は、たてかわたもつ頭を振り振りその肩をたたいて慰めた。

「お前さんも客商売だからな、そう言われれば仕方ねえな。なにせこの不景気だ」

その傍らで、最近コンビを組んだばかりの、三十ほどのまだ若い刑事の虎賀大牙が、こがたいが熱心に証言をメモしている。

タクシーはここまで案内役をつとめたので、彼女を降ろしたのとはほぼ同位置に止められていた。

「他になんか言ってたかい？」

館川は、よれよれの紺のコートのポケットから、同じくよれよれのタバコを取り出して咄ええると、野瀬にも勧めるが、彼は吸わないからと手を振って辞退した。

「確かめたわけじゃないんですが、誰かと会うようなことを言ってみましたよ。だから終わるまで待つって言ったんですけど、携帯があるし、何時までかかるかわからないからって断られたんで、名刺を渡したんですよ」

恐れていた事態が現実となってしまったことにぼやくと、館川は少し驚いたようだ。

「へえ、最近はタクシーの運ちゃんも名刺を持つのかい」

それに野瀬がうなずいたところで、しばし会話が切れた。

丁度、さらに一台、白いバンタイプの車が、屋根の上にぼつんと乗った赤色灯を誇示しながら、ゆっくりとした速度で所狭しと停車しているパトカーの間をぬい、門の中へと入っていくのを、なんとなく三人で見送ってから、再び野瀬は話し始めた。

「会社の方針なんですよ、指名客を取るための。でも、あんまり気になるんで、そのまま待つてようかとも思ってたんですけど、考えることは同じだったみたいで、あの人もこっちが動くまで梃子でも動かないつもりだったんで、この中もよく知らないし、しょうがないんでそこでＵターンしてここを出たんです」

そう言って、伸び上がりながら示した十字路の方を刑事二人が揃って見やり、館川はすぐに視線を戻して尋ねた。

「相手が誰なのか見たかい？」

手早く状況を書き綴っていく虎賀は、さすがにまだシャレっ気があるのか、それとも奥さんのセンスがいいのか、ダブルの濃いベージュのカシミア風のコートを、きっちりボタンを留めて着ている。

優男に見える顔が難しいのは、あまり野瀬の証言を信じていないのだろう。

言っではなんだが、第一発見者を疑うのは、常道だ。

「さすがに気になったんで、埠頭の入り口からそう離れてないところに車を止めて、一時間近く待つてたんですけど、通り過ぎる車はいましたが、結局誰も来ませんでした」

力なく首を横に振った野瀬に、まあそうだろうなと館川は煙を吐

き出しながら、口の中で呟いた。

「そうこうしてるうちに、パトロールに来たパトカーが後ろに見え
たんで、思い切って車から降りて声をかけたんですよ」

「どれくらい話をしたんですか？」

それまでまったく口出してこなかった虎賀が、いきなりボールペ
ンを突き出しながら話しかけてきたものだから、軽くのけぞった野
瀬の視線は寄り目になってボールペンの先に集中してしまい、思わ
ずどもる。

「け、警官にこっちから話しかけるなんて、そうはないんで、ちょ
っとあやふやなんですが、たぶん十分か、十五分くらいだと思います
すよ」

自信がなさそうに言われて、渋面になった館川が、そのボールペ
ンをよけてやりながら、低く唸った。

尖端恐怖症のわけではないが、あまりいい気持ちはしなかったの
で、安堵の息を小さく吐く。

「ずいぶん時間がかかったな」

親しい者同士が立ち話をするのとは違うのだし、職務質問を警官
の方がかけたわけではないのだから、結構な時間だろう。

「中々わかってもらえなくて、最初から説明し直したりして……。
私もけして話し上手な方じゃないですし」

館川は、さらに渋い顔になって頭を掻いた。

それもまあ特にその時点で、犯罪行為があったわけではないし、
仕方ないだろう。

こうした犯罪にはなっていない段階のケースに積極的に関わろう
とする者は、制服警官でもそうはいない。

実際それが問題になって、マスコミにいいように叩かれている。

「それで、一緒にここに入ったわけか」

念を押され、野瀬はまたうなずいた。

「ええ、この中は同じような所ばかりですから、とりあえずここま
で案内しました」

その間にパトロール中だった二人組みの警官は、無線で応援を呼んでいるのでそれは間違いない。

「ここで、応援のパトカーを待ってたんですね？」

「ええ、そうです」

今度はボールペンを突きつけられなかったので、きちんと虎賀の顔を見て答えられた。

「すぐにもう一台パトカーが来て、そこに乗ってた二人の警官の内の一人が私と残ってくれて、他の三人で中に入っていました」

なにせ場所が場所なので、一応逃走防止と護衛と両方の意味で、当然の処置だ。

「あそこは開いてたのか？」

灰を落しながら館川が顎をしゃくって門を示すと、野瀬は難しい顔になった。

「あの人を降ろした時は、しっかり鎖が絡まって、遠目ながら鍵が付いてるのも見えたんで、てっきり閉まってると思ったんですが、警官と来た時には、人が一人通れるくらいには開いてました。あれ見たときは心臓が止まるくらいびっくりしましたから、良く覚えてますよ」

思わず警官ともども、車を飛び出して門の前に走りよって、顔を見合わせてしまったくらいだ。

「三人が中に入ってる間は、どうしてたんだ？」

質問の意図が掴みきれずに、野瀬は首を傾げたが、戸惑いながらも口を開いた。

「どうって言われても……。残った警官と話をしましたよ。向こうは応援に呼ばれて駆けつけたんで、詳細を知りませんから、また一から説明してたんです。そうしたら、なんだか遠くで音が聞こえたような気がして……」

良くわからなかったが、何かが盛大にぶつかったような音が、一度ならず二度三度と少し離れた場所から、それもだんだん近付いてくるように聞こえてきて、何事かと驚いた二人が話を止め、門の方

を見ていると間もなく、泡を食った警官の一人が飛び出してきたのだ。

その後はもう、二台のパトカーから警察無線が乱れ飛び、あっという間にこの赤色回転灯の洪水と相成ったわけだ。

「そうかい、いろいろ聞いて悪かったな。……それから、あんまり良い気持ちはしないと思うが、最後に仏さんを確認してつてくれな
いか。生憎今のところ、あんたしか彼女を見たって人がいないんで
な」

もう一度、ぽんぽんとその大きな手で軽く肩をたたいてやると、
館川は少し言葉を濁しながら、身元確認を頼む。

野瀬も、それなりに覚悟はしていたのだろうが、実際刑事の口から
言われると、現実味が増したせい、一氣に顔色が悪くなった。

身元不明の死体の確認など、たとえ身内だとしても良い気持ちは
しないだろうに、それが名前も知らない行きずりの客では、気には
していたといっても無理はない。

「本当に……、亡くなってしまったんですか……？」

喘ぐように呻く野瀬に、虎賀は淡々と事実を述べた。

「ええ。こんなところに若い女性が、そう何人もいるとは思えませ
んから。……間違いなく死んでます」

その途端野瀬は、いきなり十も年を取ったように、がっくりと肩
を落とした。

「あの時やっぱり、無理にでも止めるべきだったんでしょか……
？ 今はどうあれ、きつと良いとこのお嬢さんだったのに……」

独り言にも似た呟きを、館川は聞きとがめた。

「良いとこのお嬢さん？ ホステスなんだろう？ 何でそう思うんだ
？」

野瀬はしょんぼりと見やった。

「とても丁寧な話し方をしてましたよ、行儀も良いし。ああいうの
は、にわか仕込みじゃ私ら相手に自然に出たりしませんよ」

おそらくは遺体が搬出されたのだろう、別の刑事が迎えに来て、

相当に落ち込んでいる野瀬は背に腕を添えられて、まるで逮捕された容疑者のようにしおしおと歩いていった。

その背中を見送って、虎賀はその耳元に囁いた。

「あんな事言ってますけど、あの運転手が殺したんじゃないですか？」

第一発見者は、この場合厳密に言えば現職警官だが、通報というか、報せたのは野瀬だから同じ様なものだ。

「第一発見者を疑えてか？」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らす館川に、虎賀はむっとした顔ををした。

「じゃあ聞くが、凶器はなんだ？ どうやったら、喉笛をあんな獣が食いちぎったようにできるんだ？」

反対に問い返されて、虎賀は詰まった。

それは彼にとっても最大の謎だったから。

「アイスピックのような物なら、可能なんじゃ……」

「本気で言ってるのなら、刑事なんかやめちまえ」

ぴしゃりと鼻っ面を言葉で打たれて、虎賀は元々苦し紛れだっただけに、縮こまった。

「すいません」

苦虫を噛み潰したような顔で、館川は最後の一息を吸い込むと、足元にタバコを落として踏み消した。

「……お前が知らないのは無理もないが、これと同じ様な事件が前にも起きてるんだ」

あまりに苦々しい口調に、弾かれたように虎賀は、館川を見つめた。

「もう十年も前の話だ。死因は喉をイヌ科のような生き物に食いちぎられてのショック死。……まあ、即死だな」

「イヌ科のような生き物……ですか？」

なんとも曖昧な表現に、虎賀が首を捻るのを見て、館川は肩をすくめた。

「歯形からそう判断されたんだが、でかすぎるんだそうだ」

それに、さらに首を捻る。

「何がですか？」

「噛み痕が、だ。強いてあげるなら、狼が一番近いって、その時は言われたな」

淡々とした口調で告げられたにしては突飛な内容に、虎賀は呆氣に取られて、素っ頓狂な声を上げていた。

「狼ですかあ?!」

女子高生のように上がった語尾に、館川が渋い表情のまま頷く。科学的に調べた結果がそれなら、事実なのだろうが、開いた口がふさがらず、虎賀はなんとやっていいのかわからなかった。

日本に生息していた野生の狼、日本狼が明治を最後に絶滅したのは有名の話だし、それ以来生存説は、事あるごとに囁かれていたが、実際確認されてはいない。

とはいえ、動物園には灰色狼など、何種類かの外国の狼が飼われているし、犬と狼の混血を、犬として飼うことは十分に可能だから、一概には言えないにしても、山や森というならともかく、こんな都会のど真ん中というのは、あまりにも信憑性が薄い。

もちろん当時、ありとあらゆる可能性が考慮されて捜査されたが、どこからも狼や大型犬が逃走、もしくは行方不明になったという事実はなかったし、大掛かりに何度となく実施された野犬狩りにも、捕まるのは野良犬ばかりで、結局徒労に終わった。

しかし、そんな事件が今、現実として、自分達の手元に再び転がり込んできていることの方が、ある意味悪い夢のようだ。

「……しかも、それが東京だけじゃないといったらどうする？」
ピクリと、虎賀の肩が揺れる。

「日本の各地で起きてるんだ。時期はバラバラだがな」

館川は、新しいタバコを引っ張り出した。

ぐるぐると考え込んでいた虎賀は、追い討ちをかけて聞かされたそれに、えっ、と声を詰まらせた。

どうやらそれが最後の一本だったらしく、空箱を握り潰すと、さすがにこれはポイ捨てせずにポケットへとねじ込んだ。

「そして、そのどれもが迷宮入りだ。犯人は捕まえるところか、その尻尾すらつかめたためしがない」

まあ、實際手を下したのは人間じゃないようだがな、と安っぽい百円ライター、それもどこかの食堂のもらい物らしく、店名の入ったその炎が、深い皺の刻み込まれた横顔を、仄かに照らし出す。

それを啜えたタバコの先に近づけると、赤く火が移った。

これによって、また新たな疑問が浮かぶことになってしまった。

犬の寿命というのは、近年人間と同じ様に餌をはじめとする生育状況が著しく改善されたことと、医療技術の進歩により、かなり伸びてはいるが、大型犬になればなるほど短くなる傾向にあり、十年たてば十分に老犬といえる。

狼とて、その親戚のような存在なのだから、寿命に大差があるとは思えないし、野生動物という観点からすれば、もう少し短くても不思議はないはずだ。

それなのに歯形は、改めて調べなおしてみると、ほぼ間違いなく同一と鑑定されたのだ。

ありえないはずなのに。

「完全犯罪ってやつかい？」

もちろん、それが言葉として存在するのは十分に承知していたが、一連の事件を知るまで、実在するはずはない、実現することなど不可能だと信じていた。

所詮は、推理小説の中だけの絵空事だと。

ふうっと夜空に向かい、混迷の煙を吐き出す。

そんな風に弱気になった館川の姿を見たことのなかった虎賀は、呆然と煙の行方を眼で追った。

ふと、それでようやく辺りを見回す余裕ができて、というより、飽和状態になって何も考えられなくなり、心理的な狭間ができたために、漂う静寂に気がついたのだ。

二人は野瀬の事情聴取のために、捜査の中心である倉庫から離れた所にいたのもあるが、それにしてもなんとなく物寂しいというか、静けさが耳に痛い。

首だけぐるりと一巡りさせてみても、違和感の正体がつかめずに首を傾げる。

「KEEP OUT」のアルファベットの入った黄色いビニールテープが、自分達のわりとすぐ側に、道路を横断して張られているのに目を留め、さらなる違和感に襲われた。

現実逃避、というか、試験が迫っているのについて掃除などを始めてしまうのと、似たような心理なのだろうか、気になりだすと止まらなくなっていた。

思考をそちらに切り替えてしまつて、またしばらく悩んでから、ようやく合点がいった。

「そうか、野次馬がないんだ」

手を打つまではいかなかったが、つい口に出してしまい、館川に怪訝な顔でみられる。

これだけの騒ぎになっているにもかかわらず、周囲に野次馬はただの一人も見当たらないのだ。

自分達警察にしてみれば邪魔をする者がいないのはありがたいが、それにしても人間心理を考えれば、いかに深夜と言えどもこの埠頭以外にはそれなりに住人がいるはずなのに、かなり奇妙な話だ。

「なんだ、神妙に考え込んでると思つたら、そんなことか」

あきれた声を出す館川に、虎賀は頭を掻いた。

「なんか、いきなり気になりました……」

気恥ずかしそうに口ごもりながらも、やはりどうしても気になった。

人間の好奇心の強さは嫌というほど知っているから、周りに誰も住んでいないというわけでもないのに、これほど誰も見物に来る者がいない現場と言うのを、虎賀は経験したことがなかった。

「そうだな、まだマスコミが嗅ぎつけてないようだからな」

館川は入り口の方の道路を見透かしながら、煙を吐き出した。

一応誰も入って来れないように、数名の警官を埠頭の入り口に配置はしたが、この段階では、おそらくはかなり暇を持て余していることだろう。

「なんで、誰も出て来ないんですかね？」

虎賀の疑問はもっともで、館川は疲れたように、頭をなで上げた。何せ、通報された時間が時間なので、徹夜になってしまいうさだ。

「この埠頭じゃ年に数度、こんだけの規模になることはないが、警察沙汰が起きてるんだ。まあ、大抵は少年課の手を煩わせるような事件ばかりだがな。この辺に住んでるのは年寄りが多いから、関わり合いになるのを嫌がるのさ」

家の中でパトカーのサイレンを聞いても、またかと顔を顰めるだけで、わざわざ見物しに来たりはしないのだ。

「これが消防車のサイレンでもあれば、吹っ飛んでくるだろうがな」
ぼやく館川に、そんなもんですかねと、虎賀は首を捻る。

「火事は、風向きしだいで類焼するかもしれないが、犯罪は、関わらなければ飛び火しないからな」

館川のしかめっ面に、虎賀は納得した。

「それじゃ、目撃者はダメですね」

そして溜息をつきながら、後に続くであろう言葉を口にした。

関わり合いになるのを嫌がるのでは、奇跡的に見ていたとしても、名乗り出て証言してもらうのは難しいだろう。

「聞き込みをしないわけにはいかんが、まあそういうこった」

この仕事をしていると往々にあることだが、二人とも、なんともやりきれない気分になって、空を見上げた。

そうした周囲の状況を熟知して、ここを犯行現場に選んだというなら、犯人はこの辺りをよく知っている人物、もしくはこの東京という都市に潜む空白地帯を、手に取るように把握している人物という事になるのかもしれない。

脳裏に、まだ見ぬ犯人像を描きながら、一方ではこの都会の冷酷

さを、こういうときは身に染みて感じられた。

目と鼻の先で人が一人殺されても、日常は何も変わらず、昨日と同じ今日が、夜が明ければ淡々とこの街でも繰り返される。

見て見ぬ振りで。

自分達警察は、その都会の無常の砂漠の中を、水ならぬ犯人を求めて、彷徨い続けなければならない。

聞き込みに回れば疎ましがられ、犯人の逮捕が遅れば、無能な税金泥棒と罵られる。

慣れたはずのそれが、時々、無性にたまらなくなるのは、心を持った、血の通った人間だからだ。

視線の先に浮かぶ、今にも消えそうな月が、二人のそんな心情を無言で象徴しているようだった。

Scene 5 (前書き)

多少グロテスクな表現がありますので、嫌いな方は注意してください。

Scene 5

閑静な住宅街の一角に建つその家は、建てられてから三十年以上経過しているが、古びたというよりは風合いの増した、瀟洒な洋風建築の一戸建てだ。

煉瓦調の外壁は、風雨にさらされて黒ずんではいても、元々がシックな色でまとめられているので、重厚さがまして、本物の煉瓦のように見え、かえって趣が感じられる。

外見は二階建てだが、急角度の、強く黒味を帯びた赤色の屋根の中に、屋根裏部屋があるのは、いくつか突き出した、小さな屋根つきの小窓からもわかった。

Ｌ字型の大きな、屋敷と呼んでも過言ではないこの家は、建築当初から趣味の良さで、周囲からは評判だった。

それなのに、十年程前に交通事故で姉妹を残して両親が亡くなり、数年後に、姉の方は結婚して、夫婦で暮らし始めた頃から、なにやら荒れ出し、二、三年ほど前にその姉が病死して、誰が住んでいるのかもよくわからない状態になると、どんどん寂れていった。

ただ、時々ガレージに、真っ赤で派手なスポーツカーが止まっていたり、溜まりがちではあるが、郵便物や新聞が配達されたりしているところを見ると、姉の夫が一応、住居にはしているようだ。

その家が、今日に限ってやけに騒々しく、物々しい雰囲気にかまれている。

通勤通学も一段落したこの時間帯は、いつもなら通行量もがくと減り、高級住宅街特有の、ゆったりとした静けさが戻ってくるはずなのだが、歩道のない、片側一車線の道路の両側に、びっしりとアブラムシのごとくたかっているのは、大きな望遠レンズを着けたカメラを手にしたカメラマンやら、TVカメラを担ぐクルーの前でマイクを握りしめてしゃべりまくっているリポーターやら、全てはマスコミ関係者だ。

本来なら、掃除に洗濯にと、家事仕事が一番忙しい頃合なのだろうが、この有様では、前後左右に隣接する、ご近所向こう三軒くらいまではさすがに手がつかないとみえて、眉をひそめながら遠巻きにしてひそひそと話し込んでいる。

数日前に、埠頭の空き倉庫の中で殺されていた、立花美和子の遺体が生家に帰ってくるのは、葬儀日程の告知の紙が門に貼られていたので皆知っていた。

これで、あの洋館に住まっていた一家は、姉の夫を除き、血縁者全員が死んでしまったことになるのだから、それだけでも恰好のネタなのに、言っては何だが、あの美和子の死に様である。

芸能界の醜聞も事件も、ここ最近ぱつとせず、話題に飢えていたマスコミが、ここぞとばかりに飛びついて、連日、センセーショナルに報じまくるのも当然だろう。

そして、例え迷信深くはなくとも、気味悪がって、周囲の住人が関わり合いを避けるのも、また無理からぬことであった。

おかげで、ワイドショー恒例の御近所のインタビューはちっとも成果が上がらず、口を噤むどころか、取材と知るとに誰もが、呪いとも不幸ともつかぬものにとばかりを恐れて家にこもってしまうので、TV局ばかりでなく、新聞社も出版社も、苦心惨憺したようだ。

先端が矢の形に尖っていて、一応の泥棒除けにもなっている、大人の胸ほどの高さのフェンスの内側に、立花夫妻が健在だった頃は、定期的に庭師が綺麗に刈り込みに来ていたという目隠しを兼ねた生垣が、すでに伸び放題になって、人の背丈をはるかに越えて密集している。

その向こうには、母親が丹精を込め、その後を姉妹が仲良く引き継いだ美しい庭があったそうだが、この調子ではおそらく、同様の運命を辿ってしまっているのだろう。

生垣の上から中の様子を盗み撮るために、敷地の端っこ付近の路上にある電信柱を支え代わりに脚立を立て、またそれを支え代わり

にした同じような脚立が並び、その上に数人が居座って、退屈そうにあくびをしながら、意外としっかりしている生垣の腕を組んでもたれかかっていたカメラマン達が、誰かが玄関扉を開けて出て来たのを発見し、慌てて背中の方に回していたカメラを構えると、その人物に向かって盛んにシャッターを切り始めた。

今か今かと動きがあるのを待ち構えていた、Vクルー達もそれに気が付いて、まさかこちらはフェンスや生垣によじ登るわけには行かないので、我先に唯一、庭先が望める門へと殺到する。

すると、僅かなタイムラグをおいて一人の男が、フェンスと同じヨーロッパ風のデザインの門へと姿を現した。

門には、セラミック製の黒に近い灰色の表札がかけられ、『K I U T I T A K A S H I . Y U K I E .』と、姉夫婦の名が彫られていた。

近距離からの撮影を待ち構えていたフリーのカメラマン達が、高性能なデジタルカメラで激しいフラッシュの嵐を浴びせかけるのを、きっちり仕立ての良い、高級服地の喪服を身にまとった、見るからに女性受けしそうな甘い二枚目の顔立ちの男は、遠慮というものを知らぬ攻勢に驚き、それからきつく眉間に皺を寄せた。

まったくこの連中のしつこさといったら、最初こそ愛想よく振舞っていたものの、この数日ですっかりうんざりした。

この男こそが、現在この家の主であり、噂の中心人物、死んだ美和子の姉の夫である。

「木内貴史さんですね」

主婦達が好んで見るような、ワイドショーのリポーターなのだろう、多少とうのたった女性が、貪欲に押し合い圧し合いするマイクの群れの向こう側から発したのは、とりあえず疑問系をとっている断定だ。

あつという間に門越しとはいえ取り囲まれ、そのまま押し入られてきそうな勢いに、顔が引きつり気味になるのを抑え、ここに出てきた事情が事情だけに、できるだけ神妙な表情を作る。

「現在の心境をお聞かせください！」

「今のお気持ちをぜひ！」

「義妹^{いもいへ}さんを殺した犯人に、心当たりはないんですか！」

四方八方から次から次へと、質問というよりは詰問を浴びせかけられ、ちよつとしたパニックが起こった。

それを少し離れた道路の向かい側から、苦々しく見つめているのは、捜査の一環として様子を見に来た、あの夜の二人の刑事、館川と虎賀だ。

二人が渋い顔をしている理由は、この木内貴史が女性をだます狡猾な詐欺師として、警視庁内でもわりと悪名高い男だからだ。

いや、騙すだけならば、またそこから立ち直ることもできようが、この男はもっと性質が悪く、見目の良さを利用して、比較的裕福な家庭の、世間知らずで美しい娘を甘い言葉で誘惑し、婚姻関係を結んでしまうのだ。

しかし、そうなったが最後、それこそこの誰がなんと言おうと蛭のごとく、甘い汁を搾り取れるだけ搾り尽くし、手持ちの財産ばかりではなく、借金、風俗など、手段を選ばずに貢がせた挙句、個人的遺産や生命保険などの受取人として、死後の財産まで手中に収め、後はあくまで表面上は穏便に離婚する、というか捨ててしまう。もっとも、実際に被害者が死にいたって遺産までもその手に渡ったのは、立花姉妹が初めてだったし、この男が悪辣なのは、口八丁で、自分の手はけして汚さないことだ。

それとなく口にはしても、けして強制はせず、女性の方から全てを差し出すように仕向けさせ、全て彼女達が手続きを踏んでしまえば、どんなにあからさまに怪しくても、犯罪として立証するのは難しい。

逆に、それに乗ってこない相手とは、どんなに美人で財産持ちであらうと、深入りしないうちにあっさり離れてしまい、引き際も心得ている。

被害者一人一人と夫婦になる以上、普通の詐欺とは異なり、最低

でも四、五年は生活を共にするため、こちらの人数はまだ数名というところだが、やはり付き合っているだけで貢がせている女性もいるらしく、こちらは把握し切れていないのが現状だ。

しかも、被害者である女性達は皆、彼はまだ私を愛してくれていると言いついて、被害届けを出してはくれないのがまた、こうした犯罪の共通点で頭痛の種だ。

だからこの男は、いまだ立件もされず、犯罪被害者の遺族として、それらしい表情を浮かべて恥ずかしげもなく、カメラの前へと立っていられるわけだ。

手口を知った女性警察官達に、女の敵と、性犯罪者並に毛嫌いされ、目の敵にされるのも当然である。

「この度は、義妹のためにこのようにお集まりいただきまして、ありがとうございます」

貴史はそんな報道陣を両手で制し、後ろまで聞こえるようにと声を張り上げつつも、しおらしくみえるよう、深々と頭を垂れた。

再度フラッシュが乱舞する。

本当ならこんな無礼者の集団に礼を尽くしてやる謂れはないのだが、イメージ、特に、ブラウン管の向こうの視聴者という、世間一般に対する心象は、良くしておくに越したことはない。

こんな大きな家に住まう財産家が、十年という時の流れはあれど、直接血の繋がりのない自分を残して死に絶えたのだ。

そんな場合、世間の目がどんな風に自分を見るか、貴史はよく理解していた。

まあ、直に手を下していないというだけで、姉に関しては、その見解があながち間違っているわけでもないが。

そう心の中で嘯く。

どっちにしても、あの女、いや、姉妹そろって馬鹿だったというだけだ。

もっとも、そんな馬鹿な女が、この世にいるからこそ、望むままに贅沢な生活ができる。

貴史は、予想だにしない惨劇に巻き込まれた、悲劇の家族を演じながら、その皮の下一枚でせせら笑う。

この世の中、騙されるのは、頭の悪い愚か者だからだ。

騙されたくなければ、自分のように賢くなければならない。

そうすればこうして騙す側になり、おいしい思いをすることが出来る。

それには、生まれ持った美貌と、それを生かす才能も重要だ。

それが、貴史の持論だった。

「義妹さんが殺されたと聞かれたときは、どんなお気持ちでしたか？」

一応気の毒そうな表情を装ってはいるが、この連中が腹の中で考へてるは、この不幸をいかに面白おかしく仕立て上げるか、ということだけだ。

そうすれば読者や視聴者の興味を引き、ひいては売上、視聴率のアップ、そして最終的には自分達の懐が暖かくなる。

倫理観よりしょせんは金だと、鎮痛な面持ちを崩さないようにしながら、同じ穴の貉であることを柵に上げて、内心毒づいた。

「信じられませんでした」

悲しげに目を伏せると、またフラッシュが光り、形だけとはいえ、同情の声が上がる。

当然だ、この角度で俯けば、良い顔に愁いを帯びて、ますます男前に映るのは、前日まで録画しまくったビデオで確認済みだ。

理由は何であれ、毎日どこかしか、いや、ほとんどのチャンネルのワイドショーやら報道番組で映っているのだから、住んでいる場所もあらかたわかつているのだろーし、そのうちファンレターが届くようになるかもしれないな、と自画自賛して悦に浸る。

次の獲物は物色するまでもなく、向こうから飛び込んでくるかもしれない。

「あんな、あんなかわいらしい良い娘^こが、殺されてしまうなんて……。しかも……、あんな残酷なやり方でなんて……」

目にうつすらと涙がを浮かばせると、心も一気にトーンダウンする。

しかし、それは本当に悲しいからではなく、自らの発した言葉で、身元確認に警察へ行ったときのことを、うっかり思い出してしまったからだ。

死体安置所に案内してくれた若い刑事が、死因は頸部の噛み傷による窒息とか、失血とか、ウンタラカンタラ言っていた気がするが、一応耳には入っていたものの、右から左へ素通りしたというより、ぜんぜん頭に入ってこなかった。

ともかく、こんなことをした奴に対する怒りと、殺された死体を目の前にした気持ち悪さでいっぱい、とてもそんな余裕はなかったのだ。

美和子は姉よりも美人だったし、とりあえず、『まだ』利用できる女だったのに、それをあっさり、どこの誰ともわからぬ相手にふいにされてしまったのだ、腹が立たないわけがない。

TVで見たことがあるような、全身を覆う白い布をかけられていた美和子の顔は、肌の色を別にすれば、目だった傷は一つもなくて綺麗だった。

これから司法解剖をしなければならないと、唯一の家族として承諾を求められ、そのために遺体の返却にはもう少し時間が掛かるといわれて、ようやく死んだ、というより殺されたのだという実感が湧いてきて、ひどく恐くなった。

首から下は、さすがに見せられなかったが、見なくて正解だったと思う。

なんでも喉を、肉食動物にでも食い千切られたようになっていたと聞かされていたから、うっかり目にしていたら、卒倒してしまっていたかもしれない。

貴史は血が苦手で、ホラーや残酷なシーンのある番組や映画は、たとえアニメでも大嫌いだった。

自分の怪我だろうとも、傷口が少しばかり大きかったり、出血が

ちょっと多かったりすると、それを見ただけで貧血を起こしたため、昔は、男の癖にとか、根性がないとか、よくからかわれたものだ。

もっとも、ヒモとして生活するようになってからは、相手にそういう話をするとかえってかわいいと喜ばれたりもした。

その、司法解剖が終了した美和子の遺体が、戻ってくる。

本来はそんな死体など、妻だった幸恵同様、葬儀場を借りて、今は一人で悠々自適に住んでいる、この豪勢でお気に入りの家には、薄気味悪くて入れたくなかった。

だが、五千万円ほどが受け取れた幸恵の生命保険の残額も残り少ないし、美和子は幸恵と違って、せっかく良い働き口を見つけたというのに稼ぎが悪くて、月二十万ですら入れられない時があったから、こんな予定外の出費にかけられる金などなくて、せめて生まれ育った家から送り出してあげたいと、もっともらしく、しかし、美和子の古くからの知人が聞けば、鼻で笑うような言葉で言いつくろって、少しでも安く上げようと努力しているのだ。

自称親戚連中は、土地も家も貴史の手に渡っている以上、まだ年若い美和子など、もう逆さに振るっても鼻血も出ないことを承知しているから、返って金を出さなければならなくなるかもしれないと寄り付きもしない。

こうやって大々的に報道されれば、何かと物見高い連中の香典で、葬式代くらいはなんとか賄えるだろうが、喪主などという辛気臭い上に面倒くさく、一文の得にもならないことをやらされるのがかわない。

幸恵の時は、美和子が何から何まで取り仕切って、喪主の代理まで務めてくれたが、こうなる前の姉妹のためならまだしも、貴史が関わっている以上、そんな親身になって世話してくれる者など、もういるわけもない。

墓は両親のものに幸恵も入っているの、そこに一緒にしてやればいいから、あんな石ごときに、目の玉が飛び出るような金を払わなくて済むのだけが救いだ。

これだけ注目されると、そうしたことを怠れば、本当に痛い腹をこれ以上勝手に探られて、あった事だけでもまずいの、無い事まで適当に書き立てられたのでは、それこそお飯の食い上げになりかねない。

「義妹さんを殺した犯人に、心当たりはないんですか？」

表面が、スポンジ状のもので覆われていなければ、串刺しにでもされそうな勢いで無数に突きつけられるマイクの中、前の方に陣取っている、少数派の男性リポーターの一言に、貴史は我に返った。

「わかりません……」

首を横に振る間も、その問いが頭の中でリフレインしている。

「義妹を殺したいほど憎んでいる人がいるなんて、想像もつきません」

吐き出すように告げたのは、本心だった。

こう言っではなんだが、殺されたのが自分だというならまだ、納得がいく。

もちろん死ぬつもりも、死にたいわけでも毛頭無いが、金を持っていそうな世間知らずのお嬢様をたぶらかし、この姉妹のように死んでしまうまではいかなくとも、貢げなくなれば捨ててきたのだから、恨まれていないわけがないのは十分にわかっている。

しかし今までの女は大抵、極悪非道の仕打ちを受けても、優しくしてやっていた頃を忘れることができず、中にはいまだはした金を手、時折情にすがりに姿を見せる者までいるくらいだし、そういう相手ばかりを選んできたつもりだ。

貴史にしてみれば利用価値は薄い、ほんのちょっと甘い言葉を囁いて抱き締めてやるだけで、感激にむせび泣き、その後言い含めてやれば、一も二もなく従うので、別の女に乗り換えるまでの保険と体の良い退屈しのぎとして、そうした相手を何人かはキープしていた。

そんな自分の行いが、世間で言うところの常識や道德観念から著しく外れていることなど、最初から承知しているし、殺す気になる

かは別にしても、そうした女達の肉親や親しい友人関係から、激しい憎悪の対象になっているのは十分理解していた。

確かに美和子を殺されれば、仕事を持たない、する気もない貴史は、収入が断たれて困ることにはなるが、それは一時的な話で、保険の女にたかりつつ、新しい獲物を見つけ、乗り換えるだけの話だ。反省する気がまったくない以上、無意味といってもいい。

今の美和子の立場に嫉妬した、前の女の犯行かとも思ったが、そんな気概のある相手も思い浮かばない。

秘められた人間の本质なるものは、得てして意外性を伴うから一概には言えないが、それならば最初に殺されるのは、はるかに長い期間を過ごしてきた幸恵であるはずだが、彼女は入院先の病院で死亡しており、病名は乳がん、疑問の余地のない病死であった。

それなのに、なぜ美和子を殺したのか。

しかも、あんな残虐ともいえる方法で。

「私としては、一日でも早く犯人が捕まってほしいです」
不気味だった。

殺されたと警察からの連絡を受けて、一番最初に思い浮かんだのは、出勤していたのは知っていたので、美和子の仕事上でのトラブルだったが、それをすぐに、あっさりと消去した。

それで殺されるほど、美和子は仕事に身を入れてはいなかったし、あそこの客は皆、そんな短慮を起こすほど馬鹿ではなく、万が一やるのだとしても、もっとうまく、目立たない方法を選ぶはずだ。

その証拠に、この事件のせいであの店は、危うくガサ入れされそうになったのだから。

もしそれで、女達が高級娼婦として、VIPを相手に売春をしていたことがばれれば、経営者はもちろんだが、客達の方も今まで築き上げてきた地位を失ってしまう。

そんな危険極まりない橋を渡ってまで、たかが美和子一人を殺さなければならぬ理由が考え付かない。

しかも死因となった傷を付けたのは、人間では有りえないと言う

ではないか。

一体誰が、何の目的で、何を使って、美和子を殺したのか。それが皆目、わからない。

型通りの優等生の答えで最後を結びながら、心中にまたわけのわからない不安が湧き出してきているのを、いや、実際には見て見ぬふりをしているだけで、心の片隅にずっと居座り続けているのを、感じていた。

すでに今日何度目になるのか、数えるのも面倒になった、目蓋に無数の残像ができそうなほどにフラッシュをたかれる。

そこで取材にも一区切りが付き、なんとも間の持たない、居心地の悪い空気が流れ始めたので、貴史がこの辺でお開きに、と口を開こうとした時だった。

報道陣の後ろで、大きくクラクションが鳴らされた。

片側一車線とはいえ、ダンプカー同士でもすれ違えるほどの広さのある道だ。

いかに家の前に人垣ができたといっても、全面を塞いでしまっているわけではない。

ましてや反対車線に、車が避けられないほど通行量があるなら、道路にはみ出してまで貴史の前に人垣が作れるはずもない。

それなのに、クラクションはしつこく、二度、三度と癪に障るその音を響き渡らせた。

そうまでされればさすが、どうやらその車の用事が、この家にあるらしいのは容易に想像がついた。

これで行くやうく貴史は、自分がどうして外へと出てきたのかを思い出した。

「申し訳ありません、義妹が帰ってきたようですので、道をあけて下さい！」

なんだなんだとざわめきはじめた彼らに向かって、貴史は慌てて声を張り上げた。

それに反応して人波が、やっと黒いバンが通れるほどに、場所取

りでもめながらも分かれると、今度はそちらに向かってまた一斉に閃光のシャワーが浴びせられかけた。

そこを、人を引っ掛けないように用心深く、バンはのろのろと進むが、ともするとその幅は人波に押されて狭まってしまい、そのたびに立ち往生を余儀なくされ、また狂ったようにクラクションが鳴らされた。

「危ないから、下がって！ もっと下がりなさい！」

さすがに、それを見かねた二人の刑事と、車から降りた遺体を搬送してきた係員が、ともすれば車に触れそうなほどに近付こうとするカメラマン達を腕力で押し返す。

バンにはもちろん、きっちりとカーテンがかかっているので、覗き込んで中を見えることはできないが、それでも決定的瞬間をとらえようを躍起になる一団と押し問答になり、にわかに殺気だってきた。

「すいません！ 下がって！ 下がってください！」

貴史も必死になって制止しようとするが、混乱は少しも収まらない。

狂ったようなフラッシュやら、リポーターの興奮した声やら、怒号やらが飛び交う中、かなりの時間をかけて、それでもようやく門の前へと車が横付けされた。

本当ならば、敷地内にそのまま入ることができればなお良かったのだが、生憎、この道路は家を正面にして立つと、左から右へと下がる、緩やかな勾配になっており、そのせいなのかははっきりしないが、敷地に入るためには、段そのものは大した高さではないにしても、五段ほどの階段を上らなければならないのだ。

そのため門の脇にあるガレージも半地下のような状態になっており、不便ではあるのだが防犯上の理由から、以前はあった敷地内への直通の通路も、結婚してすぐに行なった改装の折に、業者に頼んで、コンクリートで完全に塞いでしまっていたし、もし使えたとしても、意外と狭かったので、棺の搬入にはおそらく使えなかっただ

ろう。

騒ぎを避けるのであれば、裏口という手も考えたが、大きな家とはいっても勝手口はそれほど広くはないし、段差もそちらの方が大きく、しかも急なので、そうまでして隠し立てする理由もないからと、玄関側を指定したのだ。

なんとか、車と門の間に割り込む邪魔者を追い払って、美和子を迎え入れるために両開きの門を広く開放した。

家のドアも開けなければならないが、それはこの際、後回しでかまわない。

どうせ運び込む部屋は、玄関のすぐ正面にある、リビングを一部仕切った所だ。

こんな風にマスコミに騒がれてはいるが、今の仕事について以来、交友関係などほとんどなくなった美和子は、焼香に訪れる者は多くとも、葬儀にまで参列する弔問客などたかが知れているし、それ以上奥にまで死体を運び入れるなんてとんでもないので、どうせ茶毘に付すためにはまた外に出さなければならないのだから、出入りの安易な場所の方がいい。

家具も、大きな物を動かしてしまうと後々が面倒なので、できる限り影響のない鳥羽口にして、祭壇もコンパクトなものを選んだ上に値切ったものだから、葬儀屋がさすがになんともいえない表情をしたが、望んでやる式ではないので気にも留めなかった。

戸籍上は義兄妹になるといっても、赤の他人の自分が、こんなことのためにけななしの金をはたいているのだから、体面さえ保てれば、一円だって安く上げるのは当然だ。

人間なんて、死んでしまえばただの肉の塊で、まだ寒いこの時期でも時間がたてば腐っていくのだから、本当なら、司法解剖なんぞした警察の方で、葬式まで済ませて火葬場に持って行ってもらいたいくらいだ。

それでもとりあえず、棺に納めてくれているというだけ、ましかな。後の面倒は全部葬儀屋に任せ、自分は悲しくて耐えられないから

とかなんとか理由をつけて、出来るだけ死体を見ないようにすればいいのだから。

貴史がそう算段している間に、後部のドアが開けられ、くすんだ緑の地に金色の仏教的な模様の施された、光沢のある布のかけられた棺が、中から姿を現した。

誘導しなければならぬ貴史は棺を運べないから、必然的に運び込むのは、遺体が返ってきたことを察して、式の準備を中断して家の中から出てきた葬儀屋と、遺体を返還しにきた警察関係者がやることになるが、核家族化が進んだ昨今ではそう珍しいことでもないのか、慣れた手付きで黙々と、六人で車から引き出し、運びやすいのか、肩に担ぎ上げた。

美和子はどちらかといえば小柄な方だったが、さすがに成人女性が一人入っているのも、それなりには重いし、マスコミの餌食にされないためにも、早々のんびりはしていられない。

とはいえ、さしものマスコミも、先ほどまでの勢いというささは鳴りを潜め、奇妙な静けさの中を、六人の男に担ぎ上げられた白木の棺は、静々と、しかしできうる限る速やかに進んでいった。

「階段がありますから、注意してください」

そう確かに、貴史が注意したさして大きくも無い声を、マスコミ関係者はおろか、彼らを制止していた警察官、そして館川刑事も聞き取っており、後にチェックされたTV局の音声の中にもしっかりと記録されていた。

一つ一つの段差はかなり低く、幅もむしろ必要以上に広くとられているので、彼らからしてみれば、かえって上りやすいはずだった。だからその時、一体何が原因でそうなったのか、映像は、車の陰になっていて決定的な場面は映されてはおらず、実際撮られたものといえば、結果のみであった。

とにかく、それが起きたのは棺を抱え上げている男達全員の足が、階段にのったころだった。

たかが五段ばかりの階段は、本当ならば最後を支える二人の足が

最初の段を踏みしめる頃には、先頭の二人は上りきってしまったているのが普通だろうが、ここは傾斜が非常に緩やかになっているので、最後の段を上ろうとしているところであった。

確かに、棺を抱え上げるという通常にはそうない状況におかれていたとしても、特に大きな問題がある場所ではなかったというのに、どういうわけか、ほぼ同時に先頭の二人が体勢を崩し、いきなり前へとつんのめったのだ。

こうなると、アメリカやヨーロッパのような、そのまま埋葬するのを前提とした重厚な、その分運ぶ時のことも考えて、下部に取っ手がついているような棺と違い、日本の場合は、最終的には燃やされることを配慮した作りになっているので、さほど頑丈ではなく、もちろん取ってなど付いていようはずもないので、ただ底から持ち上げて支えているという状態だったから、前方へと勢いよく滑り出してしまえば、とっさに押さえようもなく、被せてある布をつかんでみても、布自体固定されていないため、剥ぎ取られただけで、止まるわけもない。

結果として、覆いだけが後部を持っていた二人の手に残り、つんのめった先頭二人の背中と後頭部を滑り台に、棺は白木の肌を全面的にさらして地面へと突っ込み、それから貴史の方へ向かって横倒しになった。

「わああああ！」

先行していたため、何が起こったのか良くわかっていなかった貴史も、後ろから聞こえた驚愕に満ちた叫びと、異様な音に振り向いた瞬間、目の前に迫ってきた棺に奇声を発し、必死で蛙の様な不恰好さになりながら跳び退り、かろうじてぶつかる難だけは逃れた。

これで済めば、まだ良かったのかもしれないが、災難はまだ続いた。

まだ葬儀も済んでいない棺は、蓋はほとんどかぶせてあるだけで、きちんと留められてはいなかったからだ。

覆いがとれ、横倒しにまでなってしまった棺の蓋は、衝撃に耐え

かねて、完全に外れてしまったのである。

しかも、横倒しになってしまったのだから、その蓋の上に向かって、さらにごろりと転がり出たものがあった。

それと貴史は、まともに視線を合わせてしまった。

聞くに堪えない絶叫が、静まり返った周囲に轟き、マスコミばかりか警察関係者の度肝まで抜いて、そのどちらも何事が起きたのか見当もつかず、とにかく、車の陰になって完全に死角となっていた門の前へと駆け込んだ。

そして、その有り得ない光景を目にした誰もが、一瞬にして凍り付いていた。

車の後部から回り込んだ者達が目にしたのは、呆然と立ちすくむ、棺を担いでいたはずの男達と、その傍らで階段に引っかかるように横倒しになっている白木の棺と、そこから部分的に見えている白い布状の物だけ。

それがなんなのか考えるまでもないが、いくら修羅場を潜り抜けてきたといっても、この日本国内において、人間の魂の抜け殻を、しかも犯罪被害にあったものを見る機会などそうそうない以上、いかなベテランの撮影スタッフ達も、それより先に踏み込むのに二の足を踏んだのは致し方ない状況だった。

気の毒だったのは、車の前方から回りこんだ者達で、真っ先に駆け込んでしまったテレビカメラマンなど、生中継だったものだからもろに真正面からの映像を、しかもカメラマンはミラーに服が引っかかって、そっちに気がそがれていたものだから、それが何なのか認識するよりも早く、全国のお茶の間に映像が配信されてしまった。現場はおろか、スタジオもTV局も大混乱に陥る中、即刻、中継は切られはしたが、視聴者から抗議が殺到したそれは、運悪く目にしてしまった者の脳裏に、悪夢となってこびりついてしまった事だろう。

棺から文字通り、ごろりと飛び出してしまった美和子の遺体は、元々首が半ばまで食い千切られる深い傷を負っていたので、傷跡は

残しつつも見られる程度にはきちんと縫合されてはいたが、偶然なのか、はたまた人外の存在の気まぐれなのか、横向きに近い形で地面投げ出された胴に対して頭は、異様な角度で捻じ曲がり、まるで貴史を睨みつけるかのような形になっていた。

いや、本当に睨みつけていたのだ。

刑事の話では、美和子は目を開いたまま事切れていて、目蓋は死後硬直が解けてから、検視官の手で閉ざされたらしい。

死因が死因だっただけに、その表情は苦悶というよりは、怯えていた感じがしたといっていたし、身元の確認に行った時に死に顔を見た貴史もそう感じた。

断じてこんな表情はしていなかった。

それなのに。

どろりと、光を失って濁り、瞳孔が開いているのでどこを見ているのか良くわからないはずの瞳は、しかしまっすぐに腰を抜かしている貴史を捕らえ、恨めしく憎々しげに、土気色に変色した顔を歪ませ、責めるようにねめつけていた。

まさしく鬼女のごとき形相で。

いや、むしろ、なぜ角が生えてこないかの方が、不思議に思えるほどだった。

まるで時が止まったかのように、誰も動けなかった。

「ばかもん！　ぼうっとしてないで何とかしろ！」

刑事になって相当な経験を積んだ館川ですら、生まれて初めてという異常事態だったが、いち早く我に返ると、凄まじい怒鳴り声を上げて周囲で顔色を失っている取材陣を、この際かまっていられるかと手荒く突き飛ばし、階段の下にたまってまだ硬直している二人の同僚に喝を入れ、美和子の遺体の前へと飛び出した。

それを合図に、まるで金縛りの魔法が解けでもしたかのように、わっとばかりに蜂の巣を突付いたような騒ぎになった。

その場から逃れようとする者、逆にこのスクープをなんとか写真なり映像に収めようとする者、騒ぎを何とかしようとする者が入

り乱れて、大混乱にさらに拍車をかけた。

館川ともう一人駆け付けた制服警官が、前方から押し寄せようとする連中をなんとか押さえ込み、同じく虎賀と別の警官が後方を押し返す。

その隙に我に返った六人が泡を食って棺と美和子に取り付いた。声を出すことも、視線を外すことすらできなくなっていた貴史の精神が耐えられたのはそこまでで、誰かが、美和子と自分の間に割り込み、その顔が見えなくなった途端に気が遠くなり、それきり何もわからなくなってしまった。

Scene 6

都庁の外観を間近に眺めることのできる、この高層ビルは、新宿駅と都庁の間のオフィスビルとしては一等地の一角に建ち、さる有名な海外コンツェルン所有の日本支社である。

バブルが崩壊して数年後に、以前にあったビルを、この辺りにしては比較的安値で買い取って、この国では相当斬新だった爆破解体を行い、新進気鋭に建てられた。

しかし、その最上階部分が、メゾネットタイプの居住空間になっていることを知っているのは、この中に勤めている者ですら、そう多くはない。

その大半も、本社から派遣されてくる支社長、もしくは重役の誰かが、日本に赴任している間だけ、そこを使用していると思っているようだ。

会社に直接かわりのない人間が、高級マンションというよりは豪邸に近い、その広大な空間を占拠しているとは、とても想像がつかないし、信じられないだろう。

ここには、地下の駐車場及び一階から、社員達とはまったく別の、専用出入り口と直通エレベーターがあり、そのどちらもが、特殊なキーとカードキーを差し込まないと、入ることも使うこともできないようになっていいるから、なおさら住人の顔などわかりようもない。もちろん防犯面においても、全ては会社の方と変らない、厳重なセキュリティシステムが張り巡らされ、人間の警備も、このビル専属のガードマンが請け負っている。

もともと、彼らですら無条件に入ることができるのは、巡回の時に地下の駐車場と、一階のエレベーター前の殺風景なホールを見回るだけで、最上階に上がることは、住人の許可が下るか非常事態以外は許されていない。

そのあたりが、セカンドハウスと勘違いされる所以だろう。

実際、住居として使用されているのは、メゾネットの上のフロアのみで、エレベーターだけではなく、中の階段でも行き来ができるが、下はコンベンションフロアなので、会社と半ば共有の形となっており、その関係のイベントなども開かれていた。

シックなデザインではあるが、豪華な感じのエレベーターはかなりの大型で、下手をすると小型の軽自動車なら乗れるのではないかと思える広さは、人間も、そして家具などの大型の物資を運び込めるのも、これ一基しかないのを考慮すれば、そう不思議ではない。

エレベーターを降りるとそこは、一流ホテルも顔負けの優雅なエントランスホールが広がり、華美ではないが、高級感を損なわない落ち着いた感じに仕上げられている。

左手すぐは、明り取り用の大きな窓になっていて、角度的に都庁は見えないが、その分、新宿摩天楼のビル群を、間近に望むことができた。

右にすすむと、エレベーターとは反対側の壁の中央に、玄関と思われる両開きの扉があり、アルミかステンレスらしいダークグレーの金属製の表面には、レリーフ状にヨーロッパの貴族が持つ家紋のような紋章が模ってあった。

凝っているわりには、どうやらモチーフがわざとデフォルメされているらしく、数種類の動物がいることくらいしかわからない。

扉を開けると、広さこそあるが、見た目はずいぶんとごく一般的な、玄関ホールが広がっていた。

御影石らしいたたきには、白のスニーカーと、黒のスーツシューズ、金色の派手なミュールが、きちんとそろえて置かれ、それぞれサイズが違うことから、ここには少なくとも三人の住人がいるらしいとわかる。

玄関を上がって左手にむかうと、大人一人が余裕で両手を広げられそうな、広い廊下が伸びており、突き当たりに濃い目のブラウンのドアがあって、そこから廊下は右に折れている。

さらに廊下を進むと、左手には、それぞれ趣の異なるドアが他に

二つ並んでいるところから、プライベートルームになっているようだ。

右手には、細身の両開きの、メタリックなデザインの白の扉があり、そこを開けると中は、四十畳はありそうなリビングルームで、何色ものグレーを混ぜ合わせた毛足の長いじゅうたんが隙間なく敷き詰められたほぼ中央に、滑らかな曲線を描いて段差が設けられている。

その段差に寄り添うように、巨大な、大人数人が楽に寝そべることのできる、柔らかな黒のローソファが、やや威圧的に室内を占拠していた。

その前には、二重になったガラスの天板の間に小物が飾れる、メタリックなデザインのローテーブルがあるのだが、ソファが巨大すぎるせいで、なんだか萎縮しているように見える。

テーブルの中には、宝石の原石らしい、小ぶりな、色とりどりの鉱物が置かれていた。

快適な居心地のソファの上には、一人の男が、だらしなく身体を伸ばして寛いでいた。

男というよりは青年という方が、まだふさわしいかもしれない。

どう見積もっても、二十五が上限と思われる彼は、茶髪と称するにも色素の薄い髪を、肩に付くほど伸ばしている。

美しく照り映える自然の艶は、それが元々の色であること示していて、それがまだかなり水分を含んで濡れているのは、いくらか湿気を帯びているバスローブからして、シャワー、もしくは入浴した直後らしい。

適度に空調がきいている、といっても、時期柄からいって、感覚的に寒々しい格好なものには違いない。

身長は、横になっているので判断しづらいが、百八十くらいはありそうだ。ほっそりとした身体に、女性が羨みそうなシミ一つない白い肌は、それだけ聞くと軟弱そうなイメージを与えるが、けしてそんなことはなく、むしろ引き締まった感じがした。

彫像、では極端すぎるにしても、彫りの深い顔立ちは、とても日本人ではありえないので、明らかに白人系、もしくはハーフだろう。いや、彫りの深さでは劣っても、いかつい彫像が比べられた瞬間に恥じ入りそうな、美貌の青年であった。

なにやら熱心に正面を見つめる瞳は、この部屋の中があまり明るくないので、黒っぽい、としかわからなかった。

その視線の先には、国産としては最大級のプラズマTVが、近未来的なデザインのアクリルを多用した専用台の上に鎮座しており、そのワイドスピーカーからは、この雰囲気こそぐわぬ、けたたましい声音やら効果音がひっきりなしに流れる、ワイドショー番組を映し出していた。

リポーターが息を切らして、しゃべりながら走っていく先には、一件の大きな邸宅。

その前で、突き出されたマイクに囲まれて映っているのは、あの木内貴史だった。

「まったく、狼あきつはまたそんな格好で」

彼の赤みを帯びた唇に、うつすらと笑みが刻まれた瞬間、背後からその声は響いた。

「しかも何、こんな暗いままで。せっかく気持ちの良い晴天だっていうのに」

ドアの反対側の壁は、ほぼ全面ガラス張りにもかかわらず、遮光のロールカーテンがきっちりと下ろされているのに目を向け、わざとらしく盛大なため息をついた。

女性にしてはやや低めだが、本来なら耳に心地良いはずの声を尖らせ、青年を狼と読んだ彼女は、そのわりに自分も大して変わらないうガウン姿で、両手を腰に仁王立ちになっている。

とはいえ、まだ朝晩はそれなりには冷え込むので、着ているガウンは光沢のあるキルト地の物で、裏はさらにフリースになっているため、見た目よりはよほど暖かいのだ。

しかし、その上からでも十分にわかるほど、出るところが出て、

引つ込むべきところが引つ込んでいるスタイルは、すばらしいの一言に尽きた。

彼女は起きてすぐ、日課のシャワーを浴びようと思って出てきたのだが、リヴィングの後方にもう一ヶ所あるドアの半透明のガラス部分から、TVが点いているらしい、明るい色彩が蠢いているのを目にして、こんな時間に誰がいるのかと見に来たのだ。

TVの後ろの壁にかけられたからくり時計は、星空を模した文字盤全体が、暗い中では発光するようになっていて、針は十時近くを指し示しているのが見えるが、当然夜ではない。

ロールカーテンの隙間から差し込む光が、まったく照明を付けていない室内を、それでも歩き回るのに困らない程度には明るくしていた。

「開けるなよ、獅子^{しやうじ}王子」

画面から目を離さず、いくぶん面白そうにそう釘を刺す狼の瞳が、その光を反射したせいか、暗緑色に輝く。

それに、窓に歩み寄ろうとしていた獅子王子は、あきれながら振り返った。

「明け方になってから帰ってきたくせに、寝てないのね？」

この忠告が意味を成さないことはわかってはいたが、それでも言わずにはいられなくて、チンチラの毛皮のスリッパで段を下りると、狼の足元に空いているスペースへと、わざわざ反対側は広く開いているのに、強引に座ってみたが、彼はちらりと一瞥しただけで、特に拒否する様子もなく、その長い足を持て余すように組んで、見せつける。

なにせ彼は、ひどく扱いづらいタイプで、機嫌を損ねてしまうと癪癪を起こして暴れたりするわけではないが、いろいろ大変なのだ。ガウンの合わせから、すらりとした足が現れたが、下はサーモンピンクのシルクのパジャマを着ていた。

年齢は狼と変わらないか、いくぶん年上かもしれない。軽いウェーブのかかった、自らが光を放ちそうな見事なプラチナブロンドの

髪が、寝起きのせいか、いくぶん乱れて背中にかかっている。

彼女は面白くもなさそうに、組んだ足の上に肘を置いて頬杖を付き、画面を見やった。

画面の光を反射している瞳は、ほぼ黒に近い茶色だが、それ以外は彼女も完全な白人系で、狼に劣らぬ、女神も真っ青になりそうな美女だ。

ただ、彼女がこの闇の中に発光しているような美しさなのに対し、狼はまるで、この闇の中に解け入るようで、例えるならば、太陽と月のような違いがあった。

「朝食も抜く気なんじゃないでしょうね」

胡乱気に、貴史のインタビューを横目にしながら、獅王子がまるで母親のような口調で、どうやら自堕落な生活を送っているらしい狼の日常生活に小言を言えば、彼は軽く、お手上げのしぐさで肩をすくめた。

「食べる必要がないだけさ」

そんな軽薄なポーズも、無意味に決まっている狼に、取り付く島もないのを感じて、特大級のため息を追加し、獅王子も画面の方へと集中することにした。

この男ときたら、どんな忠告もまったくの馬耳東風で、仕舞いには苦言を呈しているこちらが疲れ切ってしまう。

この手のゴシップ番組は、毛嫌いこそすれ、見たいとはまったく思わないのだが、本来夜行性に近い狼が、彼の体内時計からすれば真夜中に近いであろうこの時間帯に、わざわざ部屋から出てきてここにいるのだから、何か意味があるに違いないと我慢する。

正面を向いて、矢継ぎ早に出される質問に答えていた貴史の意識が、急に別のものに逸れ、カメラが同じ様にその視線の先を追ってパーンすると、一台のワンボックスカーがやってきたところだった。それでなんとなく、獅王子にも合点がいった。

「この男なわけ？」

頬杖を付いていない右手で、そう画面を指差せば、狼は何も言わ

ず、笑いだけを深くした。

それに獅王子は警戒感を強める。

こういう笑い方をする時は、大抵何か、良からぬ事を企んでいる場合が多いからだ。

「確認するために、見ているわけじゃないわよね」

愚問とはわかっていても、怪しげに問えば、それに特に気を悪くするでもなく、薄気味悪いほどに上機嫌で、むしろ浮かれているに近い状態で、声を立てて笑う。

「まあ、黙って見ていろ」

今にも喉まで鳴らしそうな、猫のような表情で目を細める彼に、獅王子はますます警戒心を募らせたが、それきりだんまりを決め込まれてしまったので、言われたとおりに、またTVに注目するしかなかった。

何か木製のものが地面に落ちたような音と共に、ただでさえマシンガンのようにしゃべっているリポーターの声が、興奮でさらに高くなり、聞くに堪えない騒音に発展させながら、いきなり走り出し、それに少し遅れてカメラマンも走り出したせいだろう、画面が大揺れに揺れる。

それに獅王子は、きれいに手入れされた眉をしかめる。

「これを毎日なんて、頭がおかしくなりそうだわ」

あまりに急ぎすぎて、回り込もうとしていたワンボックスカーのフロントのどこかにぶつかったのか、それともぶつかったのは同じ様に取材に来ていた他局のクルーだったのか、ともかく突然大きく傾いだ画面に、信じられないものが映し出された。

おそらくそのゆれが原因で、カメラマンの目はカメラから外れてしまい、何を映しているのかは、まったくわからなくなったのだらう。

獅王子の目が、大きく見開かれた。

映し出されたのは、地面の上に投げ出されて横倒しになった棺から転がり出て、異様な方向に首を曲がってしまっている、経帷子を

着せられた、人間の形をしたモノ。

女性の、恐怖に引き攣った悲鳴が響き渡る。

幸い、顔はカメラとは別の方向を向いていたが、その悲鳴を皮切りに、現場は大パニックに陥り、いきなり中継は途絶えて、とんでもないハプニングに顔を引き攣らせる、スタジオの司会者に切り替わった。

思わず呆然とする獅王子の横で、突然破裂したように爆笑が起った。

「まったく！」

腹を抱えて、狼は湧き上がる笑いの発作をこらえることなく、空中へと、吐き出し続ける。

「女の執念というのは、大したものだと思わないか？」

ひとしきり笑い続けて気が済んだのか、話しかけるといふよりは、独り言に近い感覚で発せられた言葉に、我に返った獅王子は、その美しい顔を思い切り歪めた。

「悪趣味だわ」

吐き捨てるようにいえば、寝転がったまま、愉快でたまらないといった表情で、やっと笑いを納めた狼は、足元の獅王子に視線を向けた。

それに対して、多大な不安の入り混じった、探るような眼差しを、獅王子が返す。

「……あなたが仕組んだわけじゃないでしょうね」

その問いかけに、狼はさも残念だといわんばかりに、もう一度肩をすくめた。

「生憎、そんな面白そうな能力は持ってないな」

予想通りの否定的な回答に、まさか、本気で疑っていたわけではなかいにしても、なんだかひどく後味の悪い気分で、獅王子はいらだたしげに髪をかき上げる。

こういう時は、ただでさえ見えづらい彼の心が、まったくわからなくなってしまう、たまらなくなるのだ。

「女っていうのは、愛した男に忘れられてしまうのが、一番、嫌なんだって？」

見たかった場面を見てしまって興味が失せたのか、前代未聞の不祥事に、顔を悪くして平謝りを続けている司会者が映っているTVを、手元にあったりリモコンで消すと、今し方までの高揚振りが嘘のような、感情の抜け落ちた口調で狼は言った。

躁鬱が激しいのも、この時期の特徴なので、その激変ぶりには別段驚かなかった。

ただ、完璧に慣れるということはないので、落ち着かなくなる。「そういうわね」

結構な音量で流していたTVの音声がなくなったので、さほど大きくないと思った自分の声が、以外に耳に染みた。

他人事のようなそれに、狼が無音で笑う。

「違うのか？」

尋ねてはいるが、さほど感情が伴っていないので、どうしても答えが聞きたいわけではなさそうだ。

「……あなたから女性心理を聞かされるなんて、意外だわ」
思わずそう皮肉ってしまう。

今日の彼は饒舌で、それなりにテンションも高いが、普段は他人は愚か自分自身にすら、一緒に暮らしている方が危機感を感じるほど無関心なのだ。

「そうか？」

淡々とした声音に、神経を逆撫でされた獅王子は、ソファの上へと乗りあがった。

「だってあなた、私がこんなにストレートに気持ちを伝えているのに、何も言ってはくれないじゃない」

そのまま狼の上に覆い被さるように押し掛かり、パジャマにガウン越しとはいえ、豊満な肉体を密着させるが、抵抗も、何の反応も返っては来ない。

これもいつものことで、それが余計に獅王子には腹立たしかった。

並の男、いや、この狼以外の男は軒並み、こんなに密着しなくても、彼女が近寄っただけで興奮し、心拍数が増え、呼吸を乱し、顔を紅潮させて、飢えたケダモノになるのに。

そんな、異性にとっては、フェロモンそのもののような存在であることを、獅王子自身自覚し、有効に利用してきた。

女にとって、最大最強の武器といってもいいこの色香が、狼にはまったく通用しないのだ。

それでも、押し退けられないのいいことに、男性にしては体臭の薄い狼の首筋へと顔をうずめ、嫉妬してしまいたくなるような滑らかな肌へと口付け、舌を這わす。

バスローブの胸元に忍び込んだ、女性にしては大きな手が、しなやかな筋肉のついた胸の心臓の上を、無遠慮に愛撫し、強引に膝を割って互いの両足を絡める。

こうまでしても、狼の身体には変化も見られないし、制止もかからない。

最初は悪ふざけのつもりだった獅王子も、ついつい女としてのプライドを刺激されて、行為をエスカレートさせていった。

むしろ、彼女の息づかいの方が早くなり、明らかに、心も身体も興奮している。

跡を残すようなことは、一応自制したが、もちろんその下には何も着ていない、バスローブを唯一留めている腰の紐を解き、顎を伝って、そのまま唇にキスしようとして、ふと、どんな表情をしているのかと、上目遣いに見上げて重なった視線に、獅王子は硬直した。感情など欠片もない、凍てついた暗い炎を宿した、ダークグリーンに輝く瞳に、彼女は全身を総毛立たせて跳ね起きた。

いきおい、バスローブの前が完全に肌蹴ってしまったが、別に気にする風もなく、狼はゆっくりと上体をソファの上へと起こす。

「ゲームオーバーだ」

男のものとはわかっていても、目にした誰もが生唾を飲み込みそうな、妖艶ともいえる肢体をさらして、狼が口角を吊り上げる。

それは、無駄な行為を繰り返す獅子王子を、嘲笑っているようにあり、楽しんでいるようでもあった。

「本当に、いい性格してるわね」

よほど驚いたのか、産毛どころか、襟足の短めの毛まで逆立っているような状態で、少しばかり息を切らし、獅子王子は狼を睨みつけた。

ちよつといい雰囲気になったかと思えば、これだ。

怒り心頭に達しそうな獅子王子に、狼は薄笑いを浮かべ、何事もなかったかのようにバスローブを調えると紐を結びなおす。

完全な拒否。

こうなるともう、狼の側にいることすら腹立たしくて、荒々しく立ち上がると、ソファに乗り上げた時に脱げてしまったスリッパを突っかけ、足音も高くリヴィングを出て行こうとした。

そしてドアノブに手をかけたところで、肝心なことを聞き忘れていることに気が付き、渋面を作る。

おそらく狼は気にしていないだろうが、こうもことごとくアプローチを無碍にされると、自分がかまうのだ。

それでもこれは、何にもまさる重要事項なので、逡巡した後、仕方なくぶっきらぼうに口にした。

「……狩りはいつ？」

振り返ることはしなかったが、背後でうっそりと笑う気配がして、突然空気が変わった。

何か、目に見えない圧力のようなものが、リヴィングを席卷していく。

それに触発されるように、獅子王子の両目が熱を帯びた。

「今度の満月」

狼の言葉を背に受けて、静かにドアから出て行く。

冷たい空気が、今は心地よささえ感じる廊下に出て、ふっと小さく息を吐き出した獅子王子の瞳は、異様な銀色へと変化していた。

もったもそれで怒りが沈静化するはずもなく、かえってイライラ

が募って、獅王子は憤懣やるかたないと言わんばかりに、廊下をどかどかと踏みつけながら、当初の予定通り、シャワーを浴びて頭を冷やそうと歩き始める。

プライベートルームの先には、ダイニング、その奥に一続きになったキッチンが存在していた。

その横を通り過ぎ、裏口に一番近い、最も奥まった位置に、ゆったりとした広さの、壁や床などには黒に近いグレーのタイルを配したバスルームがあり、ゆうに二人が楽に浸かれそうな湯船の脇には、天井近くまで大きく窓がとられ、都庁を望み見ての入浴を楽しめたが、屋上の一部分に、ビルに必要なさまざまな設備を納めるための、無骨なコンクリート製の建築物があり、それが一緒に見えてしまうのがちと残念だ。

バスルームは、洗面所から入るようになっていて、廊下に直接つながってはいない。

そのドアを荒々しく開け、感情のおもむくままにたたきつけるように、ガラスが今にもわれんばかりにビリビリと震わせながら閉じると、ずかずかと洗面所を横切り、こちらも引きちぎれそうなほど力をこめて、脱衣所との仕切りになっているアコーディオンカーテンを閉じ、結局冷静になりきれないかもと、ちよつと意識的に遠いところで自分の性格を省みながら、手早くすべてを脱ぎ捨て、バスルームに踏み込んだ。

シャワーを浴びようと、壁の中ほどに取り付けてあるシャワーヘッドを取ろうとして、その横の曇り止め加工の施された、大きな鏡に映る自分が目に映る。

われながら、見事なプロポーションだと思うし、それは誰もが認めるところだ。

しかし、獅王子が見ているのは、その美しいボディではなく。

銀色に輝く、その双眸。

「……わかつていたはずだわ」

まるで自らをいとおしむかのように、獅王子はその表面へと、顔

の部分なでるように手を当てた。

「私が私である限り、狼が、愛してくれることはありえない」

そう呟き、きつく目を閉じる。

そして再び開いた時、あの、銀の輝きはなく、黒に近い茶色の瞳が、苛烈な光を帯びているだけだった。

Scene 7

キッチンには、食欲をそそるいい香りが充満していた。

日本では珍しい大型のオーブンまで付いた、海外製のシステムキッチンが完備されているが、コンロは、このビルが建てられた年代を考えれば、そこだけ入れ替えたのか、システムキッチンそのものを入れ替えたのはわからないが、最新式のIHクッキングヒーターになっていた。

突き当たりに押し込まれた冷蔵庫も、システムキッチンと同じペーパームントグリーンで、日本の一般家庭でこれはないだろうと思うほど巨大な両開きだ。

良く使用するらしい小型のフライパンやら、フライ返し、お玉といった細々とした用具が、使いやすいようにとダイニングを一部仕切っている壁に、シルバーの細身のフックを取り付けて引っ掛けてあるのが、小奇麗過ぎるこの空間が確かに使われていることを物語っている。

料理好きの人間であれば垂涎の的であろう、充実しまくったキッチンの中で、最近流行の映画の主題歌を口ずさみながら、まさしくご機嫌そのもので動き回っているのは、どう見ても高校生くらいの男の子だ。

ここには、大型の換気扇はあっても窓がないし、ダイニングにもこの時間、直接日光が差し込むことはないのだが、大きく窓がとられている分、明るさは十分にこちらにも及んできている。

それでも一応、煌々と付けられた照明の下で、ホーロー鍋の中をお玉でかき混ぜ、会心の笑みを浮かべている彼は、黒に近いダークブラウンの、見るからに柔らかそうな猫毛を、後ろは襟足にかからない程度の長さに整えている。

同色の瞳は、男にしてはやや大きめでくりっとしていて、それが全体的に幼い作りの顔をますます童顔に見せていた。

少年に使うにはかなり心証を害しそうな表現だが、可愛らしい容貌の彼は、身長も百六十半ばくらいで、このシステムキッチンも、微妙に高さがあつていない感じがする。

しかも、こんな風にニコニコ、無邪気に笑っていると、可愛さも倍增して、正直中学生にも見えた。

後ろの、シンクの横の調理台の上に置かれた、煙の出ない遠赤外線が売り物のグリルの中では、脂ののった鮭の切り身がいい感じで焼けているはずだし、これで朝食の仕度はばっちりだ。

そう思っていたところへ、計っていたタイミングもばっちりで、相変わらず足音も荒く、キッチン横の扉のない出入り口から、髪も湿ったままの獅王子が、バスローブだけという格好で、ご機嫌斜めに現れた。

まあ、その前から洗面所のドアでもものすごい音をたてていたから、機嫌が良くないのはわかっていたけれど。

その原因についても察しのついている少年は、妙に大人びた溜息を漏らした。

別にこうして彼女が、怒っているとも不機嫌ともつかぬ顔で、朝食の席にやってくるのは、悲しいかな、そう珍しいことではない。

ただ、ここしばらくそういうこともなかったので、さすがにあきらめてくれたかな、とかないもしない願望を夢見ていただけなのだ。カウンターに回りこむと、華奢なデザインの椅子を悲鳴のような音で軋ませながら、三脚並んでいるうちの真ん中にどっかりと、荒々しく腰を下ろした彼女の前に、コーヒーマーカーから、あらかじめ傍らに用意しておいた細工も美しいデミタスカップに、濃い目のコーヒートをそそいで差し出しながら、少年は獅王子をたしなめた。「いくら満月じゃないっていつても、そんな乱暴に扱ったらまた壊れるよ。いくつ目になると思ってるのさ」

もう数えるのも馬鹿らしいといわんばかりの彼の態度に、獅王子は顔をしかめ、お気に入りのピンクのバラ模様の、可愛いカッパを受け取り、薫り高いそれに口をつける。

贅沢を言うなら、手引きのミルで一回ごとに豆をひき、サイフォン式でいれて欲しいものだが、自分でやる気はない、というより出来ないので、目の前の少年に要求したところ、さすがにマジ切れされたため、コーヒーメーカーで妥協した。

白のカウンターには、ツールのような、機能性よりはデザインを重視しましたといわんばかりの、細身のペーミントグリーンの椅子が添えられ、その背後には、廊下、キッチンと一繋がりフロアリングのダイニングがあり、こちらにはきちんとした、スタイリッシュなデザインの、やはりペーミントグリーンの椅子が六脚付いた、天板がガラスで白のパイプフレームの、かなり大きなダイニングテーブルが置かれている。

淡いベージュの壁に、天井には白いパネルが貼られ、その中央に、円形の平べったいドーム型の、けっこう大きな照明が張り付いていた。

大きな窓には、遮光タイプの二重になった、外側は白に近いグレーのロールカーテンが、二つ横並びに付けられて、窓全体をカバーしている。

なにせ、あれだけ大きなシステムキッチンなので、食器の類は全てそちらに納まっているらしく、食器棚などの大きな家具は一切見えず、電話はインターフォンなどのシステムと一緒にあった壁掛式だし、家庭用としては一番小型の、十四か十五インチと思われる、濃いグレーの液晶TVは、リモコンと一緒にあってあろうことかテーブルの上にのっている。

置き場所がないわけではないので、結局そこが見やすい位置なのだろう。

床面積的には、どうやらキッチンよりは、気持ち広いくらいらしいが、置かれた物の少なさを考えると、これくらいでちょうど良いのかもしれない。

窓の脇には、比較的よく目にするタイプの、一メートル強ほどの観葉植物が据えられているが、これは近くでよく見れば、本物そっ

くりに作られた、偽物であることがわかった。

ダイニングから廊下に出るためのドアは、白のフレームの内側は、対角線上に、透明から白色へと、グラデーションのようなガラスになっていた。

実はこれらのほぼ全てが、一度どころか、二度、いや三度ならず破壊され、交換の憂き目を見ているのだ。

別に壊れた家具やら建具を買い換える費用は、少年が出すわけではないので、それはそれでかまわないし、たまになら、気分転換には模様替えも必要だろうと、我慢も出来る。

しかし、こうもしょっちゅうとなると、庶民感覚の彼は、さすがに文句も言いたくなるのだ。

それも新しい物を購入するに際して一番うるさいのは、壊した本人なのだから、交換するために壊しているのではないかと疑いたくなってしまうのも当然だろう。

彼女は、この居住空間のデザインもインテリアも気に食わないらしいのだが、こればかりは同居する者として、どうしても譲れない一線である。

獅王子に任せたら最後、下のフロアのような、ゴテゴテした空間にされるのかと想像しただけで、もう勘弁してほしい気分だ。

カウンターはともかく、この一見ツールのような椅子も、後ろに控えるダイニングテーブルも、そうした理由で数ヶ月前に、もめながらもめながら新たに購入したばかりの代物である。

「わかつてはいるんだけど……」

さすがにばつの悪い表情になりながら、獅王子はカウンターの上に綺麗に並べてあった、数紙の新聞の内から英字新聞を手を取った。普通の人間が朝と思っている時間に、起きる習慣を持たない彼女が、それでも世間一般からすればかなり遅い七時に、一階ホールにある専用のボックスに配達される、これらの新聞をあらかじめ取ってこれるわけもないから、ここにこうして揃えておくのも、少年の日課である。

この家の日常生活は、彼がいなければ、まっとうに機能しないといっても過言ではないのだ。

日本での生活は相当長い彼女だが、それでも、ブラックのコーヒーを飲みながら、朝一番に読むのは必ず英字新聞である。

「で、また狼に振られたわけ？」

素足に薄いグレーのストライプのスリッパを突っ掛け、ストーンウォッシュのジーンズに、カシミアの黒のタートルネックのセーターの上に身に着けている彼は、アメリカ資本の超有名テーマパークのマスコットキャラ入り男女兼用タイプのエプロンを翻して、くりと後ろを向いた。

以前は、それしかなかったからと、明らかに女性用とわかるものや、よりにもよって割烹着でキッチンに立っていたから、いかに、住人以外の目に触れる可能性が限りなく低いとはいえ、止めて欲しいと懇願した獅王子に、さすがに本人も思うところがあつたのか、たまたま遊びに出かけたそのテーマパークで見つけたエプロンを、あるったけの柄違い色違いで、十枚ほど購入してきた中の一枚がこれだ。

獅王子にすれば、それもちょっと言いたいのは山々だったが、これにも駄目出しをしたら、その次にはどんな奇天烈な物を買ってくるのか想像もつかなかったので、そこは忍の一文字で沈黙を守ることにしたのだ。

グリルから程よく焼けた鮭を取り出して皿にのせると、そこになんとも不似合いな、ジャガイモを細切りにしてもやしと炒めた物と、茹でたブロッコリーを付け合せに盛り、横座りに脚を組み、肘をカウンターについてコーヒーを飲みながら、新聞を読んでいる獅王子の前に置いた。

ちようどしゃべりだした時に後ろを向いてしまったので、声は聞こえても新聞を読んでもいるし、内容を理解できなかったのか、それとも故意に、無視しているのか、彼女からの答えはない。

脚を組んでいるため、バスローブの合わせが割れて、艶めかしく

も美しい脚線美が、際どく露わになっているのだが、見慣れている彼にとっては、どきどきとするというよりも行儀の悪さの方がよほど気にかかっていた。

狼といい、彼女といい、どうしてこの家の住人は、こうも日常における礼儀作法を蔑ろにするのだろうか。

狼はともかく、獅王子においては、外での猫かぶりは完璧なのを、嫌というほど見せ付けられているから、よけいにそう感じる。

出し巻き卵に大根おろしをそえ、鷹の爪の輪切りと一緒に漬け込んだ白菜の浅漬けに、納豆、のり、昨夜、下味をつけておいた根菜の煮物、最後にほかほかの白米をよそった茶碗と、豆腐とわかめ、油揚げの入ったお味噌汁のお椀を置けば完璧である。

老舗旅館も真っ青になりそうな、見事な純和風の朝食に、その間にざっと紙面をチェックした獅王子は、視線を移して黙り込んだ。

英字新聞でも、所詮は日本版なので、もっぱら紙面を賑わせていたのは、狼と一緒にワイドショーで見ていた例の事件である。

「……聞きたかったんだけど、何でずっと和食なわけ？」

自分の生活様式が、ほぼ洋式スタイルだと知っているくせに、寒くなってから毎朝のように出されるようになった和食に、さりげなく文句をつければ、表面上はにこやかに笑みを保ちながらも、彼の額にくっきりと青筋が浮き上がった。

「お言葉を返すようですが、旬じゃない、ハウス野菜なんぞ、おいしくないから食べたくないと、わがままおしやったのは、どこのどなたでございましょうか？」

日本の冬の野菜となれば、根菜以外の葉物はわりと灰汁の強いものも多くて、生のまま野菜サラダにするにはむかないし、やはり身体も冷える。

獅王子が冷え性だという話は聞いたことがなかったが、女性ではあるし、一応それも考慮して、温野菜のサラダにしてみれば、どうも嗜好にあわなかったようで、すぐに見向きもしなくなってしまう、それで仕方なく、夕食はともかく朝食は、冬の期間だけは和食に切

り替えてみたのだが、それすらも気に入らないらしい。

彼がこの家にやってくる前、獅王子と狼の二人は、家事などろくに出来もしないくせに、その傍若無人ぶりで、雇った家政婦の誰もが、三日と持たずに泣いて辞めていったと、誰彼となく伝説のように聞かされていたが、これでは当たり前だろう。

第一、この家の住人三人の中でも、特に洋食を好むのは獅王子だけで、会った当初は、単に自分で作るのが面倒だったのか、それが習慣だったのかは不明だが、パンとコーヒーだけのコンチネンタルブレックファーストだったのを、自宅でそんなわびしい朝食を取るなんて冗談じゃないと、目くじらをたてた少年によって即座に、卵料理にソーセージなどの付け合せ、サラダ、野菜もしくは果物のジュース、スープまで付いた、アメリカンブレックファーストの豪華版に変更された。

狼は特に何も言わないが、態度からすると、パンよりはご飯が好みのようで、二人は朝に限っては、ほぼ和食一辺倒なのだ。

ああ、そういうえば、そんなことを言ったことがあるような……と、笑顔の下に隠されている彼の剣幕に、あえかな記憶を呼び起こし、ついごまかし気味に遠い目をすれば、それも許さないとばかりに目前に、赤い漆塗りの、獅王子専用の箸が突きつけられ、それをありがたく頂戴すると、黙々食し始めた。

日頃のこうした何気ない生活は、全てを彼が取り仕切っているため、臍を曲げられてしまった日には、まず食生活が成り立たなくなるので、頭が上がらないのだ。

金に困っているわけではないので、外食という手も確かにあるが、それも長く続くとしても飽きがくる。

そう好き嫌いがあるわけでもないし、食べ始めてしまえば、女性用の茶碗に山盛りの白米と共に、おかずも全てぺろりと平らげにくせに、と目を眇めながら、今度は煎茶を、小振りな桜模様の湯飲みに注いで出した。

「それで、また、狼に振られたわけ？」

箸が進んでいるのを確認してから、コンロに両肘を突き、彼はもう一度、同じ問いかけを繰り返した。

それに、獅王子の手がぴたりと止まる。

「……わかっているくせに、わざわざ口に出すなんて、ずいぶんと良い性格になったわね、羽島鷹人君？」はじまたかと

ふふふ、と口では笑っているが、どう見ても目がかなりマジな獅王子に、鷹人がにっこりと応じ返す。

「あなたにそんなこといわれる筋合いありませんよ、雷尾獅王子さん」らいお

がちちりと絡み合った視線が見えない火花を散らす中、二人はしばし、見る者があれば背筋が冷たくなるような、上辺のみの微笑合戦を繰り広げていたが、すぐにそれにも飽きたのか、どちらともなく、獅王子は食事を再開させ、鷹人は味噌汁の入っていた鍋を片付け始めた。

「狼、どうせ食べないんでしょう？」

もともと、食べたり食べなかったり、どちらかといえば、食べない方が多い彼だから、疑問も感じずに片付けてしまったが、空に近かった鍋の残りを、コンロのほぼ真後ろにあるシンクの三角コーナーに空けているうちに思い出して、とりあえずの確認に声を張り上げる。

「食べないって言ってたわね。……まったく、あれは食事とは違っていてわかってるくせに、ナチュラルハイの状態なもんだから、空腹を感じないのよ。悪い癖だわ」

生き物が本能として持っている三大欲求の中でも、常日頃一番自覚する機会が多いであろう食欲が薄いというのは、かなり問題なのではないだろうか。

ぶちぶち言いながら、とても男の子が作ったとは思えない、見事に綺麗に巻かれた出し巻き卵を口の中に放り込む。

噛めば、しょうゆではなく、出し汁のかかった大根おろしの風味と、ふんわりとした甘さ控えめの、なんともいえないおいしさが広

がった。

鷹人が作る料理は、元々本人にその才能があったのか、たゆまぬ努力の結果なのかは不明だが、見た目も味もほぼ完璧で、苦手というよりはまったく出来ない獅子王にとっては、特にこの出し巻き卵を食べる度に、世の中なにか間違っているという気がして、しやうがなくなるのだ。

明日辺りにはそろそろ、ひじきの煮つけが出てくるような予感がある。

ちなみに、この白菜の浅漬は自家製で、大きな声ではいえないが、沢庵も漬けているのだ。

寒風が吹きすさびだした頃、裏手にあるサンルームの外に吊るされた、沢庵にするために干されている大根を初めて目にした時は、正直、卒倒するかと思ってしまった。

「それで、そのついでにアタックしたんだ」

けらけら笑いながら、鷹人は鍋の水気をふき取ってコンロの下引き出しタイプの収納にしまうのを、何気なく追っていた獅子王の眼差しが尖る。

「なんでそう、狼に執着するわけ？ 第一、自分に振り向くはずがないって断言したのは、獅子王さんじゃない」

話しながらも、次は鍋を洗うついでにゆすいだ布巾で、クッキンググヒーターの上を拭いている辺りが、どうも所帯じみていると常々思っていたのは、賢く口には出さなかった。

嫌味として言ってやりたいのは山々だが、これはちょっと地雷なので、まずい。

塗り箸ではすべるので、面取りされた里芋を、ぐっさりと突き刺して口に入れる。

関西生まれでも、関西育ちでもないはずだが、どれもが薄めの上品な味わいだ。

味噌汁だけが合わせ味噌なのは、こだわりらしい。

味噌も自家製とまで言い出さないのは、幸いだった。

「まだ秘密、ってやつ？」

その科白に、はっとする。

悪戯っぽくウィンクして、明るく言っではいるが、いいかげん秘密主義の自分達に対して、鷹人がかなり我慢をしてくれているのはわかっていた。

この嫌がらせとも取れなくもない問いかけも、ちょっとした意趣返しのようなものに過ぎない。

それに、獅王子は軽いため息をついた。

「……秘密なのは本当だけど、正直に言えば、知って欲しくないのよね」

だから、たまには内心を吐露してみるのも必要なのだ。

理解を示してくれている彼だからこそ、こんなに後ろめたい。

最後のレンコンを、そんな気持ちと一緒に飲み込んで、いただきますを言わなかった代わりのように、箸を持ったまま、ご馳走様でしたと、丁寧に両手を合わせる。

全てさらけ出して、分かち合ってしまったえば、楽になる部分もかなりあると思うのだが。

「結局、鷹人にまだ話せない部分って、暗くて汚い面ばかりだし、いつか必ず、嫌でも知らなくちゃならない時が来るから、それまでは知らないでいて欲しいと思うのは、きっと私と狼のわがままなのよね」

彼女は、食べ終えた食器をきちんと重ねて、カウンターとキッチンの境目の壁の上に乗せると、肩をすくめた。

それを受け取ってシンクに運びながら、いきなり真面目になった内容に、鷹人は黙って耳を傾ける。

彼女達はいつもこうして、いきなり普通の会話の中に、ごく重要な話を織り交ぜてくるのだ。

まるでそれが、世間話の一部で、聞き流されるのを期待しているかのように。

「……それじゃ、それは置いという」

例によって、割り切ったように返せば、安心したように、少し残念そうに、獅王子は複雑な笑みを見せるのもまた、いつものことだ。鷹人に見ても、物分りの良いふりをしていゝわけではない。そんな風に装っていたことも以前はあったし、子供のように癩癩を起こして、なんとしても聞き出そうとあがいたこともあったが、豪儀なことでは引けを取らない獅王子が二の足を踏むだけあって、そうして引きずり出した真実に、打ちのめされたことは一度や二度ではなかったからだ。

そうした経験を積んで鷹人は、無理に知ることにはせずに、少しづつ、自然に明かされていく事実を受け入れていこうと、考えを改めていた。

「狩りには、行くんだよね？」

とりあえず話題を移す。

これも同じくらい、ある意味ではそれ以上に不穏な題目ではあるのだが。

「そりゃ行くわよ。……報酬は、前払いされてるんだから」

当然のように言いながら、獅王子は、あまり良い顔はしていなかった。

「これに関してだけは、狼は律儀だし」

日常における生活に関しては、かなり一般常識から外れた優雅な日々を送っているため、人のことなどあまり言えた義理ではない獅王子から見ても、狼は、それに輪をかけて、常識を宇宙の彼方に放り投げてしまった、明らかな生活破綻者であった。

そんな人の都合も約束も、それどころか自分のことすらもまったく気にしない彼が唯一、何よりも優先して行なうのが、『狩り』と呼ぶものののだ。

「ま、確かにそういえば、そうなんだろうけど……」

目を据わらせている獅王子に、鷹人は食器を浸すためにシンクにぬるま湯を張りながら、視線を泳がしてしまう。

これに関しても彼女は、鷹人が狼に直接聞きに行くのは嫌がるく

せに、その話題を持ち出すと、話さなければならぬとはわかっていても、こうしてぶっきらぼうになるのだ。

「そういえば鷹人は、わりとこれに関しては寛大なのね」

嫌味というほど低レベルではないだろうが、獅王子に、いくぶんの不思議さと不愉快さも織り交ぜて尋ねられれば、鷹人は眉を盛大にしかめた。

「別に寛大なわけじゃないよ。そんなの、獅王子さんだってわかってるはずだろ？ 本音で言うなら、今すぐでも止めてもらいたいところだけど、狼にとってどうしても必要なのは事実なんだし、今の条件で許可を出したのだって、獅王子さん達じゃないわけ？」

感情的になりすぎたと思わないでもなかったが、ちょっとその言い方にムツとして、つい立て板に水とばかりに甲高い声で反論したのは、獅王子もだいぶ驚いたようだ。

「ごめん、失言だったわ」

しかしそれと同時に、自分が迂闊な発言をしたことにもすぐに気が付いて、しまったという顔になり、取り戻せるわけではないが、今のは無しというように大きく手を振って謝罪する。

鷹人が、『狩り』に対して良い感情など持っているわけがないのは、わかりきっていたはずだから。

「……それでいつ？」

もちろん、わざとではないことはわかっているから、わだかまるものはあっても、鷹人もそれ以上は追求しなかった。

いうなれば、『狩り』を知っている誰もが、仕方ないとはわかっていても、好きこのむことなど、到底出来ないからだ。

「今度の満月だと、言ってたけど」

苦虫を噛み潰したような獅王子の言葉に、了承を示そうとして、何か引っかかるものを感じて、鷹人は首を傾げた。

「あれ？ その頃って、下でパーティやるって、獅王子さん言ってなかったっけ？」

思い出してみれば、記憶にも新しい、というかあまり思い出した

くも無い騒ぎが脳裏によみがえって、頭痛を覚える。

「パーティはやるけれど、日程はちゃんとずれてるわよ。身内の集まりなんだから」

獅王子も同じ様に思い出したのだろう、渋い表情になった。

「下は獅王子さんのテリトリーなんだから、それはかまわないけど、……やっぱり出なくちゃいけないわけ？」

それまでとはうって変わって、恐る恐るお伺いをたてれば、獅王子の顔付きが陰しくなった。

出る出ないの押し問答に、なんだかんだと一昼夜を要し、説得を早々に放棄した獅王子によって、強制的に出席と宣告されたのは一ヶ月ほど前だが、それに注ぎ込まれた労力ときたら並大抵ではなかったもので、そんなわがままが通用するわけもない。

「身内の集まりだって言ってるんだから、あたり前でしよう！ あんたも、狼も問答無用で出席なのよ！ それが目的なんだし、いまさら何を言ってるの！」

その時の再現ではないが、獅王子にヒステリックにキンキンと怒鳴られ、これに関しては明らかに立場の弱い鷹人はたじたとする。初めてではないにしても、やはりあらたまったところではない、格式ばったパーティなど、ご馳走が食べられるにしても、大の苦手だ。

「ちゃんと服も見立てておくから、逃げないのよ」

すでに及び腰の鷹人に釘を刺して、というか、どちらにせよ出ないというわけには絶対にいかない席なので、飲み終わった湯飲みを、ドンと音を立ててカウンターに置いて、おかわりではなく、コーヒーを要求する。

それに彼は、情けなさそうに眉をたらしした。

「どんな良い服着たって、しょせん学生にしか見えないんじゃない、意味無いよ」

唸り声を上げながら頭を抱えて苦悩する鷹人に、別の意味で頭痛を覚えてきた獅王子は額を指で押さえた。

確かに、まったくもって当人の言う通りなので、コーディネートする側としては、いつも散々苦労しているのだ。

だからといって、責任放棄して任せると、これまた場違いな格好をしてくること請け合いなので、例え単なる同居人という関係であろうとも、獅王子のプライドが許さない。

正装及び盛装なんて、どうして良いのかわからない鷹人と、一応似合う似合わないはわかっているようだが、着られさえすればなんでもかまわない狼の、あらたまった席での服選びは、かくして強引に獅王子によって掌握されているのである。

しかも事あるごとに新調されているのだから、けして狭くは無い造り付けのクローゼットのかなりのスペースを、普段着になどは絶対出来ないフォーマルに侵食されてしまっているのが現状だ。

鷹人としては、もう少し着回しして、増殖を食い止めたいのが正直なところなのだ。

「年相応とは言わないから、せめて二十歳くらいに見えればまだましなのにく」

要望に応えて普通サイズのコーヒーカップを新しく出してくると、サーバーの残りのコーヒーをそそぎながらの鷹人のぼやきを耳にして、カッカしていたはずの獅王子は、いきなり盛大に噴出した。

「年相応って、あんたねー」

なんとかその後を続けようとするも、笑いのつぼに、ちょうどクリティカルヒットしたらしく、後から後から大爆笑があふれ出てきて、ちっとも治まらない。

さっきまでの怒りも忘れ、それこそ腹をよじり、涙をこぼさんばかりに、美人が台無しになるような笑いに襲われている獅王子を、繊細な細工と絵付けの施された、こちらも高級ブランドのコーヒーカップに被害が及ばないよう、少し離れた位置に置いてやりながら、鷹人がひどく無然とした。

「二十歳はまだしも、年相応に見えたら、かなり恐いわよ」

呼吸困難に陥りそうになりながら、目尻にたまってしまった涙を

ぬぐっているのを見て、鷹人は何もそんなに笑わなくても思う。

確かにバカなことを言った自覚はあったが。

「それはそうだけど……、何もそんなに受けなくてもいいじゃない」
ちよつと恨みがましく言えば、獅王子はさも心外だといわんばかりに、わざとらしく目を見張って鷹人を見返した。

「変な事言うからよ」

「そうは言うけどさ」

鷹人は子供のように口を尖らせる。

「やっぱり、見た目って重要だよ？ そりゃ、何回も出てはいるけどさ、正直俺くらいの年齢の人なんか見たことないもん。話の合う相手もないし、浮きまくりだよ」

一度都合があつて、鷹人一人だけが遅れて下へ行ったときには、参加者の誰かに、なんだこの子供はと怒鳴られ、危うく摘み出されそうになったことがあつたのだ。

いつかは必ず、そんな目にあうだろうと覚悟はしていたが、やはりそれなりにショックは受けたので、以後は獅王子か狼が一緒でないと、パーティ会場に行かないようにしたし、鷹人を摘み出そうとした人物は、その次からは姿を見かけなくなったところからして、参加者のリストからは外されてしまったようだ。

そういえば、そこまで露骨にされなくとも、邪険にされたり蔑んだ視線で見たりした参加者が、気が付くと来なくなっているところからして、ひよつとして自分は、参加者をふるいにかける基準にされているのではなからうかと、微妙に疑いを持っている。

「それは……そうかもしれないけれど」

鷹人の切実ともいえる訴えに、獅王子も困った表情を見せた。

実年齢はあくまでも上なのだが、どうしても高校生くらいにしか見えない鷹人は、世間的にも致し方なくそう振舞う場合が多いので、感覚もそれに追隨しているのか、流行に割と敏感な現代風の若者という部分が多々あつて、どうにもそうしたものに疎くなりがちな年配連中は付いていけないのだ。

そのせいでどうしても、そうした参加者ばかりが目立つパーティでは孤立してしまいがちになり、本当はそれでは困るので、奮起を促そうと思って鷹人に来てもらっているというのに、世の中はそうそううまくはいかないものだ、と、獅王子は溜息を付いた。

「でも、今回は大丈夫よ、新しい人が来るから、その人のお披露目でもあるの。見た目は三十位だって言ってたから、話は合うんじゃない？」

落ち込む鷹人の気を引き立てるようと、慌てて獅王子は言いつくろった。

「なに、どっかから転勤してきたの？」

てっきりこのビルに入っている支社のほうに来るとばかり思っているらしい鷹人に、獅王子は首を横に振る。

「違うわよ、彼は支社とは関わりのないところで働いているのよ」

それに鷹人は、思いつき怪訝な表情をした。

身内のパーティという以上、参加者は自分達を除けば、ほぼ階下の支社に勤める、しかもある程度の役職以上に限られている。

それなのに、関係のない普通の仕事についているものを招待するとは、どういうことだろうか？

「会ってみればわかるわよ」

意味深な発言内容からいって、おそらくは『秘密』の中に入っているであろうと思われるそれに、尋ねて良いものなのかどうか躊躇していた鷹人に、獅王子はそういつて笑った。

どうやらその人物に接触すること自体は、『秘密』ではないらしい。

「でも、そうね……」

それでも、なんとなく複雑な気分になっている鷹人に、獅王子はさらに思案し始めた。

その口角が徐々に引き上げられ、なにかを企んでいるとしか思えない笑みを刻むのを目撃するにいたって、鷹人は背筋にぞわぞわと、不吉な予感が這い上がってくるのを如実に感じた。

この笑みを浮かべた獅王子は、良からぬことをしでかすに決まっていたからだ。

「彼は初めてなわけだし、もう一人くらい、同年代がいた方が安心よね」

我ながらナイスなアイデアと、したり顔の獅王子に、鷹人はすぐには理解しかねたが、やがて思い当たってぎよつとする。

まさか、しかし本気だとしたら、とんでもない話だ。

「ちよつと、獅王子さー」

「招待客をもう一人追加しましょう、木内貴史を」

楽しそうに獅王子の口から出た名前に、うわー、やっぱりーと内心悲鳴を上げながら、鷹人ががっくりと脱力する。

こういうところが、良識というか、考え方を疑いたくなる、そもその要因なのだ。

「本気なのー」

なんだか泣きたい気分になって、なんとか止めようとする鷹人に、獅王子はご機嫌に喉を鳴らす。

「あら、いいじゃない。鷹人だって直に見ておいたほうが良いでしょう？」

鷹人の脳裏にとっさに、もう一人の同居人の、ひどく綺麗な顔が浮かんだが、それを強く否定する。

ダメだ、狼じゃ絶対面白がるに違いない。

「だって、身内だけのパーティーなんですよ」

顔を引き攣らせながらも、そういい募る鷹人に、獅王子は一瞬考え込んだ。

確かに、基本的に身内の集まりなので、部外者が混ざるのを極力嫌う傾向はある。

「私が招待するんですもの、かまわないわよ」

しかし獅王子はそれを、あっさりと振り切った。

「だって彼は、『餌』だもの」

そうでしょ？ と目を細め、彼女は残酷に笑う。

捕食者のそれで。

「身内だって、一度くらい見ておいた方が、後学のためにも良いと思わない？」

だいたいいつも面倒を背負い込むのは、狼と同居している自分達なのだから。

言わずとも、明らかに目がそう言っていて、鷹人はあきらめたくなくとも、あきらめるしかなかった。

一度口にしたことを、ましてこうまで楽しんでしまっていては、撤回などするはずもない。

「……当の本人が来るかな」

無駄な抵抗ともいえる鷹人の呟きに、ほどよく冷めたコーヒーを飲み干し、獅王子はおもむろに立ち上がった。

確かに木内貴史の方が拒否すれば、この企みは成り立たない。

それは鷹人の最後の砦というか、わずかな望みであったが。

立ち上がった獅王子は、まるで見せ付けるようにしなを作って、バスローブの上からとはいえ、若い男の子には目の保養とも目の毒とも付かぬ、豊満な肢体のラインを見せ付ける。

「来るわよ、来させて見せるわ」

そのままここで脱ぎだすのではないか危惧したが、そこまでは悪乗りしていないようだ。

狼に振られたダメージが、無意識に残っているのかもしれないがいや、鷹人も男なので、見せられて楽しくないというわけでは決してないのだが、本性まで知り尽くした今となっては、逆に迫られる方が恐ろしい。

「しよせん、男ですもの」

ええ、ええ、そうでしょうとも。

心の中で滂沱の涙を流しながら、鷹人は一人ごちた。

あの獅王子の本気の誘惑に落ちない男は、不能の上によっぽどの不感症か、狼くらいなもんだ。

経験者が言うんだから、間違いはない。

改めて思い返してみると、つまみ食いされたかなあという気分ではあったが、それなりには楽しかったから、まあいいやと、今は割り切っている。

艶然と微笑み、しなやかな、まさしくキャットウォークでダイニングを出て行く彼女に、やれやれと肩をすくめた。

同居人はどちらも、一癖も二癖もありすぎて、付いていけないと思う日もしょちゅうあるのだが。

それがかえって面白いんじゃないと、獅子王あたりは言いそうだし、鷹人にとっても異存はない。

それにしても……。

「まいったなあ……」

カウンターの上のコーヒークップを片付けようとして手を伸ばして、思わず宙を見つめて溜息を付いてしまう。

あんなところから、木内貴史に飛び火するなんて、想像も出来なかった。

一筋縄ではいかない相手なのだから、もう少し自分の言動には注意しよう。

そう反省する鷹人の瞳に一瞬、赤っぽい光が通り過ぎて消えた。

Scene 8

その晩、木内貴史はひどく上機嫌だった。

あの悪夢のような美和子の葬儀から、一週間が経過していたが、先日、彼女が一人暮らしをしていた慎ましいワンルームマンションを引き払うために、名目上は遺品の整理――現実としては残された金目の物の搜索と、それ以外のどうでもいい物は処分しなければならないので、やむなく出向いたところ、作り付けのクローゼットの中の衣装ケースの底から、生命保険の証書が一通、出てきたのだ。約八畳の部屋は、一応フローリングにはなっていたが、五階建ての建物はすでに結構な年代物だった上、駅からも多少距離があり、コンビニやスーパーといった商店も駅の傍にしかないので、便利が悪く、その分家賃はかなり安かった。

メインの通りからも外れていて人通りもそう多くなかったし、バブル時の地上げの影響で、古くから住人の多くが土地を売って他所へと移ってしまい、その後に大きいのやら小さいのやら、アパートやマンションが乱立したため、引越しによる人の出入りは激しく、自分のような人の目をいくぶん憚りたい人間には、都合も良い所だった。

幸恵の死後、美和子に乗り換えてすぐは、もちろん彼女が部屋にいる時間帯だけとはいえ、このマンションに入り浸りの状態だったが、飽きてはいても、まだ手放すには惜しいと思っていた最近は、金を受け取る日も合わせて、週に一度、お義理程度に訪れるだけになっていた。

だから、彼女がいつ、そんな保険を用意していたのかはまったくわからなかった。

いやむしろ、幸恵のことがあるので、さすがに美和子の生命保険の受取人になるのは無理だろうとあきらめていたくらいである。

おそらく、姉を受取人にかけていたのだろうが、その死後、名義

を貴史に変えて継続していたようだ。

彼女が一体どんな心理でこれを残そうとしたのかは、今となっては永遠にわからなくなってしまうたが、嫌ならば、解約してしまえばよかっただけだし、貴史にとっては、それなりにまとまった金が受け取れるという以外は、どうでも良いことだった。

早速喜び勇んで、保険会社と連絡を取ると、幸恵が加入していたところとは違ったが、どこからか噂を聞きつけたのだろう、担当者は明らかに気乗りしない様子で、仕事だから仕方ないとばかりに素っ気無く手続きを進め、幸恵が残した半分以下とはいえ、二千万円程度が受け取れる見込みになった。

これで機嫌が悪かろうはずがない。

数はそう多くなかったが、客からプレゼントされたのだろう、高級なジュエリーや使用していないブランド品は、高値で引き取ってくれる顔見知りの質屋へ流して現金化し、何かあったときのためだったのか、なけなしの二百万ばかり入っていた銀行口座も解約して全額引き出してきたので、これでぎりぎり、保険金の下りるまで食いつなげる目途もたった。

見るからに安物の家具や普段着、ブランド品でも一度使用してしまっている物なども、はした金にしかないが、それでも粗大ゴミにするなら、金を払ってなおかつ、運ばなければならぬし、リサイクル業者に売れるものは全て売り払い、残りのガラクタは面倒だったので、なけなしの敷金礼金の返金分を断って処分を頼んでおいたから、これで面倒事はすべて完了だ。

後は、これらの金が尽きる前に、新しい獲物を見つけられれば、さらに上出来といえた。

浮かれた気分のままに、とっておきのブランド物のシャレたデザインのスーツを引っ張り出し、ちよつと豪勢なディナーへと繰り出したのだ。

昨今リニールされてテレビでも大きく取り上げられた、このシティホテルの最上階にある展望レストランで、舌と胃袋を大いに

満足させた後、同じフロアのバーで、さらに、一応物色を兼ねた祝杯を挙げる心積もりもあった。

もっとも、金蔓とはいっても好みのうるさい貴史にしてみれば、一日や二日で見つかれば苦労はないわけで、どちらかといえば、まだ保険金が入っていないのに散財しようとしている後ろめたさに対する自分への言い訳と、今宵一晚の遊び相手くらいは見繕えるかもしれないという、軽い気持ちからだった。

何せあれだけ毎日ワイドショーに話題を提供して品行方正に徹したというのに、期待していたファンレターは一通も届かなかったし、街角で、己の境遇を同情した美女どころか、誰からも声をかけられるなかったのには、そうそう旨い話が転がっているわけではないと思っただけがっかりした。

その上、美和子の死体に睨まれて、不様に腰を抜かしたあげく、失神してしまったところまでテレビで流されて、むしろ踏んだりけったりだ。

醜態をさらしたことに關しては、あれだけショッキングなことがあったのだから、仕方ないと思う。

しかも、あれ以来ほぼ毎晩、悪夢を見ては魘され、汗びっしょりになって飛び起きてしまうのだ。

おかげで、精神的にも肉体的にも相当参ってしまい、ぱあっと気分転換したいのは山々だったが、先立つものがなかったので、我慢に我慢を重ねていた。

だから、当面の生活費が手に入るようになったし、ここらでいい酒といい女で、大いに気晴らしをしたところで、罰は当たるまい。

ただ、酒の方は、場所を選んで金さえ出せば良い物を飲むのは容易いが、女の方は、たとえ行きずりでも商売女は好きではないので、その辺がちよっと難しい。

しかし、一旦そう決めてしまうと、とんとご無沙汰だったこともあり、無性に女の肌が恋しくて、目ばしい相手がいなければ、今晚だけは歌舞伎町にでも足を伸ばそうかと、店内をさりげなく見回し

た。

平日の、しかもまだ、飲むには少々早い時間だったこともあり、黒を基調とした幾何学的なモチーフを使った現代風デザインの、高級感漂うさほど広くない店内には、まだ客の姿はまばらだった。

黒の革張りでやや角ばったシルエットの、ゆったりとしたボックス席は十ほどあるが、うまっているのは三ヶ所だけで、その内、比較的貴史に近いボックスに座っている二組は両方、出張中のエリートサラリーマンの息抜きという風体だし、装飾用の柱に半ば隠れている奥の席に座っている女性は、背中を向けているので美醜のほどはわからなくとも、その向かいには男性がすでに座っていて、親密そうに話し込んでいるところからしてカップルらしく、声をかけるだけ無駄そうだ。

貴史は面白くなくて鼻を鳴らした。

ある程度予測していたとはいえ、あまりにも予想通りで落胆してしまう。

かなり大々的に宣伝されていたから、もう少し期待していたのだが、まあ、最初はこんなものだろうと肩を軽くすくめると、とりあえず一杯やりながら、この後どうするかをじっくり考えることにした。

ホステスが相席するような店ではないのでボックス席は端から無視し、入り口からは見えづらい中ほどにある、ちょっと骨太な印象のスツールがしつらえられた、黒のカウンターに目を移して、そこで釘付けになる。

一人の女性が、他に誰も座っていないカウンター席にぽつんと座っていた。

明かりを押さえた店内において、自らが発光しているような錯覚を覚える、背中に軽やかかった美しいプラチナブロンズは、どうして目につかなかったのが不思議なほどの艶やかさで、その存在を誇示している。

ただの後姿だというのに、顔を見なくとも美しさが想像できるよ

うで、呆然と立ち尽くしてしまった。

見落としていたのは、カウンターが視界に入らない位置で店内をうかがっていたこともあるが、最初から度外視していたせいだ。

大体において女性は、一人で来ることが少ないので、カウンター席を好まず、ボックス席に座ることが多い。

その上貴史には、カウンター席で一人で飲んでいるような女は、キャリア志向で高くとまって、男を見下そうと無駄な足掻きをしている馬鹿な連中ばかり、という偏見があった。

しかし、今日の前にいる女性は、そんな偏見を吹き飛ばし、引き付けるフェロモンを全身から発しているとしか思えなかった。

プラチナブロンドの美しさはいうに及ばず、それ以上にすばらしいのが、体のラインにフィットした、きらきらと輝くチャコールグレーのスーツが描く、生唾を飲み込まずにはいられないようなグラマーな肢体のシルエットだった。

ロングのタイトスカートには、深くスリットが入っていて、足を組みかえるとちらりと、蝶の模様のあしらわれたストッキングが、ガータータイプであるのが見て取れ、男を誘う。

エナメル黒の、バックストラップのピンヒールまでつながる脚線美は、思わずふらふらとその前に奴隷のようにかしずいて、足の甲に口付けしたくなる妖しさだ。

ジゴロだ何だともてはやされ、女に一目ぼれされたことは多々あったが、自分がこれほどの衝撃を受ける出会いを経験したのは、生まれて初めてではないだろうか。

思惑を大きく外れて、たとえば顔が十人並みだったとしても、この魅惑的な肉体があれば下世話な話、その手の商売で楽に一財産稼げるだろうし、一夜の相手としては申し分ない。

貴史は、唇を軽く舌で潤すと、いかにして口説き落とすかをシミュレートしつつ、表情を引き締め、身嗜みを軽く整えて、それまでとは違って変わった颯爽とした歩き方で、気取ってカウンターへと近づいた。

これが上手くいけば、楽しい夜になりそうだ。

「失礼ですが、お一人ですか？」

耳元で囁かれると骨抜きになりそうと、付き合った女の誰かが夢見心地で呟いた、低音の、甘さをふんだんに含んだ声でそう尋ねながら、不自然さを感じさせない慣れたしぐさで、彼女の隣を占拠する。

多少強引ではあるが、一見すると優しげで品の良いハンサムの貴史は、こういう場所ではさほど警戒されないというか、むしろ声をかけられたいと思っている女性も多いため、逆に歓迎される場合が多い。

たとえ警戒されたとしても、話術もそれなりに操れるので、ガードを必ず解きほぐす自信もあった。

ローズレッドの口紅も鮮やかな口元が、貴史に気取られない角度で、うっすらと酷薄に微笑む。

完全に腰を落ち着けるまでは、できる限り露骨に彼女を見ないようになしていた貴史は、一連の動作の流れのしめとして、その横顔に自慢の流し目を送ったところで、自分の方が電撃を受けでもしたように、驚愕に全身を固まらせた。

それはもちろん、期待が外れたからではなかった。

「ええ……」

笑みを悩ましいものへと変え、瑞々しく輝く唇がもったいぶって開き、それに見合う麗しい声を生み出す。

「今日は、一人ですよ」

白い肌の中、間接照明を受けて、金茶にきらめく瞳が、ゆっくりと貴史を映した。

美しい女だった。

いや、むしろ美しすぎた。

ずんぶん綺麗に染まっていると思った髪は、こうして間近で見ると明らかに本物で、整いすぎた顔立ちは、確かに日本人離れしていたが、頭がその衝撃にいかれたのでなければ、確かに日本語を話し

ていることと、俗に言うバタ臭さをさほど感じないところからすると、ハーフなのかもしれない。

なにせよ、貴史は日本語以外、語学はからっきしだから、ありがたい話だ。

それにしても、こんな、美女という言葉が色褪せるような女性が、現実にいるとは思わなかった。

スローテンポのジャズが心地よく流れる、照明がひかえられて落ち着いた中であって、その存在はまばゆいばかりであったが、浮いているわけではなく、雰囲気溶け込んでいるというよりは、むしろ、彼女のためにこの空間があるようにすら感じられた。

半分以上思考を麻痺させながらも、そのおかげで、ものにすることばかりに気が回らなくなったせいだろう、どこか、直接会ったわけではないが見たことがあると思ひ出した瞬間に、珍しく一緒に名前も頭の中に浮かんできた。

いや、その天上の美しさと名前の奇抜さで、一度見聞きしたら忘れられないだろう。

「……ひょっとして、モデルの雷尾獅子さんじゃありませんか？」
いつもならこんな直接的で、失礼な物言いはしたりしないのだが、すっかり美しさにあてられてオーバーヒート寸前になり、声を上げさせながらうっかりそのまま口にしてしまった。

ここまで近接していなければ、危うく指まで指してしまうところだ。

美和子はあまりブランド物が好きではなかったのも、ファッションショーを見に行くようなことはなかったが、幸恵が生きていた頃は、年二回のコレクションの発表会には、必ず招待状が来ていて、そこで何度か、舞台の上を、まるで女王のように、毅然と歩く彼女の姿を見たことがあった。

スーパームデルを超えるとさえ言われる獅子王は、なんでも元はヨーロッパの貴族だという名門の資産家一族とかで、本来は働く必要など一切なく、道楽でモデルをしているため、ひどく気まぐれな

のだという話も聞いた。

しかしその美貌、気位の高さ、ミロのビーナスを髣髴とさせる抜群のプロポーションを、こよなく愛するデザイナーは多く、けして専属契約を結ぼうとしない彼女の、プライドよりなお高いお眼鏡に適い、舞台を踏んでもらう約束が出来れば、それだけで成功するとさえ言われるほどだ。

そのために普段着にいたるまで、所有する服のほとんどが、ありとあらゆるブランドのデザイナーから直接送られた、一点物ばかりだという噂まであった。

「あら、よくご存知ですね」

男性の方は、そうした話題には疎いのかと想着いましたのに。人によっては、機嫌を損ねそうな物言いではあったが、獅子王は特に気にした様子もなく、笑みを深める。

後ろからはスーツのように見えたが、ジャケットは胸を強調するように、衿が大きく開いていて、インナーはビスチェタイプなため、貴史からはもろに胸の谷間が覗き込めた。

「私もあなたのお顔は、最近テレビでよくお見かけしましたわ。…木内貴史さんとおっしゃったかしら。この度は、お気の毒なことでしたわね」

さらりと軽く耳元の髪をかきあげれば、ずいぶんと粒の大きなダイヤモンドのピアス、と思いきや、細い銀色のラインが耳たぶに沿って後ろに回っているの、イヤリングのようだ。

胸元には、一カラットは間違いなくあるだろうダイヤが、付いている棒状のペンダントヘッドが三本、まばゆいきらめきを放っている。

右手の中指には、細かいダイヤモンドを石畳のように敷き詰めた、パヴェと呼ばれる大振りの指輪、左手には、小さめのダイヤがはめ込まれた抽象的なデザインリングが、小指と薬指にされている。

身につける人によっては嫌味にとれるほど、宝石で着飾っているが、それすら霞むくらい、獅子王自身方がまばゆかった。

そのせいだろうか、彼女が自分と同じようにテレビを見ていたという事実が、なんとも浮世離れしていて奇妙に感じられる。

「ご丁寧にありがとうございます。あなたのようすばらしい方に倅んでいただけるとは、草葉の陰で義妹も喜んでいることでしょう」
一見紳士的に返答しながらも、貴史の心臓は高鳴り、この世ならぬ存在のような彼女が、自分を見知ってくれていて、しかも声までかけてくれた現実には舞い上がらんばかりだ。

こんな夢のような相手に巡り会えようとは、ここ最近の立て続けの不幸を全て差し引いても、お釣りがくるというものだ。

大まかに記憶されているプロフィールだけでも、これ以上の獲物がいるわけではない。

いや、それを抜きにしたとしても、なんとしてもこの、極上の女を手に入れたかった。

服の下に隠されている、乳白色の肌を思い描くだけで、下半身に熱が集まってくるようではたまらない。

「お上手ですね」

微笑む彼女はそういうと、カウンターにすでに置かれていた、琥珀色の美しいカクテルの入ったグラスを、暗いトーンのパールピンクのマニキュアの塗られた指で優雅に持ち上げ、唇へと運んだ。

グラスが大きく傾けられ、半分近くが口内に流し込まれると、グラスをまたカウンターに戻し、濡れた唇を、ちろりとのぞいた舌が蠱惑的に舐めとっていく。

一つ一つの動作のすべてに誘惑されて、貴史はもう、獅子王から一時も目を放すことが出来なくなっていた。

「飲みませんか？」

身動き一つせずに、ただひたすら、欲望に目をぎらつかせながら凝視していたところに、からかうような声かけられ、ようやく貴史は我に返った。

まるで十代の少年に戻ったように、衝動のままに行動しそうになっていたことに気付き、何とか表面上を取り繕いながらも、内心で

は激しく動揺していた。

いろいろな女と付き合ってきたが、初対面から、こんな強烈な劣情を感じたことはなかった。

今までの人生で、こつこつ積み上げてきた経験から得た、女に対する扱い方と自信が、根底から覆されてしまいそうだ。

それだけ彼女が魅力的過ぎるということなのだろうか。

「あなたの美しさに、もう十分に酔っていますよ」

いつもなら歯が浮きそうな世辞も、心の底からの本心だった。

「あなたのように美しい方に、私はお会いしたことはありませんでした」

どこか時代錯誤とも思える賛辞にも、獅王子は変わらず微笑を浮かべているだけだ。

グラスの脇に置かれていた右手を、恭しく取り、その爪先に臣下か騎士のごとく、軽く唇を触れさせる。

まるでそれすらも畏れ多いというように。

「そんなことをおっしゃってよろしいのかしら？」

おそらくこんなことは、彼女にとって日常茶飯事なのだろう、驚きも抵抗もせずに受け入れてはいたが、さりげなく貴史の手をはずさせると、長い睫を伏せがちにして、グラスの縁を指でなぞった。

「あなたは愛していた方を、亡くしたばかりなのではなくて？」

氣を使っているのか、確かめようとしているのか、特に感情のこもっていない声でそう言われ、貴史は思い切り舌打ちしたいのを我慢して、少し不思議そうにした。

「確かに妻を亡くしましたが、もう三年ほど前の話になりますよ」

そう嘯きながらも、幸恵が死んで一人身になったから不倫にもならないし、当初はそう遠くない時期に結婚を、と考えていたので、美和子との関係を隠さずにいたことが、こんなところで悪影響をもたらすとは思わなかった。

結局、美和子が嫌がったのと、一応、世間体をはばかって籍は入れなかったわけだが、それが裏目にでたようだ。

例のハプニングで、全国ネットで醜態をさらして以来、嫌気がさしてワイドショーのチェックはすっかりやめてしまったが、一時の加熱ぶりはなくなったものの、カメラを持った連中が近辺をうろついているのは知っていたので、内縁の妻といていい美和子との関係を、あることないこと含めて面白おかしく仕立てては報道し続けているのだろう。

「あら、美和子さんという方は、愛していらっしゃらなかったんですか？」

被害妄想が過ぎるのかもしれないが、なんとなく楽しんでいるようにも見える獅子王の問いかけに、貴史はここぞとばかりに大いに顔をしかめた。

「誤解ですよ」

彼女はメディアを通して、貴史達の情報を得ていたに過ぎないから、何が真実かは知らないはずだ。

だったらここは詭弁を弄するに限ると、できる限り真摯に見えるように、瞳に力を込めた。

「彼女の気持ちは、今となっては確かめようもありませんが、私にしてみれば、よく出来たかわいい義妹という感情しかありませんでした。どのような報道があったのか知りませんが、あくまでそれは作り事に過ぎませんよ」

痛ましげに目を伏せ、気落ちしているかに見せて、同情心をあおるように切々と訴える。

曰く、自分はマスコミに翻弄される被害者であり、それらは事実無根だと。

こういう演技は得意中の得意だし、大抵の女性がこうやってしおらしくしていると、母性本能をくすぐられるのか、ひどく感銘を受けてくれるのだ。

「まあ、それは、お気の毒ですこと」

獅子王は、そのあざとい芝居に感じ入っているように見せかけて、憐憫をこめて呟いた。

しかしそれは、貴史に向けられたものではない。

彼女もかわいそうに。

貴史を見つめる獅王子の目に一瞬、冷ややかな銀色の光が浮かんで消えた。

こんな男に良いように騙されるなんて、馬鹿な娘だと、世間では言うかもしれない。

しかし、突如として燃え上がる恋情の炎を、思うがままに誰もが操ることが出来るのであれば、世の中これほど、『痴情のもつれ』といわれる事件は起きていないはずである。

本意ではなかった美和子にしても、抗うに抗えない焦燥を前に、悔し涙を噛み締めながらも膝を折り、あげく破滅するしかなかったのだと思えば、それを憐れと言わずして、なんと言うべきか。

本当に悪いのは目の前で、彼女のことをもう彼方へと置き去り、次の犠牲者にするべく自分を口説き落とそうと必死になっている、この男だというのに。

銀光が獅王子の瞳をよぎったのは瞬時のことだったので、貴史はそれに気が付かなかったが、何か鋭い、冷気のようなものを感じて、思わず首をすくめた。

空調の風があたったのかとも考えたが、それきり何も感じないし、この手の店がそんな無作法をするとも思えず、首を傾げる。

「どうかなさいまして？」

冷気と共に、何か言いようなない別の感覚が背筋を走り抜けたような気もして、なんとなく落ち着きなく辺りをうかがう貴史に、獅王子は気取られない程度に嘲笑をのせつつ、さらに甘さを上乘せした声を出す。

「いいえ！ なんでもありませんよ」

誘われているとしか思えないそれに、貴史は慌てて口調を保ちながら、かろうじて返答はしたものの、いつもとまったく調子が狂ってしまって、焦りが募る。

せっかくの極上品を目の前にしているというのに、なぜか、手際

よく運べない。

彼女に視線を受ける度、話しかけられる度、逆上せてしまつて、考えられないようなミスばかりを連発してしまうのだ。

もつともモデル業界というのは、生き馬の目を抜くような厳しい生存競争の世界だというから、そこでトップの座に君臨する獅子王からすれば、まだまだ自分など、経験の足りない青二才程度なのかもしれない。

「しかし、そのような質問をされるということは、私に興味がおありですか？」

だが、こうして言葉を交わしている以上、望みがないわけではないのだ。

だからといって闇雲に強氣に出られるほど、貴史は無謀ではなかった。

確かに、日本国内における小金持ちというレベルにあつたが、それを彼女が常に身を置くような世界レベルに換算すること自体が、大きな誤りであることくらいは分かりきっている。

「興味が無いといえ……嘘になりますわね。あなたは、とても魅力的なものです」

それゆえに、この男らしくもない、やや自信がなさそうな問いかけに、獅子王は支配者としての笑みを深め、スツールを少し回転させて真正面から見つめた。

もちろん、誘惑するという当初の目的を忘れないが、だからといってこんな小者の思い通りになってやるつもりなど毛頭なかった。

支配し上位に立つのは、獅子王自身でなければならないのだ。

隣に座って以来、初めて見せた積極的な姿勢に、貴史のモチベーションは一気に急上昇した。

その女郎蜘蛛のごとき誘いに、見事に引っかかったのだ。

商売女は警戒する彼も、普段は純真な女性ばかりを選んで相手にしていたからか、欲望に忠実になるあまりに目がくらんだか、獅子王

子の狡猾さに気がつかなかったようだ。

「私もです。私にとっても、今宵あなたに出会えたことは、偶然などではなく、運命以外の何ものでもありませんよ」

ちよつと気が早いかと思わないでもなかったが、それなりに遍歴を持つているに違いない彼女なら、あまりまどろっこしい手順を踏まずとも、雰囲気さえ損なわなければ、その気があればきつと断つてはこないだろう。

ほんの少し緊張しつつ、身体をずらし、腰に手を回しても拒否はない。

「よろしければ、今宵一晚かけて、もっと互いをよく知り合いませんか？」

うっとりとする美貌が鼻先にあり、ふんわりと夜をイメージさせる香りが、鼻腔をくすぐる。

かいだことのない香水だが、獅子王にはよく似合っていた。

「……ベッドの中で？」

最初は触れるのすら躊躇していた指先が、徐々に大胆に、服の上を滑る。

成すがままに任せて獅子王は、ちろちろと欲望の色がかぎろう貴史の瞳に映る自分を見つめながら、楽しそうに言った。

「お望みとあらば」

貴史は間近に迫った満願成就に、うれしさのあまり、にやけるのを抑えようと必死だった。

これはもう、墮としたも同然だ。

後は、このホテルの、空いている一室に速攻でチェックインすればいい。

そのまま勢いに乗って、口付けようとした貴史の唇に、獅子王はすばやく人差し指を立てて、まるで秘密というように押し当てた。

「どんなに魅力的でも、初めてお会いした方と、一夜を共にするほど節操がないわけではありませんのよ」

密やかな笑い声を立てながら、するりと身を離す彼女に、貴史は

一気に突き落とされて、愕然となった。

それまで何とか持ちこたえてきた平常心も、きれいに消し飛んで、あそこまで誘っておきながらどうして、という悲愴さがありありとうかがえるその情けない表情に、獅王子はいたく満足して、カウントーの上に置いておいた、大振りのスパンコールをつないだ銀色のハンドバックを手にとった。

このまま捨てていくのも、それはそれで面白くて溜飲も下がるが、それでは本末転倒であるし、逃げられてしまうのも癪なので、匙加減は必要だが、この辺で少し持ち上げてやらねばなるまい。

その蓋を開き、中から名刺状の紙を一枚取り出す。

「でも、あなたさえよろしければ、この週末に自宅でパーティを開きますの」

それを差し出せば、まだショックから覚めてはいないようだが、反射的に受け取った。

「出席するのは身内ばかりですけど、よろしければいらっしゃいませんか？もし、いらっしゃってくれるのでしたら……」

獅王子はその耳元に唇を寄せると、とろけるように囁いた。

その時は喜んで、お相手しますわ……と。

口角を吊り上げ、妖しい笑みを刻みながら。

もうだめだと思っていたところにいきなり示された、彼女の住まいへの招待に、貴史は目が飛び出さんばかりに大きく見開いた。

「ご予定はいかがかしら？」

すつと背筋を伸ばして、もう一度目線をあわせると同時に、笑みを再び蠱惑的な中に、媚を含んだものへとすりかえる。

貴史は再び、一足飛びに地獄から天国へと駆け上がった。

それは、このホテルで一夜を過ごすより、さらに魅惑的かつ、貴史にとっては本望な招待だ。

例えばパーティの席であっても、自宅に招かれるということは、彼女の全てを手に入れたという野望が、大きく前進したことを示しているからだ。

「もちろん、喜んで」

二つ返事でもう一度、今度は獅王子から差し出された右手の、しかし爪の先ではなく甲に、約束の証として唇を落とす。

まあ、落ち着いて考えてみれば、貴族の血を引き、付き合う相手にも困っているとも思えない彼女が、今まで会ったこともない行きずりの、身分などないに等しい自分と、いきなりベッドインはないだろう。

つつい、自分の常識にとらわれてしまったの早とちりに、大いに反省した。

それどころか、このお誘は、破格の扱いなのかもしれない。

だとすれば、思っている以上に、彼女の方に気のある可能性が高いと、貴史はますます自惚れた。

やはり自分には、女を落とす、天分の才があるのだと。

そんな余裕が出てくると、ふとした疑問が心を掠めた。

彼女が惚れてくれたとしても、自分は所詮、一回の庶民でしかないということである。

「しかし、よろしいのですか？ 部外者の私が参加しても」

心配になって尋ねると、獅王子は面白そうに返した。

「パーティといっても、特に何をするわけでもありませんのよ。定期的に開かれる立食会のようなもので、皆さん、思い思いのパートナーを連れていらっしゃいますから、気になさることはありませんわ。女性はそれなりに着飾りますけど、男性はスーツですもの」

大してかしこまった席ではないという獅王子に、貴史は大いに安心した。

パーティは初めてではないにしても、本格的な上流階級の集まりになど、参加したことはおろか、見たことすらなかったからだ。

ある意味そんな、天上人の生活が手に入る絶好のチャンスの到来を貴史は感じた。

もし、彼女との関係が遊びで終わったとしても、そのパーティで今までお目にかかることの出来なかった階級の人々と接触すれば、

新たな獲物の目星をつけられるかもしれない。

獅王子に感じていた欲望以上の野心が、貴史の中に沸きあがった。うまくいけば、それこそ本当に一生を、遊んで暮らすことが出来るのだ。

「それでは、お言葉に甘えまして」

千載一遇とは、まさにこの事だ。

貴史は飛び切りの甘い笑顔を獅王子に向けた。

「場所と連絡先は、裏に書いてありますわ。当日は……そうですね、八時頃にいらしてください」

言われるままに、手にしていた名刺サイズの、上等で厚手の紙をひっくり返すと、簡単な地図と住所、連絡先が記されていた。

それを確認してうなずき、上着の内ポケットへと、失くさない様に大事にしまいこんだ。

これはいわば、天上への切符なのだ。

「退屈なだけと思っていましたのに、週末が楽しみのなってきたわ」

バックの口を閉めながら、うれしそうに呟く獅王子に、貴史の胸も膨らむ。

今日の夜の予定は立たなかったが、それに勝る収穫を得たことを思えば、上出来を通り越している。

ほぼ二人の前にずっと立っていながら、まるで素知らぬふりのカウンターの中の若いバーテンダーに、ブレンダーを二つ注文してから、甘えるように獅王子が、貴史の胸元へと触れる。

「私ですよ」

その肩を優しく引き寄せながら、ようやく念願であった、その唇に己の唇を重ね合わせる。

濃厚ではないが、それなりに互いを味わい、名残惜しく離れたところに、タイミング良く、滑るようにグラスが差し出された。

濃い琥珀色が、照明の光をはじいて、幻想的に揺れる。

「それでは」

貴史が、多くの女性を虜にしてきた、やわらかい笑みを浮かべ、それに獅王子が、機嫌の良い猫のように目を細めた。

それぞれの前に置かれたブランデーグラスを手に、軽く掲げる。

「二人の出会いとこれからに」

互いの思惑を秘めて、触れ合わされた二つのグラスが、涼やかな音を立てた。

華やかな道化師の舞台の幕開けを、祝うように。

Scene 9

「本気だったわけ！？獅子王子さん」

等身大の姿見で服装のチェックを行い、ただでさえ複雑な気分に陥っていた鷹人は、獅子王子が思い出したように告げた言葉を、一回聞き流してしまってから仰天した。

「もちろんよ」

悪びれもせずに、むしろ胸を張っている獅子王子に、鷹人は頭を抱えたくなった。

「う……わあ、あれからなにも言ってこないから、てっきり冗談だと思ってたのに……」

せめて成人式くらいに見えないもんかなあという、今しがたまでの悩みを放り出して苦悶している彼を横目に、鼻で笑うのだから質が悪い。

「ちょっと声かけてやったら、飛び付いてきたわよ。あの男、一応外聞ははばかってるみたいだから、女遊びはやせ我慢してたんでしょうね。もう最初から、ヤル気満々だったもの」

下品だし、見た目妙齡の女性が口にする科白じゃない、と鷹人は顔をしかめるが、獅子王子はまったく意に介さない。

気心が知れている者同士、気取ったところで意味など無いからだ。しかし鷹人がいくら、親しき仲にも礼儀ありだろ、と主張していても、同居人達に右から左へと聞き流されているのが現状だ。

「……外泊した日は無かったよね」

なんだか、非行を心配する親のようなそれに、さすがの獅子王子も鼻白んでいる。

確かその話を聞いてから今日まで、遅くなって午前様になることはあっても、必ず帰ってきていた。

眠っていても、防音は完璧でも、絶対にわかるのだから不思議なものだ。

熟睡という状態は、自分達にはひよっとするとないのかもしれない。

狼もここ数日、ぱったりと夜、出かけなくなっている。

彼の場合は外出がはじめると、なにをしているのか、とり憑かれたように毎日出だして行くが、それが半月続くと、残りの半月は一切外どころか部屋からも出ようとせず、引き籠りに近い状態になる。

本来ゲスト仕様の狼の部屋は、ユニットバスにトイレ完備だし、食事すら運んでやらないと食べようとしなない。

そのパターンを、ほぼ一月単位で繰り返しているのだ。

今はちょうど、その引き籠りの時期にあたっているのだが、なにがなんでも部屋から出てこないというわけではなく、多少強制してやれば、よほど気分が乗らない以外は、今晚のようなパーティにも参加してくれる。

本音を言うと、その辺の兼ね合いは、付き合いの長い獅子にしても、つかみきれてはいないそう。

「泊まってもよかったんだけど、そこまで安売りするつもりはなかったしね」

そう言っ肩を軽くすくめる獅子は、黒の総レースの、マーマイドラインのドレスで、肩を大胆にはだけ、長袖に見えるのは実は、同じレースの超ロングの手袋のためである。

耳にはピーコックグリーンの黒蝶真珠の大きな玉を核に、燻し銀の花びらを重ねて作った花型のイヤリング、両サイドをアップした髪をとめているバレッタには、イヤリングと同じ花が、燻し銀の葉と共にいくつもあしらわれた、ちよっと見た感じがアンティークのような、シックなアクセサリを、ドレスに合わせていた。

胸元を飾っているのも、同じ黒蝶真珠の二連のネックレスだ。

「妬いてくれるのかしら、鷹人君は」

冗談なのか本気なのか、判別の付かない言い方で、ふふんと腰に手を当て、妙にえらそうに獅子王子から見下ろされるのは仕方がない。悔しいが、十センチ近くの身長差があるのだから。

これで下のフロアに行けば、彼女はさらにハイヒールのせいでセンチは背が高くなるのだろうと思うとやりきれない。

こういう時は、女に生まれたかったなあと、しみじみする。

そうすれば、今の身長でも少々背の高い女性、で済んだに違いないと、わざわざ隣の納戸からリヴィングに引っ張り出してきた、銀縁の鏡の中の自分の姿に嫌になった。

濃茶のスウェードの三つ揃えのスーツは、襟と折り返しの付いた袖口に、白のラインが入り、ジャケットの裾が、ハーフコート程度に長い。

きちんと自分の身体にフィットしてはいるが、色、素材を別にすればどう見ても、ブレザータイプの私立学校の制服のようで、よくてホテルのベルボーイにしか見えない。

自室で着替えれば、それで良いと思うのだが、こうして最終チェックを入れないと、獅王子の方が納得しないのだ。

つい今しがた叩き起こされたばかりの狼は、もっか着替え中である。

「それこそ冗談だね」

思わず半眼になって、鷹人がぴしゃりと、取り付く島もないほどに、獅王子をシャットアウトするのは、適当にごまかそうとすると、そこから言葉遊びのようになし崩しにされるからだ。

そうしておいしくいたただかれてしまったことも、一度や二度ではない。

第一その程度で妬いていたのでは、とてもじゃないが、一つ屋根の下で生活するなど不可能だ。

「最近可愛げがなくなったわね。最初の頃はちよつと触っただけで、すぐに真っ赤になってたのに」

獅王子は不満げに、いい加減うんざりしている鷹人に近寄ると、有無を言わずその顎を捕らえ、ディープキスをかます。

いきなり背伸びを強制されたので、一瞬嫌がるそぶりを見せた鷹人も、すぐにあきらめてそれに応えた。

しばらく、思う存分舌を絡めあって、唇は離れた。

すぐ落ちて、色移りするような安い口紅を使うわけではないから、その辺はよかったなど、さすがに踏んだ場数の差から、ちょっとはぼうつとしながらも、そう考えられるくらいに鷹人は冷静だった。

「すっかり慣れちゃって」

面白味がなくなったわと、勝手なことを言う獅子王子をじと目で睨みながら、鏡に目をやるが、やはり口紅は移っていないようだ。

グロスが多少付いたかもしれない。

「化粧が済んでるんだったら、妙なこと仕掛けないでよ、獅子王子さん。グロス落ちてるよ」

さすがに洋画に出てくるような、大口を開けてのキスを交わしたわけではないにしても、それに近いものはあったので、いくら良い化粧品でもさすがに剥げるものは剥げる。

「第一、キスどころかそれ以上の事まで存分に仕込んで、純情な少年をここまでもてあそんだ張本人が、いまさら何を言ってるのさ」ファーストキスまで、とはさすがに言わないが、なにからなにもで、鷹人が拒否権を行使する暇もなく、退屈しのぎと称して搔っ攫っていつてしまったのは、誰あろう獅子王子だ。

初めての朝など、泣きたいのを乗り越して、呆然としてしまったことを今でも覚えている。

時たま、青春を返してくれと叫びたくなることもあるし、何回かは実際、雄叫びも上げたが、性懲りもせず回を重ねられる内にどうでもよくなったというか、あきらめざるを得なくなった。

下世話な話、彼女は上級者で気持ちだけはめっちゃ良かったので、開き直ってしまったのだ。

今でも、獅子王子の気が向けば同衾するし、だからといって、恋愛感情を抱いたことは一度もなかった。

恋愛とはいかなくとも、情が湧いてもよさそうなくらい関係は続いているのだが、惰性のようなのは感じてもしんな気になれなれないのは、ちょっと不思議に思っていた。

だからといって、恋愛対象者になりたいわけでも、したいわけでもなかった。

「それにしても、その格好って嫌がらせ？」

相変わらず、嘘と本気の境目が見えない獅子王子の悪ふざけにいつまでも付き合っているられないので、最初に見たときから気になっていたことを指摘してみる。

木内貴史が来るらしいので、これ以上の暴挙には出ないと思うが、快楽主義者の彼女は、キスだけのつもりがそれ以上にまで発展する場合が、ままあるからだ。

相手は鷹人ばかりではなかったが、それでパーティをすっぱかしたり、遅刻したことも一度や二度ではない。

義務だ何だと口煩く鷹人や狼にいう彼女だが、そうした態度を見ると、本当はこのパーティが嫌いなのではないだろうか、勘ぐりたくなる。

「あら、わかる？」

とたんに上機嫌になる獅子王子に、わからないでかと、口の中で呟く。

なんだか、喪服みたいなコーディネートだと思っていたのだが、まさしくそのままだったようだ。

だいたい彼女はもともと、こんなシックな装いは好きではなくて、たとえ流行ではなかりうと派手な色を好むし、気性からしてもその方が似合っていた。

とすると、前回のスーツも同じ意図だったのかと、思い当たる。

披露宴にでも出席するような服装ではあったが、やけにおとなしい格好で出て行くなど首をかしげた記憶があったからだ。

「わからないほど、短い付き合いじゃないでしょ」

ため息をつく鷹人に、獅子王子は愉快でたまらない笑い声を上げた。

「だから好きよ、鷹人君」

語尾にハートマークでも付いていそうなほどじゃれつかれ、鷹人はちよっぴり嫌な予感を覚えた。

情けないというなかれ、徐々に強まっていく悪寒に、ついつい逃げ腰になるものの、もともと壁際に立て掛けた鏡の前に立っていたので、あっという間に逃げ場がなくなってしまった。

戦々恐々で目の前に迫ってきている獅王子を見上げると、確かに笑っている彼女の目が、獲物を前にした猫……と評するにはあまりにも楽しそうに、明らかに鷹人をロックオンしている。

顔を引きつらせつつ、冗談だよね、と鷹人が言うより早く。

「このまま押し倒しちやいたいくらい」

「うわぁー！ やっぱいい！！」

壁を背にしていたので、がばりと、押し倒すというよりは覆いかぶさってきた獅王子に、鷹人は悲鳴を上げた。

「よしてー！ やめてー！ ちかんー！！」

遠慮会釈なく、鷹人の服の中に入り込み、剥ぎ取ろうとする獅王子の手を、必死に防御しながら、聞いている者が脱力するような叫びを上げる彼に、獅王子がむくれる。

「失敬な言掛かりつけないでよ、痴漢じゃないわ。気持ちいいことしてあげようとしてるんじゃない」

それは、性犯罪者の言い分だというのだ。

あっという間に、ジャケットのボタンをはずし、白のシャツの裾をスラックスから引っ張り出し、ネイビーのネクタイを緩める。

普通はこれくらいの年齢差なら、男の方が力は強いのだが、それはあくまで『普通』であって、純粋に力比べとなると、この家の中でと限定すれば、鷹人は一番非力なのだ。

暴れる身体をきっちり押さえ込まれ、耳たぶを甘噛みされれば、うっかり全身から力が抜けてしまった。

ちらりと視界に入った壁掛け時計は、もう七時を回ろうとして、今からいたされてしまったのは、遅刻間違いなしである。

「めくるめく快樂の世界へ、レッツゴー！」

しかも、もうここまできてしまうと、経験上からいって逃げるに逃げられない。

「いやー！！ 食われるー！ おそわれるー！ ぎゃあああああ！！」

もう十分襲われているだろ、という突っ込みをする者は誰もいないと思われたが。

「……何をやってるんだ」

突然、獅王子の背後からかけられた静かな、しかし大いに呆れを含んだ声音に、大騒ぎを繰り広げていた二人の身体が、ぴたりと停止した。

「ああ、ちゃんと着られたのね、狼」

まるで何事もなかったかのように、背後から現れた麗人にくるりと向き直る獅王子に、鷹人は助かったとずるずる床にへたり込んだ。いまさら貞操がどうの場所がどうのという気はないが、こんな場合が一番困る。

狼の生活習慣もあれだが、獅王子からしても時々、妙なスイッチが突然入る。

大体ここ最近、獅王子さんご無沙汰だったみたいだから、絶対一回じゃすまないしと、着衣の乱れを直しながら思うあたりが毒されているのだが、鷹人本人は気が付いていないようだし、教える親切心を持った者も、ここにはいないのは不幸なことだ、たぶん。

しかも、そういう外部からの苦情が、当人にではなく、どういうわけか鷹人に回ってくるのもいただけない。

まあ、本人に言っても馬の耳に念仏だからだろう。

鷹人が言って、獅王子が聞き入れると思っているあたりが、すでにナンセンスだ。

スイッチは入るのも突然なら、切れる時も突然なので、狼が来た以上、もう襲われる心配のないだろうと、あちこちをひっぱり、埃を払いながら立ち上がった。

幸い、座り込んでいた時間は短かったし、乱されていたときは立っていたので、皺にはならなかったようだ。それに、落ちない汚れが付いてしまうほど、掃除をサボった記憶など当然ない。

「狼はタキシードなんだ……！」

そう口に出してから、よくよくその姿を目に入れて、絶句した。鷹人はタキシードといったが、実際は、タキシードに近い服である。

黒のベルベットの裾は、後ろに向かって丈が長くなっていて、どちらかといえばフロックコートかもしれない。それがフレアースカートのように少し末広がりになっていて、衿はボタンではなく、銀色の細いチェーンで留まっていた。

中は白のドレスシャツらしく、袖口から幾重にも重なったドレープがのぞいている。

その上にオフホワイトのベストに、スカーフのように見えるディープグリーンの蔦の柄の入ったタイをしているのだが……。

それに、まだ下ろしていないからだろうが、エナメル白靴をもうはいている。

そこにプラスして狼の美貌だ。

確かに似合う。間違いなく似合っている。それにしても……。

どこのホスト、っていうか王子？！

鷹人が胸の内とはいえ、絶叫したくなるのも無理はない。

コーディネートした本人にしたって、なんとも言い難い顔付きになって、首を傾げていた。

「……見た瞬間は、これだと思ったんだけど」

受けを狙ったわけではないし、別におかしいわけでもないのに、見ていると何とも、微妙としか言いようのない気分が湧きあがってくるのだ。

「……花嫁さんがいないね」

つつい口調も平坦になってしまう。

「たしかに、そんな気分ね……」

なんだか自分達でも良くわかっていない会話を交わす二人に、狼はいくぶん眉をしかめた。

「似合わないってことか？」

その問いに、二人は同時に、力いっぱい首を横に振る。

「狼が似合わなかったら、他に誰も着られないよ」

そう強く言ってから、獅王子はちょっと残念そうな表情になった。「今回のパーティ、白馬の王子様に憧れてるような、若い娘いないのよね」

せつかくある意味、そのままなのにと悔しがる獅王子に、鷹人はふと疑問を覚えた。

「あれ、今回は狼もパートナーなし？」

いつもパートナーは獅王子なのだが、今回は木内貴史が来るので、それはない。

鷹人も、別段恋人はいないし、この外見ではむしろいない方が当たり前なので、いちいち無理に相手を作るよりも楽だから、大抵一人だ。

「まあ、取り仕切っているのは私だけど、一応主催者は狼だから。婚約者がいるわけじゃないしね」

めったにいないわけではないが、婚約者候補として、娘や孫娘をパートナーとして連れ来る参加者もいるので、獅王子が務められないときは、あえてパートナーをあてがわないことにしているのだ。

どうも血縁以外の相手は総じて、結婚もしくは恋愛の相手と思われる風潮があるので、その方が後々、波風が立たなくて面倒がないからである。

そう獅王子が苦笑すると、狼が自然な動作で、その真横に並ぶ位置まで歩を進めた。

「遊ぶのは良いが、かまいすぎて壊すなよ、獅王子」

内緒話のように耳元で囁かれ、獅王子は軽く目を見張る。

「……わかってるわよ。あの子はあなたのお気に入りですものね」
ちらりと鷹人に流した視線に、多少なりとも嫉妬がなかったといえは嘘になった。

その何分の一でもいいから、自分に向けてくれたのなら、と思うから、ついついちょっかいを出してしまう。

——ごめんね、八つ当たりなのはわかってるけど
声に出さずに詫びるのは、鷹人がもちろん嫌いではないから。

自他共に認める快樂主義者の彼女にしてみれば、身体の相性も良
いので、この関係に実は、かなり満足している。

でも、醜い感情が根底に横たわっているのも、本当なのだ。

お詫びに、これが片付いたら、思いっきりかわいがってあげよう
かしら。

ちろりと舌なめずりしつつ、そんなことを考えるから、よけい鷹
人にしり込みされるのである。

「そろそろ、私は下に降りるわ。二人も、後三十分位したら、降り
てきてね」

鷹人が知ったら、脱兎のごとく逃げ出しそうなことを考えている
のもおくびに出さず、獅王子は今後の楽しみと胸を弾ませつつ、軽
くウィंकを送るとリヴィングを出て行った。

なんとなく獅王子の企みに察しをつけた狼が、うっすらと笑みを
はく。

それを止めようとしないうちあたり、気に入っているというわりに性
格が悪い。

鷹人は、やれやれと、ようやく一息ついた。

「良いように遊ばれてたみたいだな」

軽く腕を組んで、面白そうに言う狼に、鷹人は盛大に嫌な顔して
見せた。

「変なところでスイッチ入るんだもん、獅王子さん。今晚は木内貴史
としっぽりのくせにさあ」

ぶつぶつと愚痴る鷹人に、狼の片眉が跳ね上がった。

「なんだ、引っ掛けてきたのか？」

その反応に鷹人も、あれ？と頭を傾ける。

「獅王子さんから聞いてなかった？」

やっぱり止めた方が良かったのだろうか、顔を曇らす鷹人に、
狼は一瞬、思案気になったが、いや、と首を振って否定した。

「別段かまわないさ。それなのに、泊まってはこなかったんだな」
たとえ獅王子が味見をしたところで、あの男が『餌』であることに変わりはないし、『狩り』に支障が出るわけでもない。

狼は元々、獅王子のしていることに関心を示さなかったし、気が付かなかったのは、そういうときの常である外泊をしていなかったからだ。

「軽い女に見られないようにしたんだってさ」
今さらだと思っただけだね、と笑う。

その気になって聞いて回れば、隠し立てをするつもりがないので、それこそ後から後から男性遍歴なんて、湯水のように湧いてくるはずだ。

それに狼も、わずかに肩をすくめた。

「どっちにしても、並の男が相手じゃ、ブランクのある獅王子が満足できるとは思えないな。誘いがかかるぞ、鷹人」

狼の言葉に、ええ〜と大仰に声を上げて見せながら、時期的には鬱になる頃なのに、機嫌も悪くないし、やけにしゃべるなど、ふと思った。

この時期にパーティがあつたりすると、もともと社交的ではないので、鬱に拍車がかかって、手がつけられないというか、いつそのこと獅王子のように暴れてくれと言いたくなる状態になるのだ。

パーティ自体が嫌いなので、けして機嫌がいいとはいえないが、あの最低の状態に比べれば、天地ほどの開きがあるだろう。

その要因に思い当たるところはないのだが、二人の頭の中身など、自分の考えの及びのつかないところにあるのは、身に染みてわかっていたし、それ以上は藪を突付いて蛇を出すことになりかねないので、自粛することにした。

「まあ、どっちにしても今晚のお相手は、木内貴史さんがしてくれるし、その後は二、三日、間が空くだろうから別にかまわないよ」
しよせんは遊びだけど、やっぱり別な男の直後というのは、ちょっと遠慮したい。

肩をすくめる鷹人に、狼は怪訝な顔をした。

「そんなに堪え性のある奴じゃないだろう」

そんなエチケツトに氣を使うようなら、そもそも鷹人に手をつけたりしないはずだ。

今度は鷹人が、眉をひそめた。

「明日が満月だよ？ 『狩り』に行くんでしょう？」

そう言われて、またしばし思案し、ああそうかと、やっと納得する。

確かに身の内から、ゆったりと湧き出して全身に染み渡っていく、馴染みの感覚があった。

「もうそんなになるか」

しみじみとそう呟いてから、ロールカーテンの下りている窓に視線を移す。

狼の部屋だけは、窓に電動式でシャッターが下りるようになっていたので、この所ずっと闇の中で、怠惰に過ごしていたのだ。

その間、月は勤勉にも、その身を太らせていたというわけだ。

鷹人はそんな呆けた返答に脱力しながら、視線を窓へとやって動かない狼をしげしげと見やる。

「……『狩り』、行くんでしょう？」

普段から人間味の薄い狼ではあるが、そうして着飾って黙って立っている、ますます彫像めいて、鷹人はなんとなく不安になって、思わず尋ねていた。

こうして三人で一緒に暮らしていても、どうしてだろうか、時々狼はひどく孤独に見えた。

感情の起伏がないようにさえ思える、喜怒哀楽の極端に薄い彼は、月の半分をほぼ接触を断ってしまい、残りの半分にしても、気分さえ乗ればそこそ会話もするが、距離を置いて、鷹人と獅子王子の掛け合いを静観していることが多かった。

そんな狼の人馴れしない孤高さを、獅子王子は愛したし、鷹人も嫌いではなかったが、何かの感慨に耽っているのか否か、時としてひ

たと虚ろな瞳で空を見つめる狼の姿を見るに付け、そう遠くない未来に取り返しが付かなくなってしまう気が強くしていたたまれなくなるのだ。

鷹人にとって、狼と獅子は、かけがえのない家族なのである。だからこそ、驕りなのかもしれないが、狼に常にまわり付いている、生きていくことに対する倦怠感のような孤独と無気力さを、無性に振り払ってやりたくなるのだ。

たとえば、『狩り』というあまり歓迎できないものであっても、彼が少しでも生気を取り戻してくれるなら、それで良いと思う。それでも、無性に不安になるときがあるのだ。

二人は鷹人に比べれば、普段の行動はともかくとして、精神面においてはるかに老成していて、心の内には滅多に踏み込まず、感情を上手に隠す。

いつまでも一緒に居たいなんていう、子供じみた感傷に浸っているのは自分だけで、不意に置き去りにされてしまうのではないか。そんな恐怖に、いつも自分は、心のどこかで苛まれている。

獅子王子の誘いを断りきれないのは、そうして求められている限りは、共に居てくれるという安心感と、心が無理ならせめて身体だけでもという 卑屈さからだ。

「もちろん、『狩り』には行くさ」

狼の静かな肯定に、鷹人は小さく安堵の息をついた。

まだ大丈夫。彼はまだ、ここにいてくれる。

「ただ、もうそんなに時間が過ぎていたとは思わなかったただけだ」
今度は狼がついたため息に、鷹人は苦笑いした。

「そんなんで大丈夫なわけ？ 今晚は獅子王子さん、フォローしてくれないよ？」

『生きる』という生物なら当たり前の状態に執着の見られない狼は、天然ボケとしか思えないような生活ぶりを常日頃から披露しているため、鷹人と獅子王子の二人の渾身のサポートがなければ、日常生活すらともに送れない。

パーティは本来、そうした場を好む獅王子が担当していたが、木内貴史を引っ掛けているともなれば、まかり間違っても他の男のお守りなどできないだろう。

鷹人は経験はあっても、あまり数をこなしていないので、そういう意味でなら、むしろ狼のほうが場慣れしているはずだが、普段がこうなので、やはり心配は付きまとう。

「……そんなに心配なら、お前がパートナーになるか？」

それが顔に出ていたのだろう、わずかに首を傾けるようなしぐさをした狼は、すいと身を屈めて、鷹人に顔を近づけて、そんなことを言った。

こんなところも決まってるよな、とつい見とれていて、そのまま聞き流して頷きそうになった鷹人は、ようやく脳に到達した内容に固まる。

自分の考えを読まれて、気を悪くしたと思った鷹人の額に、冷や汗が浮かんだ。

やっと獅王子の魔手を逃れたばかりなのに、今度は狼の機嫌を損ねて遊ばれるのかと思うと、蛇に睨まれた蛙か、ガマの油のガマガエルになった気分だ。

鉄面皮といってもいい、無表情はいつものことだが、ずずいと近寄ってきた澄んだ瞳は、特に怒っている様子もなく、瞳まだ黒のままだし、それよりはなんだか楽しそう？

「俺は、お前がパートナーでもかまわないぞ」

どんどん狼の顔が近寄ってきて、ものすごいアップになってくるが、結局壁際から離れていなかったのも、また逃げ場がなくなり、思い切り寄り目になっても焦点が合わなくなった時、何かが唇に触れて、ちゅっと音がした。

狼の顔が、これまでの映像を逆回転させたように離れていく。

その途端、奇声を発して鷹人は背後の壁に、部屋中に響く激突音を立ててぶつかっていた。

うった後頭部もかなり痛い、それよりも唇を押さえて鳥肌を立

てて、見る見る顔色が青くなっていく。

唇に触れて、ちゅっとなって、唇に触れて。ちゅっとなって……！
それ以上はもう、脳内ですら、なんだかわけのわからない幾何学
模様が乱舞した。

思い出したいくないのに、延々とエンドレス状態でぐるぐる頭の中
をめぐる情景に、今にもクラッカーのように破裂しそうだ。

「き、き……」

キスされた……！！

それ以上は言葉にならなくて、一気に涙目になる。

舌まで入れられたわけじゃないし……って、そんなことされてた
ら、いくら何でもお婿にいけない……そういうことじゃなくて……！！
いかん……本気で泣きそうだ。

きつと、泣いても許される状況にあると思うのだが、なんだか涙
を見せてしまうと、さらにされてしまいそうな気がして、泣くに泣
けない。

ちよつと触れ合っただけだけど……って！ ちつとも救いになっ
てない……！！

！！
羽島鷹人、男に生まれながら、男に唇奪われる日がこようとは……

混乱してるというよりは、大パニックである。

大体、やりたい盛りなのにやれない、中学生や高校生ではないの
だ。

まったく望んでいなかった……といったら、正直な話、嘘になる
が、獅王子にあんなことやそんなことまでされて、十分間に合っ
ているのに、何が悲しくて、同性にキスされなければならないのだ。

大体狼だって、女に困っているとは思えない上、あの獅王子が全
身全霊で誘っても反応一つ見せないのは、実は盛った彼女が鷹人の
目の前で押し倒したこともあるので、立証済みである（しかもその
とぼっちりを食って、ベッドの中で憂さ晴らしに付き合わされた）。
もしかして、彼女に反応しないのは、そっちの気があるからなの

かと、顔色がさらになくなりかけたところで、さらりと狼が口にした言葉にアイデンティティーが崩壊する。

「冗談だよ」

真っ白。

危うく、日の光を浴びた吸血鬼のように、灰になりかけた鷹人に、にやりと質の悪い笑みだけを残してリヴィングを出て行く狼の後姿を見送る以外、何ができたというのか。

そして、パタンと乾いた音を立ててドアが閉まった頃に、ようやく意識が戻ってきた。

それと同時に、沸々と怒りがこみ上げてくる。

結局、またしても盛大にからかわれてしまったのだ。

ここで地団太を踏んでみても、とうに相手はおらず。

「俺の純情と唇を返せー！！」

絶叫したところで、その声を聞いたのは、残っていた鷹人本人だけだった。

Scene 10

パーティの開始予定時間である八時には、まだほんの少し早かったが、会場になる中世ヨーロッパ風の階下のリヴィングには、すでに来賓のほとんどが集まっており、特に開始の合図があるわけでもないため、自然の流れで立食式の料理が運び込まれ、飲み物が振舞われ始めていた。

リヴィングには全面、乗った瞬間に沈むのがわかる、華やかな大輪の花ばかりをモチーフにした最高級のペルシャ絨毯が、隙間無く敷き詰められ、木材が描くゆるいアーチの天井の中央にも、大きくきらびやかなクリスタルのシャンデリアが吊る下げられ、その周りを、四分の一ほどにスケールを小さくしたシャンデリアが四つ、取り囲んでいた。

そして壁は、複製画らしい有名な、かなり大きな号数の写実主義の油絵が、何枚も掛けられていた。

ここに足を踏み込んだ瞬間、タイムスリップでもしてしまったのかと、疑いたくなるような光景ばかりだ。

奥の一角には、白のグランドピアノが、カバーをかけられて鎮座し、その傍らには、ちよつとした段差の簡単ではあるが、半円形の舞台らしき装備もある。

そこでは、タキシードに身を包んだ若い男性ばかり、四人の弦楽奏者が演奏の準備を始めおり、間もなく、麗しい四重奏が室内に流れ始める。

客の人数はざっと見て、四、五十人というところで、多少の増減はあっても、毎回ほぼ変わらない。

この定例のパーティは、年に四回、季節ごとに行われているし、他にも会社がらみや、ハロウィン、クリスマス、年越しのニューイヤーパーティ、ごくまれには披露宴などが開かれているので、均せばほぼ月に一度はここで何がしか催されている計算になるだろう。

今日ここにいるのは、上流階級といって差し支えない人達ばかりなので、料理が来たからといって、そこに群がるようなまねをせず、まずは足取りも身のこなしも鮮やかな、十人のボーイが、銀のトレイで運んでくるシャンパンで口と喉を湿らせ、歓談に花を咲かせている。

それが分かっているから、今ある料理の方もすべては、カナツペのような一口で、しかも手で摘んでも食べられる前菜ばかりで、メインディッシュなどは、いかに立食式とはいえ、ここではきちんとき時間を見計らって運ばれてくるのだ。

そしてその前菜は、一通りシャンパンをいきわたらせたボーイのうちの何人かが、トレイに乗せて勧めて回るのである。

そのため歓談の場を動くことなく、舌も満足させられるというわけだ。

名目上とはいえ、主催者は狼なので、本来ならば玄関ホールでやってくる来賓を迎える役目は彼がするべきなのだが、まったく関心を払わないし、顔を覚えようもしないので、招待客を選びすぎているのは獅王子が、最初からその役を担った方が失礼にもあたらないため、にこやかに微笑む彼女に迎え入れられるのは、恒例になっていた。

その獅王子も、いったん来客が途切れたので、会場に戻り、談笑している。

もちろん彼女がいなくと、受付をするスタッフはいるので問題はない。

和やかな空気に包まれた中であって、早々にシャンパンを飲み干した鷹人は、一見オレンジジュースに見えるカクテルの入ったグラスを片手に、壁にもたれて凹んでいた。

すぐ脇の、いくつもの銀の大きな両手持ちの長方形のトレイに料理が見た目も美しく並び、アルコールはもちろんノンアルコールの飲み物もふんだんにのった、白いテーブルクロスをかけられたテーブルは、奥の左手の裏方専用のドアのスペースを三角に区切るよう

に置かれていた。

その内側をボーイはもちろんのこと、ボーイと同じ服装の女性スタッフが二名、そして調理用の白衣を身にまとったコックが今のところは一人、忙しそうに動き回っているのを、浮かない気分で横目に見やる。

一番自分に近いテーブルには、酒瓶がずらりと並び、専属の女性のバーテンダーがにこやかに注文を受けてはシェイカーを振るっていた。

もちろん鷹人が持っているカクテルも、つい今しがた作ってもらったばかりだ。

ここ一年ほど、パーティの度にはほぼ同じ位置に立っている彼女とは、すっかり顔なじみになっていて、鷹人の顔を見ただけですぐにこのカクテルを出してくれるようになっていた。

アルコールの味が苦手な鷹人は、水割りや日本酒などはまず口にせず、もっぱら女性が好むような、口当たりのいいカクテルしか飲まないか、もしくはノンアルコールなので、よく獅子王からはお子様味覚とからかわれている

だからといって酒に弱いのかといえば、むしろ逆で、かなり強い部類に入るだろう。

もっとも、ザルの獅子王や、ザルを通り越した『梓』の狼には、到底かなわないので、これはある意味、一族の体質なのかもしれない。

行儀が悪いとは知りつつ、カクテルが出来上がるのを待つ間、カナッペを何個か口の中に放り込んできたので、すでにいつもの夕食の時間をとうに過ぎて、空腹を訴えていた胃袋は多少慰められていた。

あんなことが合ったっていうのに、こうしてちゃんとお腹がすいてるんだから、意外とシヨックは小さかったのかと思う反面、どよどよと暗雲がたちこめる胸中を抑えることはできなかった。

「どうしたんだい、ずいぶんと暗いじゃないか」

このままどこまでも落ち込んでしまいそうなところに声をかけられ、うなだれていた首を上げると、そこには年のころは四十半ばの、ダンディな男性が立っていた。

「あれ？ 狗堂さん、久しぶりですね」

目を丸くして、壁から身体を放してまじまじとその百九十近い長身を見上げると、細い白のストライプの入った濃紺のスーツは少しくたびれていて、どうやら仕事先から直接やってきたらしい。

「相変わらず忙しそうですね、狗堂さんは」

そう言うのと、狗堂豊はちよつと疲れたように笑い、渋い臙脂のネクタイを少しだけ緩めた。

「まったく、このところ仕事で都合がまったくつけられなかったから、一年ぶりくらいになるな」

その右手には、水割りの入ったタンブラーが握られているが、本当ならビールを一杯と言いたかっただろう。

残念ながらここでは、宴会で定番のビールは用意されていない。

獅王子曰く、ふさわしくないのだそうだ。

「それよりどうしたんだい？ 原因はまた、あの二人かい？」

鷹人が落ち込む理由など、他に考えられないからと、中央にできている人の輪の中で、軽やかに笑っている獅王子と、そこから少し離れて、鷹人達が立っている位置とは獅王子の混じっているグループを挟んで対角線上になる壁際に、二人の熟年の婦人と、いかにも作ってますという笑顔で話を交わしている…ように見える狼へと、順繰りに視線をやる。

それを、弱々しく肯定した。

「お察しのとおりですよ。もういいように遊ばれちゃってます」
今にも魂が抜け出てしまいそうなく鷹人に、狗堂は苦笑する。

「それだけ、心を許してるってことだろう。特に雷尾君えらく君の事を気に入っているそうじゃないか」

微妙な言い回しに、鷹人は眉を跳ね上げた。

そういう誤解をされるのは、いつものことだが、愉快なことでも

ない。

「獅子さんはそんなつもりはないでしょうし、それは僕も一緒ですね。……関係を持ったことは否定しませんが、ああも男癖が悪いんじゃない、僕の方からお断りです」

辛辣といえば辛辣だが、当の獅子王からも、きちんと否定するところはしておかないと、後で何を言われるか分からないからと、注意されているので、ちょっと頭に血を上らせながらもきっちり意見すると、狗堂はまあまあと左手で制した。

「別段深い意味はないよ。ただ、同居がこんなに長く続くとは、誰も想像していなかったからね。雷尾君はともかくおうがみ壘守君が良いと言ったのも相当の驚きだったが、どうせすぐに耐え切れなくなるだろうと思ってたんだよ」

何せ見かけに反して、かなりの人見知りだからね二人とも、と笑う狗堂に、人見知りというよりは、選り好みだろうと鷹人は内心呟いた。

「そりゃ、一緒に住んでるんですから、上手くいったほうが良いに決まってますけど、ああも遊ばれるんじゃない、身体は……この際おいて、神経の方が持ちませんよ」

思わずこぼれてしまった愚痴に、狗堂は目を見張る。

「雷尾君にからかい癖があるのは知ってたが、壘守君もかい？意外だな」

それに大きく頷いたら、忘れようとしていたシーンを再度思い出してしまつて、浮上しかけていたのがまたどん底まで落ちてしまった。

これは当分、思い出すたびに落ち込むという状態を繰り返すことになるそうだと、絶望的な気分を考える。

またしても暗くなつてしまった鷹人に、理由を口にもしないところからして、よほどのことをされたのだろうと、狗堂は同情した。

獅子王が、気に入った者への構い方の度が過ぎているのは、すでに身内では伝説と化しているほどだから無理もないし、程度は分か

らないにしてもそこに狼まで加わったのでは、される方としてはたまらないに違いない。

床にしゃがみこむどころか、めり込んでしまいそうな鷹人の様子に、狗堂としてはその肩を優しくたたいてやるくらいしか、慰めようが思い浮かばなかった。

鷹人を不幸のどん底に叩き落している片割れは、そんな事はどこ吹く風というよりは、思いもしないといった様相で談笑を続けていたが、ダブルの金ボタンの黒の詰襟のような姿の、受付と警備を兼ねているスタッフが足早に近づくと、獅王子を取り囲んでいたご婦人方に非礼を詫びて、すばやく耳打ちした。

話の流れから、見るとはなしにその様子を眺めていた二人は、話の腰を折られた獅王子が不愉快な表情になり、それから知らされた内容にだろう、困った顔つきになって、スタッフに指示を与えて下がらせると、くると会場を見渡したので、何事か不都合なことが起きたらしいとわかった。

鷹人と狗堂はほぼ、獅王子の後ろにいたため、見ていたといっても実際は、横顔がちりりとうかがえるくらいで、彼女からは完全に死角になっていたのだろう、ようやく鷹人を見つけると、にこやかに中座を告げて、急ぎこちらへとやってくる。

それに条件反射のように身構えてしまって、狗堂の失笑を買った。「鷹人、悪いんだけど、私の代わりに木内貴史を出迎えて、しばらく相手をしてほしいの」

もともと彼女はそれを気にする暇もないらしく、狗堂に失礼にならない程度に軽く会釈をすると、少し離れた位置まで強引に引きずっていった、小声の上にひどく早口で用件を告げた。

「今、ちよつと面倒な人達に捕まってるから、離れられないのよ」あの楽しい様子はどうかやら、完全に社交辞令だったようで、顔をしかめて視線を流す先に、つい今しがたまで獅王子が一緒にいた女性達も、かなりあからさまにこちらをうかがっているのが分かって、鷹人はうんざりした。

これもそう、珍しいことではない。

「それはかまわないけど、どこまで喋っていい？」

初対面の相手とはいえ、本人ではない分よけいに、獅子王子の実情を把握しようと、探りを入れてくるのは間違いないだろうから、一応聞いておくにこしたことない。

あの男は、財産目当てに結婚と離婚を繰り返しているのだから、獅子王子は絶好の獲物のはずだ。

そうでなければ、こうまで簡単に誘いに応じて、ノコノコやって来るはずもない。

「オープンにされてるものなら、全部話してやってかまわないわよ。どうせ、ある程度は下調べしてくるでしょうし、食い違っても面倒だから」

おおらかに答える獅子王子に、鷹人は少し難しい表情になった。

「……間違えなけりゃ良いけど」

それに獅子王子は、肩をすくめた。

「誰でも、思い違いはあるものよ」

相も変らぬ大雑把というか、思い切りの良さに、鷹人はちょっとあきれた。

時々その大胆さに、神経がワイヤーかなんかでできてるんじゃないかと、疑いたくなる。

「了解。それから、後一人、来るって言ってた人はどうしたの？」

慌ただしく、それじゃお願いね、と去っていくとする獅子王子を、かろうじて捕まえて、ついではばかりに気にかけていたことを聞いてみる。

先ほどから注意を払っているのだが、それらしい人物が見当たらないからだ。

どうもその人物は、自分のために呼ばれたらしい節があるので、気乗りはしなくとも、挨拶くらいしなければ失礼に当たるだろう。

獅子王子はその疑問に、しまった、と小さく呟いた。

「ごめん、言ってなかったわね。彼、仕事の都合がどうしてもつか

なくて、来られなくなったのよ。……ものすごく残念がってたけど」
鷹人の方としては別段、どうしても言葉を交わしたいというわけではなかったもので、特に感慨もないし、それに対しては、そう、と答えるだけに留めた。

「それじゃ、お願いね」

触れるだけのキスを、背後の視線から身体で隠すようにして唇に残し、獅王子は軽く手を振ると、来た時と同様、大急ぎで戻っていた。

獅王子と一緒にいるお歴々は、確かに何度も見たことある顔ぶれだし、あれではそうそう無下にはできないだろう。

それに、OKと親指と人差し指で輪を作って、承諾のサインを示すと、いきおいほったらかしになった狗堂の所へと、いったん戻った。

「密談は終了かい？」

茶化す狗堂に、鷹人も笑った。

「密談なんて大げさなもんじゃないですけどね。『餌』が来るんで、その接待役を急遽任されたんです」

軽口のような鷹人の言葉に、しかし聞いた方の狗堂の顔は、見る見る強張った。

「おい、鷹人君、冗談にしても良い事と悪い事があるんだぞ」

声の調子を尖らせる彼に、鷹人は笑いを苦笑へと変えた。

まあ、普通はそう思うだろう。

「狗堂さんを担いでどうするって言います？ 本当に獅王子さんが釣ってきたんですよ。もう迎えに出ないと」

その驚きぶりを楽しんでいるのを隠しきれていない鷹人に、狗堂は、それが本当なのだと悟って、信じられないと大きく頭を振った。
「……まったく、雷尾君は……何を考えているのか、理解の範疇を超えてるよ」

つい独り言のように苦々しく言うのに、鷹人はとりすまして謝罪を述べる。

彼には気の毒だったが、確かにいい機会なのかもしれない。

「せっかく、相手をしていただいていたのに、すいません。まあ、どんな風になるか、茶番を楽しんで言ってください」

そう言い残すと、あわただしく踵を返す鷹人の、さして大きない背中をみやり、なんだかんだ言いながらも、あの二人の影響を受けているよなど、グラスをあおりながら、実感せずにはいられなかった。

「それにしても……」

空になったグラスに視線を落とした狗堂は、鷹人に見せていた友好的な態度を一変させ、どこか冷たさをにじませた口調で呟いた。

「『餌』を招待するとはね……」

どこまでも暗く、低く、不穏な響きをたたえたその声は、ざわめきと、流れる四重奏の調べの中へと、吸い込まれて消えた。

Scene 11

木内貴史の告げた行き先に、四十になるかならないかという若さの細身のタクシーの運転手は、思わず目を丸くした。

「お客さん、あそこのパーティに行かれるんですか？」

獅子王子にそれほど畏まらなくていいと言われていたので、ダークブルーのダブルのスーツと、ブルーグレーのネクタイに、カフスと揃いのサファイアのタイピンをつけている。

確かこれは、幸恵の前の女が結婚する時に、祖父の形見だといってくれたものだったが、別れた後、デザインが古臭かったので、小さくはなってしまうが、宝石だけははずして、もっと今風のデザインにカットしなおしたのだ。

靴は黒ではなく、ダークブラウンを選び、スーツがダブルなのでシルエットも少々いかつい物にした。

腕時計もわざと、海外ブランドでもアナログタイプの革ベルトにして、セレブな集まりの中で浮いてしまわないように、全体的に渋めの感じに統一してみたのである。

招待客全員の車を止められるほどの駐車スペースはないから、車では来ないようにと先に念を押されてしまったので、こうしてタクシーを自宅前まで呼んだわけだが、ビルの名を告げた途端、興奮気味にそう聞き返されて、貴史の方が面食らってしまった。

「そうだけど……知っているのかい？」

獅子王子はたいした集まりではないと言っていたし、多少胡散臭げに尋ねると、車をスタートさせた運転手は、貴史の疑問の方が心外という表情をした。

「あの辺りを走ったことのあるタクシー運転手で知らない者はいませんよ。もっとも、常連方は皆さん、運転手お抱えの、リムジンみたいな大きな車で送り迎えされるんで、タクシーなんかにとっても乗ってはいくれませんけどね」

言外に貧乏人だといわれた気がして、貴史は内心むっとしたが、住む世界が違うのは事実なので、じっと黙って聞いていた。

「といっても何人かは必ず、あなたのようにタクシーを使われる方がいらっしやるもので、話を聞く機会があるんですよ。私は、今回そのチャンスに初めて恵まれたわけですが、なんでもそれはすばらしいパーティーなんだそうですね」

ひどくうらやましそうな運転手に、貴史はなんだか不安を覚えた。今しがたは見当違いの方向に怒りを向けてしまったが、このパーティーへの参加が仕事の一環とは考えづらいし、プライベートにまで運転手お抱えの大型の高級車を乗り回せるような集団の中に混じるのかと思うと、さすがに緊張してきてしまった。

今時、よほどの家柄か金持ちでなければ、高級車は持っていない、プライベートでの運転は自分でするだろう。

「いや……私は初めて招かれたから、そこまでは……」

いくぶん引きつった笑いを浮かべながら、そうお茶を濁すと、運転手は少しがっかりしたようだが、すぐに運転席の背もたれに貼り付けてある、ソフトビニール製の小さなポケットに束になって差し込まれている名刺を示した。

「背もたれに名刺がありますんで、よろしければお帰りの際にご指名してください。私達にとっちゃ雲の上の、一生縁のない話でしゅうから、ぜひともどんな様子なのか聞かせて下さいよ」

そうまで言われれば、貴史の方も悪い気はしなくて、その中から一枚を引っ張り出す。

どうやらパソコンのプリンターで打ち出したものらしく、厚みが足りなくて頼りないそれを内ポケットへとねじ込んだ。

「覚えておくよ」

尊大に答えれば、萎えそうになっていた自尊心もよみがえってき、足を組んで後部座席にふんぞり返る。

そうだ、何を臆することがあるのか。

自分を選んだのは、あの雷尾獅王子なのだから。

うれしそうに念を押してくる運転手を、貴史は適当に相槌を打ってごまかした。

どうせ帰るのは明日になるわけだし、めくるめく夜の素晴らしさに忘れ果ててしまうか、うまくすれば、獅王子が送ってくれるかもしれない。

だんだんと戻ってくる調子に、貴史は満足した。

確かに運転手の言うとおり、出自から考えれば、その足元にも近寄れないような世界ではあるのだろう。

しかし自分はこうして、優雅に招待客のひとりとなっている。

それがやはり凡人と、選ばれし者の違いだろう。

貴史は運転手の背中を見下しながら、小さく鼻を鳴らし、新興宗教かぶれのような思考に酔いしれていた。

そうこうしている内に、件のビルが見え始め、その前に立っている数人の黒っぽいスーツに誘導灯を持った男性に、すぐ脇の路地に入るように誘導され、もうすぐ裏手の別の通りに出るという辺りで止められた。

「木内貴史様ですね」

料金を払おうとするよりも早く、窓を軽くノックされ、慌てて開けると、やはり同じ服装の三十前後と思われる男性が、慇懃に声をかけてきた。

「はい、そうです」

それを肯定すると、男性がタクシーの運転手にドアを開けるように合図する。

「うかがっております。料金もこちらがお支払いいたしますので、中へどうぞ」

開いたドアを軽く押さえるようにして立っている彼に、貴史は正直戸惑いながらタクシーから降りた。

何度となくパーティには出ているといっても、ここまで格式高く馬鹿丁寧に迎えられたことはない。

「あちらの入り口からお入りください。中の者がご案内いたします」

そう言つて、ずっと伸ばされた手で、高級マンションのエントランスを思わせる、小振りな出入り口を指し示した。

路地は入るとまるでレンガのようなタイルで舗装され、件のビル側のほうは、車道よりいくぶん狭いくらいの幅で、小さな段差の歩道が整備されていた。

歩道にはによつきりと、ロンドンのガス灯を思わせる街灯が三本ほどあったが、普段はおそらくこれほど明るくはないのだろう、地面に置くタイプの、腰ほどの高さの同じデザインの照明が、明るすぎず暗すぎず、柔らかな光を放ちながらビルの壁沿いにずらりと並べてある。

こんなことができるころをみると、この路地はひよっとすると私道なのかもしれない。

促されて歩き始めはしたものの、気になって後ろを振り返ってみると、すでに清算を終えたらしく、タクシーは走り出し、その後に残った男性は肩幅に足を開き、両腕を後ろに組んで、制服警官が立っているときにとるようなポーズでそこにいた。

どうやら見慣れた警官まがいの制服は着ていないが、送迎のスタッフを兼ねた警備員であるらしい。

タクシーの中で復活させた自尊心が、またまたしぼんでいくのを感じながら、入り口前に立つと、確かに顔立ちは違うが、みな同じような印象を与える男性スタッフによって、ガラスの扉が引き開けられた。

昨今は日本もだいぶ物騒になったし、こんなハイクラスのパーティともなれば、警備が厳しくなるのは当たり前だが……。

しかしまた日本人の習性なのか、こうまで厳重にされると、悪いことをしているわけでもないのに、ついおどおどしてしまう。

エントランスといっても何もないそこを素通りし、待つこともなく開いたエレベーターの中へと案内される。

エントランスにはやはり二人待機していたが、役割はエレベーターに載せるまでらしく、中には別の男性が控えていて、恭しく頭を

下げた。

落ち着かない気分で、妙に広々としたエレベーターの中央に立つと、すぐに上昇を始めた。

「木内様、こちらがこのエレベーターのカードキーをなっております。こちらがありませんと、エレベーターが御使用になれませんので、失くさないようにお持ちください。御使用後はお持ち帰りになっていただきますが、御使用できませんのは明日までとなっておりますので、ご了承ください。本日中にお帰りであれば、スタッフがご案内できますので、お申し付けください。明日お帰りの際は、中に使用人が控えておりますので、そちらにお車等お申し付けくださるよう、お願いいたします」

一流ホテル並みに訓練されているらしい彼は、とても警備員を兼ねているとは思えない懇切丁寧さで、貴史に説明しながら白っぽいカードキーを差し出すのを、遠慮がちに受け取り、たださえなくなりかけている現実感が、さらに加速をつけて薄れていくのを感じていた。

金がないと嘆いている今の貴史の生活とて、世間から見れば、それなりに贅沢に違いない。

それなのにこの待遇。なんだか雲の上を通り越して、宇宙にまで行ってしまったような気分だ。

指に挟んだ、一見、ただに白いプラスチックカードにすぎないそれを、ついしげしげと見やる。

やけにシンプルなのは、招待客用の使い捨てだからだろう。

さすがに電子機器用とあっては、そう凝るわけにもいかなかったのだろうが、凝れるとなればこれとて、この格式にふさわしいものに仕上げられたに違いない。

それになんだかほっとしているのは、思っている以上に自分が一般人だという証拠だ。

スタッフは身体をずらして、本来なら階数の表記されたボタンがあるはずのコントロールパネルのある位置を見せたが、そこにある

のは、上昇を示している矢印のでている液晶画面と開閉ボタン、カードキーを差し込むようになっていたスロットル、そして非常用の電話しかない。

「こちらは直通エレベーターですので、他の階に止まることはありません。カードキーさえ差し込んでいただければ、特に操作の必要はございません」

思わず貴史の視線が、もっと遠くを見るものになったのも無理はないというものだ。

こうまで度合いが違うと、どうしても虚構の世界に入り込んだ錯覚を覚える。

たしかにこれでは、物見高いタクシー運転手の噂話にも上ろうというものだ。

エレベーターをおり、その先にもぎつと見た限りでは十人近くいるであろうスタッフに迎え入れられ、最後の止めとばかりに、開きっぱなしになっていたとはいえ、意匠を凝らした扉に度肝を抜かれつつ、それでも何とか表情だけは平静を保って玄関ホールに入る。

日本家屋特有の、段差になった上がり口はなく、暗い色彩の御影石をパネル状にして敷き詰めた、完全なフラットだ。

だだっ広いそこは、外の近代的な殺風景さが嘘のように、えらく古風な、というのでは言葉が悪いが、まるで中世ヨーロッパの上流貴族の邸宅の調度品が、そのままそっくり持ち込まれたのではないかと錯覚を起こすような、アンティークな家具が思い思いの場所に配置されていた。

しかしどの家具も、じつくりと触れて観察してみればわかるが、綺麗に丁寧に扱われているのはもちろんでも、作られたのは近年らしく、今時こんな手の込んだ家具を、しかもこれほどの細々とした種類で、高級木材であるマホガニーを使用して既製品で売っているメーカーはまずないから、わざわざ特別注文をしたのだろう。

これだけでも、庶民からすれば、正気の沙汰とは思えない所業だ。扉の正面の位置に置かれている、猫足の小さなテーブルの上には、

大きな、天使の装飾も美しい白い花瓶に、色鮮やかな生花が見事にいけられて据えられ、どちらかといえば暗いトーンの中で引ききつている。

テーブルの下には、濃い青地に、白い蘭の模様が入った大振りのカーペット敷かれ、そこが暗に、玄関と室内とを分けているようだ。天井には八個の花形のシェードの付いたシャンデリアがぶら下がり、メゾネットのわりに吹き抜けにはなっていないかった。

思わずそのきらびやかさに、あんぐりと口をあけて見入りそうになっていると、スタッフの一人に、次にある控えのまで少し待っているようにと告げられた。

「ただいま、雷尾様をお呼びいたしますので、こちらで少々お待ちください」

それにしても、今時これほど接客に対する教育の行き届いたスタッフを集められるのも驚きだが、招待状も示していないというのに、よく名前や顔が分かるものだと感じする。

おそらく、それだけ参加するメンバーが長期間にわたって固定されており、なおかつ、人数もさほど多くないために違いない。

獅王子が来るということは、部外者に等しい自分が、その会場に入るには紹介者の同伴が必要なのだろう。

貴史としても、見知った人物など一人として望めそうもないパーティに、いきなり一人で放り出されてはかなわないので、おとなしくそこで待つことにした。

スタッフもそれぞれ、玄関ホール、会場へと行ってしまったので、この小部屋でようやく気を抜けて、大きく息をつく。

ここは、昔で言えば訪れた客が、コートなどを抜いて身なりを簡単に整えるために一旦待機する部屋で、従者がいる場合、主人の用が済むまで待ったための部屋でもあった。

玄関ホールより多少狭いくらいのここの現在の役割は、廊下の延長のようなものでしかないらしく、昔の名残風に、扉の両側に一腳ずつ、布張りの長椅子と、コートや帽子をかけるための、これまた

クラシックな木製のラックが、長いすの前に一つずつ置いてあったが、これでは足りるはずも無いので、両サイドの壁に目立たないようにクロークが作りつけられていた。

この部屋には、入ってきた扉のほかに三つの扉、つまり各壁に一つずつドアがあり、その全てはこの部屋の中心に向かって、つまりは内開きになっている。

正面は今までと同じ両開きだが、半分より上に、植物を啜えた鳩が四方を固め、その中心に大きなベツレヘムの星が、それぞれ削り出された白いガラスがはめられており、左右の扉は木製の一枚扉だ。広さとしては八畳くらいだろうか、たいしたもの置いてあるわけでもないで、すぐに観察に区切りをつけ、腰をおろしのもはばかられそうな、高級感溢れる長椅子に、それでもどっかりと座り込むと、しばし放心してから、行儀悪く足を投げ出してそっくり返り、うーんと、伸びをした。

貴史は初めて、ここに来たことをほんの少し後悔していた。

逆玉の輿を狙ってはいるが、これは少々、レベルが違いすぎているようだ。

こうなると今度はいろいろと、別な意味で制約がある様な気がする。

もう少し堅実なところを狙うべきだったかなと、だらしなく身体を伸ばして、ぼんやりを考えていたときだった。

正面の両開きのドアが開き、貴史は危うく椅子からずり落ちそうになってから、慌てて立ち上がると姿勢を正した。

飾りガラスがはめ込まれているので、人が立てばすぐ分かると思っ
てこんな格好でくつろいでいたのに、気を抜きすぎるあまりに、
ドアが開くまでまったく気がつかなかったのだ。

「お待たせして大変申し訳ありませんでした」

しかし、畏まるスタッフを伴って現れたのは、期待していた人物ではなかった。

「雷尾獅子の方は今、ちょっとうるさ方に捕まっていますので、

僕がお相手を言い付かってきました」

にこやかに微笑む相手は、着ているものこそ、貴史よりも上等のようだが、どう見ても高校生くらいにしか見えない少年だった。

「獅王子の遠縁に当たります、羽島鷹人といいます。どうぞよろしく」

物慣れた様子で右手を差し出してきた彼に、つい無遠慮にじろじろと見てしまっていたことに気付き、貴史は急いで愛想よく取り繕うと、その手を握った。

「失礼しました。木内貴史です。本日はお招きいただきまして、ありがとうございます」

手が放せないからといって代理に、こんな子供をよこすなんてどういうつもりだと、腹も立ったが、獅王子が指名した相手とあっては、まだ試されている可能性もあるので、ここはぐっと辛抱すべきだ。

話した印象からして、獅王子は一筋縄ではいかない女だったし、結局、分不相応の世界だったとしても、それこそ経験するだけでも悪くはないはずなので、尻尾を巻いて帰るのは信条に反する。

ここは、お手並みを拝見した方がいい。

「ほぼ身内ばかりの席ですので、少々無礼講が過ぎるかもしれませんが、あまり気にしないで楽しんでください。獅王子さんもすぐ来ると思いますから」

そう言って、広大なリヴィングの中へと誘う彼の後について、やはり緊張気味に歩を進める。

ドアの横に立っていたスタッフが、二人を見送って恭しく一礼すると、扉を閉めた。

さほど大きな音がしたわけではないし、室内には、生の弦楽四重奏の音楽が心地よく流れ、高くもなく低くもなく、人々が交わす会話によって作り出された静かなざわめきの波に包まれていて、その中に二人が入ってきたことなど、そうそう目立つ事ではないように貴史は思っていた。

ところがいきなり、ざわめきのボルテージが下がり、音楽がはっきりと耳に届くようになる、大半の者の視線が一気に集中した直後、何やら聞き取ることできないほどひそひそと、ここここで囁きが交わされているのに、いやがおうにも気がつき、貴史はひどく戸惑った。

元々扉の前は、出入りがあるせいか、人は少なめで、ぽっかりと空間になっていたのだがそれにしてもなんだか、ひどく遠巻きにされている感じがする。

視線が向けられていることからして、話題は明らかに自分であるらしい。

その貴史の横で、鷹人は密やかにほくそえんでいた。

「どうやら彼が『餌』だと、きちんと広まっているようだ。」

「どうかしましたか」

わけも分からず混乱して立ち止まってしまった貴史に、素知らぬ顔で声をかける。

「あ、ああ、申し訳ない。なんだか、注目されているようなので……」

注目されるのは別に初めてではないし、むしろ目立つことが好きではあるが、こんな、観察するような妙な視線にさらされたことはない、知らず浮かんでいた額の汗を、胸ポケットのハンカチを取り出してぬぐった。

敵視されているような、軽視されているような、それでいながら、恐れられているような、様々な感情が複雑に入り組んでいて、なぜそれを見知らぬ人々から向けられなければならないのかが、理解できなかった。

「ああ！」

できる限り不自然にならないように、鷹人は、初めて気がついたというような表情をしてみせた。

「気にすることありませんよ、いつものことです。あなたが今夜の獅子王子さんのパートナーだと紹介されているせいですよ」

苦笑しながらそう告げられて、貴史は目を瞬かせた。

「それだけで……これですか」

さすがには不仕付けだと思ったのか、談笑は戻りつつあるが、やはりちらちらと様子をうかがわれていて、居心地が良くないのは変わらない。

鷹人は軽く肩をすくめた。

「獅王子さんは、美人で若くて……まだ独身ですからね、仕方ありませんよ」

どこか遠まわしな返答に、それでも貴史は納得した。

財産とその美貌を目当てに、言い寄ってきているのではないかと、警戒されているわけだ。

その通りなので、否定もできないが。

「なるほど、彼女が大層な家柄のお嬢様なのは、有名な話ですしね。私は不逞の輩ということで、警戒されているわけだ」

理由が分ければなんて事はない、よくある話なので、少し皮肉ってやれば、鷹人の苦笑が深くなる。

「そんなところです。僕と一緒にの間は、ひよっとすると多少勘繰られるかもしれませんが、注意してくださいね。獅王子さんが傍にいるようになったら、さすがに聞けませんから。そんな度胸のある人もいないでしょうし」

最後のところで、鷹人の笑いに冷たいものが混じるのを見て、貴史は目の前の人物が、見た目ほどかわいらしいわけではないらしいのに、少しひやりとした。

「このビルのオーナーが彼女だからかい？」

当然のようになされた問いかけに、鷹人は一瞬きよとした後、しばらく考え込んでから、急に年相応の顔になって、くすくす笑い出した。

何がおかしいのかと怪訝な表情になった貴史に、鷹人は手を振った。

「違いますよ。ここのオーナーは獅王子さんじゃありません。厳密

に言う、このパーティも、名目上の主催者は獅子王子さんじゃないんです。まあ、実際取り仕切ってるのは、獅子王子さんですけどね」
そういうと、もう少し奥へ行くように、貴史を誘導する。

すると、自然と、露骨にならない程度に、しかし確実に皆が二人を避けるので、なんともいえない気分になった。

中央からいくぶん奥によった、こちらからすると右の壁際の、ずいぶん大きな風景画を背に、五人ほどの中年の男女に囲まれて立っている長身の若い男性を、鷹人はこっそりと指し示した。

「あそこに立ってる中の一番若い男の人が、このビルのオーナーであり、入っている会社の会長、そしてこのパーティの主催者で、僕達の家主であるおうがゐき壱守狼です」

いや、示される必要はなかった。

その方向を向いた途端に、貴史の視線はその人物に釘付けになってしまったからだ。

すらりと線の細い長身は、ドレスではなく、スリムなシルエットのタキシードに包まれている。

しかしインナーは、派手にフリルのついたドレスシャツなので、女性にしては背が高すぎるかと思わないでもないが、体のラインから女性か男性かは判断がつかなかった。

絶妙なバランスの卵形の顔を、柔らかな色合いのセミロングの髪が縁取り。

しかし何よりも、貴史の目をひきつけて放さないのは、まさしく花の顔かんばせというにふさわしい、類まれなる美貌であった。

「……壱守、狼さんとおっしゃるんですか……あの、失礼ですが、本当に男の方ですか？」

正直、見た目だけなら獅子王子より美しいあの顔で、こう聞くのはかなり抵抗があったので、かなり口幅ったくなる。

確かに男性だとは言われたが、切実に否定して欲しい。

「まあ、初めて見た人は大抵そう言いますね。狼は間違いなく、男ですよ」

それなのに、鷹人は慣れているのか、あっさりと肯定してしまつて、覚悟はしていたはずなのに、ものすごいショックを受けた。

こんな、美しいとしか表現できないような男性が、想像の世界ではなく存在するなど、とても衝撃を受けずにいられまい。

獅王子といい、この一族には、美形の遺伝子が組み込まれているのかと思ってしまう。

そういえば、この鷹人と言う少年も、見た目の幼さにごまかされていたが、よくよく見ればきれいな顔立ちをしている。

もう少し成長すれば、自分と同じくらい、いや、それ以上の美男子になることだろう。

「……なんだか、御伽噺の王子様みたいな人ですね」

それでも、あの塙守という青年はまた別格で、ホストというのもなんだか違う気がして、思わずそう呟いてしまってから、内心首を傾げた。

なぜそんな印象を狼に対して抱き、口に出しているのか、自分でも良く理解できなかったからだ。

隣にいる鷹人が女性だというならまだしも、素の自分はそんなことを男に対しても言えるほど、ロマンティストのつもりは無いが。

そう考えていて気がついた。

狼という人物に、現実味がないことを。

どこか怠惰で、物憂げな感じはするが、獅王子のような鮮明さが無く、イメージとして捕らえようとするとどこかぼやけているようで、外見の美しさだけが際立って存在感が薄いのだ。

だから、己の存在を、生存競争のために強烈にアピールするホストではなく、御伽噺の王子になってしまう。

獅王子を落とそうとしている自分からすれば、とんでもないライバルのはずなのに、なぜか嫉妬する気も起きなかったのは、そのせいであったのだ。

「あの服は、獅王子さんが見立てて、そういうコンセプトらしいですから、見方は間違ってますよ」

まさか貴史が、狼をそんな風に分析しているとは思ってもいない鷹人が、ずれた答えを返したが、それを構成する言葉の一つに引かなかった。

「雷尾さんが、『見立てた』？」

思わず聞き返すと、さも当然と鷹人は頷いた。

「狼や僕の服は、いつも獅王子さん見立ててくれるんですよ。この手の礼服のセンスは、僕達は信用がまったくくないんです」

それから困った様子で、大きな溜息をついた。

「僕ら三人は、この上のフロアで同居してるもんですから、選んだ服をちゃんと着て見せないと、絶対に許してくれないですよ。正直、女性じゃないんで、毎回新しい服にしてくれなくても、いいって言ってるんですけどね」

こんなデザインの服じゃ、他では着られないのでダンスの肥しになるだけですと、半ば愚痴になっている鷹人の言葉が耳に入らないほど、貴史は危機感を感じていた。

なんだか嫌な予感がするとは思っていたのだが。

「君と、壘守さんが、雷尾さんと同居している……？」

聞き捨てならないと言うか、貴史が調べた限りでは、彼女が誰かと、しかも男二人と生活している事実など、まったく引かかってこなかったのに。

「ええ、さっきも言ったでしょう。ここの家主は狼なので、実際は、僕と獅王子さんが同居させてもらってるんです」

そんな貴史の危機感を、さらに煽るような発言を鷹人は続けた。

「といっても、僕は後から加わったので、元々は狼と獅王子さんが二人で住んでたんですよ。……狼は、見ての通りの大金持ちですから、それがどういう意味なのかは、お分かりだと思いますけど」

さすがに平常心を保てなかったのが顔に出ていたのだろう、鷹人は秘密ですと言わんばかりに人差し指を立てて、唇に当てる。

「これ以上、僕は話せないのです、後は獅王子さんから直接聞いてください」

つまり、他人から聞くのはタブーだが、本人から聞く分にはかまわないと言うことなのだろう。

後は、それを尋ねる度胸があるかどうかの問題だ。

「……彼女が資産家だと言うのは、そういうことか」

貴史が呻く。

だとしたら、まんまといっぱい食わされたことになる。

貴史の狙いはあくまで、結婚の予定のない、金持ちの独身女性で、金持ちになる予定の女性ではないのだから。

ましてや、狼が相手では、外見からいっても、経済力からいっても、まったく勝ち目がないのは、あまりにも明白だ。

男遊びが激しいというような噂は耳にしていたが、それにしても婚約者がいるとは思わなかった。

「違いますよ」

完全に誤解している（そのように仕向けた傾向はあったが）貴史に、鷹人は噴出しそうになるのをこらえながら、それを否定した。
こんなにわかりやすい性格をしているのに、よく結婚詐欺師などやっつけられるものだ。

「確かにこのビルのオーナーは狼ですが、獅王子さんの実家は、世界でも指折りの大金持ちですよ。だからこそ、お目付け役としてここに住んでるわけですから」

今度こそ、不可解という表情になった貴史に、鷹人は小さく咳払いして説明を始めた。

「このビルに入っている会社が、ランゲバージコンツェルンに属しているのはご存知ですか？」

それには、貴史も頷いた。

「もちろん知っていますよ、ヨーロッパに拠点を置いているという、巨大財閥ですね」

世界経済の知識が多少なりともあれば、ランゲバージコンツェルンの名を知らない者はいまい。

ヨーロッパのみならず、世界中のありとあらゆる業界に、名を変

え品を変え、存在するといわれる、この超がつく巨大企業グループは、ドイツに名目上の本社が置かれているらしいが、その実体は大きすぎるゆえか、まるで濃い霧に包まれてもしているかのように知られてはいない。

この時代でありながら、まったくの血族者による、完全なる経営が図られているのだが、その結束は、そうした絆の固さが有名な華僑よりもなお強く、まったく他者を寄せ付けず、その存在を完璧に現実社会から隠蔽しているため、大げさではなく、まさしく神秘ベールに覆われているのだ。

「ランゲバージのトップを構成する四家の内の一つが、獅王子さんの実家ですよ」

さりげなく言われたそれに、しかし貴史は息を吞んだ。

それこそ、住んでいる世界が違うというやつだ。

ランゲバージは元々、ランゲバージという一族が創設したらしいが、すでにその血筋は絶え、その一族に仕え、かつ縁戚関係にもあった、現在の四家が引き継いだというところまでは知られているが、その氏素性は、企業実体同様、ほとんど不明である。

「だから、別の四家の一つの後継者である狼が、ここの会長役に就任するに当たって、まあ、許婚兼お目付け役に抜擢されたわけですが、なにやらその辺りは口を濁したが、それでも貴史は驚かずにはいられなかった。

ハイクラスだとは思っていたが、そこまでとは、とても想像がつかなかったのだ。

「それも、秘密というわけだね」

これは相当慎重にいかないと、気を引き締めなおし、できる限り平静を装って答えを返す。

迂闊に事を運ぶと、これは火遊びではすまなくなりそうだ。

尻込みしたい気分がある一方、興奮してくる思いもある。

そうだろう、例え遊びのつもりだったとしても、声をかけてきたのは獅王子の方なのだから。

「ええ、ですから獅王子さんから聞いてください」

そうさりと流されたところからして、どうやら婚約者である狼のことを尋ねるのも、さほど問題ではないらしい。

その程度の相手としか、見られていないのかもしれないが。

話し続けていて喉が渴いたのか鷹人は、通りかかったボーイを呼びとめ、グラスを手取る。

確実にアルコールと分かるそれを、止める間もなく喉へと流し込んだ鷹人に、いくら身内だけとはいえ、とりあえず未成年の飲酒は、大人として注意すべきだろうと、一応目付きを厳しくした。

本来はそういうことには一切かまわないし、自分も未成年の頃からアルコール類は良く口にしていたから、いつもは気にはしないのだが、やはり分別があるところ見せておいた方が、鷹人からの印象は悪くなっても、周囲や獅王子からの評価はアップするというのが、のだ。

妙に毛負っている貴史の様子に気がついた鷹人が、心の中で盛大に苦笑いをもらす。

これも、こういう席で初対面の相手にはいつものことだ。

どうせ彼も、自分のことを高校生だとも思っているのだろう。

ましてや、少しでもいい恰好をしようとしているこういう手合いだと、必ず、偉ぶって注意しようとしてくる。

説明が面倒な時などは、素直に聞き流すか、初めから外見にあった年齢を装ってごまかすが、この男に説教されるのは御免なので、先手を打っておくことにした。

「これにも誤解があるようなので、あらかじめ断っておきますけど、僕は成人しますから」

グラスを軽く上げながら、そう告げると、貴史は、狼が獅王子の婚約者だと教えた時よりもよほど驚愕したようだ。

これも、往々にして同じリアクションではあるので慣れてはいるが、虚しいというか、けっこう傷付く。

『餌』だと知っていると、余計だ。

この男について、そう詳しい説明は受けていないし、狼も獅王もする気はないだろうから、鷹人が持っているデータは、ワイドシヨールなどで放送されたものに毛が生えたくらいと、こうして直に会ってみての第一印象のみだが、それでもろくでもない人間であるらしいのはすぐに判別できた。

それ以前に、本当に分別のあるなら、付き合っていた女性がなくなっただけで、四十九日も迎えていないというのに、獅王子の誘いに乗ったりはしないだろう。

「そ、そういえば君も、雷尾さんとは遠縁だと言っていたね」
引きつりながら話題を変えてきた貴史に、それでも、童顔ゆえに可愛らしいと称される、愛想笑いを向けた。

こうした外面の厚さも、獅王子たちと付き合う上で積み重ねられた経験から得たのだから、なんとも複雑だ。

「……それで、君も、塙守さんのお目付役なのかい？」

ずいぶんと下手な質問だが、他に聞きようもなかったのだろう。獅王子との親密な付き合いを望んでいる貴史からすれば、相当気になるに違いない。

年齢こそはつきり言っていないが、立派に成人男性なのだと教えてたのだから。

鷹人はそれに、わざと素知らぬ顔で囁いた。

「僕は、そんな大層な役柄は持ってませんよ。文字通り、『遠い親戚』ですから。……家族がみな、死んでしまった頃はまだ未成年だったので、狼が同居を申し出てくれて、獅王子さんが了承して、それに僕がうなずいただけです」

それを聞いて、貴史は失敗したと内心大きく舌打ちした。

どうも浮世離れた集まりなので、世の常識というのを、失念してしまっていた。

会話を交わしていても、なにやらこの場に似つかわしくないとはいえ、庶民的な感じがすると思った時点で、配慮すべきだったのだ。男だということと、最初は未成年だと思い込んで侮っていたので、

対応が疎かになっていたようだ。

彼は、獅王子の代理として相手をしてくれているのだから、もっと慎重にならなければ。

「それは、大変不仕付けな質問をしてしまつて申し訳ない」

沈痛な顔をして非礼を詫びると、鷹人は恥ずかしそうにグラスを持っていない左手を振った。

「そんなに気にしないでください。同居のことを知ると、大抵の人が疑問に思いますから」

どうやら、さほど悪い感情をもたれていないようなので、貴史はもう少し突っ込んでみることにした。

自分としては彼がどういう過去をもつていようが、さほど興味はないが、獅王子と一つ屋根の下にいる以上、その関係がどんなものかは大いに気にかかる。

「それじゃ、塙守さんから援助を受けながら、大学に？」

いくらなんでも、もう大学を卒業しているということはないと思うが、念のためにぼかして尋ねてみた。

「いえ、それは、両親の保険金とかがけっこうあったので、一人で生活できないこともなかったんですが……この年齢で恥ずかしい話なんですけど、やっぱり急に肉親を亡くしたので、寂しかったんですよ」

さすがにうつむき加減の鷹人に、気の毒そうに相槌を打ちながら、そんなもんなのかねと、貴史は心の中で首を傾げた。

貴史の両親もすでにこの世にはいないが、あちこちに無心ばかりして借金を作り、一人息子にろくな金も残せないような最低の親だったから、死んだ時には、悲しいというより清々したという思いしかなかったからだ。

世間一般的に言えば、鷹人のように感じる方が普通なのだと知っている。

ただ、理解できないだけで。

「まあ、今にしてみれば、狼達にとっては渡りに船だったのかもしれない」

れませんけどね」

そう昔の話でもないわりに鷹人は、もう心情的には割り切っているようだが、そういうとんだか疲れた様子になった。

「今や、家事の一切は僕が一手に請け負ってますからね」

一瞬、鷹人の言葉を把握しかねて、貴史は疑問符を頭の中に飛ばしまくった。

「あの二人は……見れば分かるでしょうけど、家の事なんて、やるタイプじゃ、全然ありませんからね」

『全然』に妙に力の入った鷹人の言い分に、貴史は当たり前の疑問を口にした。

「しかし……それなら家政婦とか……お手伝いさんを雇えば、問題はないんじゃないのかい？」

というより、むしろそうするのが当然のような気がするのだが。

それに、鷹人はちよつとたそがれた。

「……そうなんですよ。僕が来る前は確かにお手伝いさんやら、家政婦さんやら、頼んでたんですけど、あの二人、なんだかんだと理由をつけては来る端からクビにしていたんで、最初の頃は同居を快く思ってたかった親戚筋からも、こんなに長く面倒を見られる人は初めてだって、感謝されてるくらいですよ……」

それは体よく、身代わりにされたのでは？

……とは、あんまりにも気の毒で言えなくて、貴史は口を閉ざしたが、鷹人の視線がなんだか遠くを見るものになってしまっているのも、無理はないだろう。

「それに、体の相性も良かったし」

突然後ろから、割り込んできた声に、グラスを口に運ぼうとしていた鷹人は、むせ返りそうになった。

「獅王子さん！」

何でも話していいとは言われたが、そこまで赤裸々に暴露しなくともと、声を張り上げた鷹人と、人がいるような気配がなかったので、思わず飛び上がりそうになった貴史が、ほぼ同時に振り向いた

背後で、妙にこやかに獅王子が立っていた。

何度見ても大層な美人だと、改めて貴史が脂下がっている一方、その笑顔に胡散臭さを感じられる程度の嗅覚のある鷹人は、内心引き気味である。

体の関係があるのは、大方予想はついていたし、これくらいで落ち込んでいては、とても彼女のお相手は務まるまい。

「悪かったわね、押し付けちゃって」

どうやら一通りの挨拶回りはすんだらしく、やっと肩の荷が下りたといわんばかりに明るい表情になっている彼女に、鷹人は少し首を傾けた。

「別にかまわないよ。けっこう楽しく話してたしね」と、同意を求めると、貴史も頷いた。

「ええ、いろいろ聞かせてもらえてよかったです」

それに、獅王子は満足してようだった。

「退屈してたんじゃないければ、良かったわ。今日は、いつにもまして年齢層が高いから」

軽く息をついて、頬に手を当てて見渡す彼女につられて視線を巡らせれば、確かに中高年以上の姿が目立つようだ。

「それじゃ、僕はお役御免でいいのかな？」

なんだかこうして会話を交わしていても、特に不審な点は見受けられないのだが、このまま一緒にいるのもまずいし、かといって離れるのもなんだか嫌な予感がするので、鷹人は一応お伺いを立ててみた。

それも墓穴を掘っているような気がしないでもなかったが。

「ええ、ありがとう」

もう一度労うと、ちょいちょいと耳を寄せるように合図した。

「……それで、今度は狼の方を見てやってくれる？ 今日、娘や孫を連れてきた人はいないから、狼がかまわないようだったら引き上げてくれて大丈夫よ」

どうせいたところで、自分から社交辞令や世間話に応じるような

タイプではないし、名義だけとはいえ、主催者が一人で壁際で飲んでいるのでは、客の方もいい気がしないだろう。

「……挨拶したいっていったら、連れて来てくれる？」

誰に、とは言葉にしなくてもすぐ分かるので、うなずくだけにとどめた。

「明日だから、どうかな」

鷹人が呟けば、獅王子は肩をすくめる。

「分からないわよ、狼の考えてることは」

こんなところにまで『餌』を招待した上、おいしくいただくなんて気になる、獅王子さんだって理解の範疇を超えてるけどね、という本音は、自分の身の安全のために、表に出すことなく葬っておいた。

貴史がしきりに気にして、さりげなく会話を盗み聞こうとしていたので、端折れる部分は全部端折ったから、聞かれたとしても意味は通じないに違いない。

「それじゃ、ゆっくり楽しんでってくださいね」

それで、改めて貴史に向き直り、にこやかに締めくくれば、相手も同じような笑みを返してきて、狐と狸の化かし合いかと、むなしくなった。

どうやら狼の方も、一通りの社交辞令は終了したらしく、一人になって無表情に立っているところへと向かう鷹人を、自然と二人で見送る形になる。

「すぐにお相手できなくて、本当に失礼しましたわ」

鷹人が狼の元へと辿り着いたのを確認して、獅王子が艶やかに微笑んで右手を差し出すのを、貴史も恭しく受け止めた。

「美しい方を待つのもまた、楽しいものですよ」

ひざまずくことはしなかったが、深く腰を折って、その甲に軽く口付ける。

「あら、相変わらず、お上手なのね」

今夜の彼女は、前回のスーツよりも一層ボディラインが強調され

た、露出の高い、シックなデザインのマーメイドのワンピースを着ているのが、男心を刺激するのだ。

このパーティそのものが、自分が踏み込んだことの無い、踏み込めるはずも無い世界だっただけに、怖気づいてしまったが、こうして獅王子を目の前にすると、全身から発散される魅力に、どうしても手に入れたいたいという強烈な欲求が、むくむくと頭をもたげたのがわかる。

「お世辞などではありませんよ。今宵のあなたは、また一段と魅力的です」

一刻も早く、その黒のドレスの下の白い肌に指を這わせたくて、その括れた腰を抱き寄せ、きらめくプラチナブランドの髪に顔をうずめるように、耳元に囁いた。

「まだ、ダメよ。もう少しいい子にしてください。くださるかしら」

そのまま唇を求めようとするのを、軽く貴史の胸元を押さえて遮ると、獅王子はコケティッシュに首を傾げた。

「ここにいらしている方々は、そういうことにうるさい方が多いですよ」

彼女の物言いに、貴史はちょっとむっとした。

「それは、婚約者の奥守さんに、配慮して、ですか？」

つい皮肉な言い方になるのに、獅王子は嘆息すると、元よりあまり力のこもっていなかった腕の中から、するりと抜け出す。

「そうとっていただいても、かまいませんのよ」

それまでの多少碎けた喋り方から、ホテルのバーであったときのような口調に変わったことで、貴史は獅王子の機嫌を損ねたことを悟ったが、これはどうしようもない。

貴史としては、これを有耶無耶にするわけにはいかないのだ。

その返答いかんによって、獅王子を次のターゲットとするか、一夜の関係としかが決まるのだから。

「鷹人から、お聞きになったのかしら？」

つんと澄まし、冷たくなった獅王子の態度に、貴史は哀れっぽい

声で縋ってみせた。

「私の心は、初めて出会った日から、全てあなたに奪われ、捧げ尽くしてしまったというのに、彼から、あなたに婚約者がおられると聞かされた時の絶望を、わずかなりと哀れに思うのでしたら、察してはくさいませんか？」

目線を下げて、うな垂れるようにうつむく彼に、獅王子はわざとらしく、頬に手を当てる。

今時、こんな三文小説にもならないような、芝居を演じることになろうとは。

それでも、まったく面白くないわけではなかったので、もう少し付き合ってみることにした。

「狼のことは、関係ありません。……それより、あなたの目に彼は、どういう様に映りますの？」

キッパリと言い切ってから、獅王子は周囲をちらりとうかがってから、こっそりと耳打ちした。

「それは、どういう意味ですか？」

質問の趣旨が分からず、同じように声を潜めて聞き返すと、少しじれったそうに、獅王子は口調を荒げた。

「狼は、あなたにはどういう風に見えるのかと、聞いているんです」
そんなことを聞いてどうするのかと、貴史は首を傾げたが、言われるままに狼の印象を口にした。

「男性にしては……綺麗な方ですね。まるで、精巧に作られたビスクドールのようなです」

顔の部分が陶器でできているその人形は、価値もさることながら、外見の繊細な美しさでよく知られている。

人間味の薄い彼は、その美貌と相まって、先ほどの見たように無表情になると、余計に人形めいて見えた。

その貴史の感想に、獅王子は頷くと同時に、盛大なため息もついた。

「確かに、私は狼の婚約者という位置の一番近くにはいますが、あ

くまでお目付け役であって、まだ婚約者じゃありません」

なにやら迷惑がっているような、難しい顔つきで彼女は独白した。

「……第一、彼は、あなたが言うように、生気が無くて、まるで人形のようなんです」

獅王子はそれにかんりの嫌悪感を抱いているらしく、眉を強くしかめるのを見て、ためらいがちに口をはさんだ。

「だって、彼はずいぶん……良い家柄のご子息なのでしょう？」

金持ちの、と言いつうになつて、修正する。

おそらくは生まれた時から、金銭の心配など一切なく、それこそ何でも与えられて育ってきたのだらうから、やる気というか、ハングリー精神がそれほど養われないのは、ある意味当たり前だ。

しかしそれは、彼女にとって大いに不満であつたらしい。

「私は別段、彼の実家と婚姻関係を結ぶつもりはありませんもの」
余計につんけんしてきた獅王子に、それもそうかと思う。

彼女自身、狼に並ぶ良家の子女なのだ。

地位も名誉も財産も、すでに持っているのだから、別段必要はないのだ。

「確かに私の家は名家かもしれませんが、トップモデルとしての今の地位は、自分の力で築き上げたものですわ」

獅王子の瞳は厳しく、力強い、見るものを引き付けずにはおかない輝きを、誇らしげに放って、貴史を見つめた。

「私、与えられた物に満足してしまって、甘んじるような男は好みではありませんの。何もかも貪欲に求める、野心家が好きですよ」
そう、どこか媚びるように言われて、ちらりと流し目を向けられれば、その妖艶さにどきりとしながらも納得する。

確かに彼女のこの気性では、外見ばかりがお綺麗なお坊ちゃまでは、到底満足などできないだろう。

これはとんだ大物を、釣り上げられたのかもしれない。

貴史は、内心舌なめずりをした。

「それでは私は、あなたのお眼鏡にかなったというわけですね」

先の言葉に配慮して、あまり露骨にならないように、そつと身を寄せて甘く囁けば、獅王子はもったいぶった笑いをもらした。

「あなたは、私を満足させてくださいますの？」

目もくらむような魅惑的な誘いに、貴史は酩酊しながらも勝利を確信した。

本当に夢のようだが、もうこの女は身も心も、そしてその財の全ても、近い将来、自分のものになるのだ。

「もちろんですよ。心も、そして、身体もね」

自信たっぷりに微笑み、その美しい髪を一房手にとって、その先端に軽く口付ければ、笑みの形に細められた獅王子の瞳の中に、銀色の光がよぎった。

上手くいった。

それは、どちらの思考だったのだろうか。

「楽しみにしていますわ。それまでは、この宴を楽しんでくださいね」

ようやくにこやかさを取り戻した獅王子に、貴史は快く応じた。

「喜んで、せっかくお招きいただいたのですから」

晴れやかな笑顔の下で、それぞれの思いが交錯した。

そこへ、タイミングを見計らっていたのか、鷹人が戻ってきた。

「獅王子さん、狼、引き上げるって」

パーティも貴史がやってきてから、なんだかんだですでに一時間近くが経過している。

音楽は流れているが、特にダンスをするでもなく、もっぱら挨拶や会話を交わすだけの、パーティとは名ばかりの身内の親睦会なので、貴史には八時に来るように言ったのは、それが一応開始の時刻ではあったても、実質上は特に時間指定は無く、最初の一人が大抵七時頃にやってくるので、それから済し崩しに始まるのが常なのだ。

終わりの時間も決まっていけないのだが、食事と会話に満足した客の中から、最初の帰宅者が出る頃合だ。

そして、おおよそ十時頃には、自然にお開きになり、まだ話が尽

きない者や、飲み足りない者は宿泊して、このリヴィングと廊下を挟んだ両サイドにあるゲスト用の、一流ホテル顔負けの部屋や、この奥にある娯楽室、もしくは喫煙室も兼ねた談話室へと場を移すことになる。

その声に目を向けると、社交辞令にすっかりうんざりしたらしい狼が、重い足取りで少し遅れてこちらに來るところだった。

「食事は取れた？」

獅王子は少し、心配そうに鷹人に尋ねた。

彼は、狼や獅王子とは別の意味で、よくうるさ方に捕まっているので、気にはなっていたのだ。

「今回は比較的、落ち着いて取れたよ。……みんなの興味は、『餌』に集中してたからね」

狼は食べないし、どうせ動かないのも分かっていたから、獅王子が貴史と話しこんでいる間に、ちょこちょこテーブルと狼の間を往復して、今回は十分に舌鼓を打たせてもらった。

そのわりに声をかけようって人はいなかったみたいだけど、小声で告げる。

「あの狗堂さんですら、目が離せないって感じで、睨んでたしね」
どうやら、周りの反応が予想以上に愉快だったらしい。

必死に笑いをこらえている鷹人に、獅王子は猫のように目を細めた。

それはまさしく、願ったりかなったりだ。

「……紹介してもらえるか、獅王子」

そこへようやく、狼が到着した。

獅王子とほとんど変わらない、男なのがもったいないような白い肌が、少し疲れて青ざめいているようだ。

それを目にしたとき、なぜだろうか、唐突に美和子のことを思い出して、貴史は動揺した。

最後に会ったときの美和子も、疲れを滲ませて、こんな肌の色をしていた。

「ええ、そうね」

少し素っ気無く、獅王子は答えた。

今の獅王子は、狼が好きではないという設定なのだから。

「こちら、木内貴史さん」

その口調に鷹人は一瞬怪訝そうになったが、ちらりと獅王子と視線を交わすと、すぐになんでもない表情になった。

「はじめまして、お招きいただきまして、ありがとうございます」
何とか動揺を押し隠しながら、差し出された手を握る。

人いきれの中にいるというのに、狼の手はどこと無くひんやりしていて、それがなおさら人形めいていて、不気味さを感じた。

それさえなければ、これほど観賞に適した相手もないだろう。
スレンダーな体つきは、獅王子がグラマーな分、より細く見えるし、下世話な話、もし、彼女との今夜ことがお流れになってしまったとして、彼から誘われたら、それでもかまわないと血迷ってしまいそうなくらいだ。

「招待したのは、獅王子ですから。これで失礼させていただきますが、楽しんでいてください」

それにしても、本当に獅王子が言うように、生気がないというか、覇気を感じられない。

ただ生きているだけの怠惰さが、全身から滲み出している。

彼にとってはこのパーティも、そして、婚約者になるかもしれない獅王子の隣に立っている自分の存在も、どうでもいいことらしい。述べられた言葉も、単調で、社交辞令であるのがみえみえだが、気をつかうのも億劫なようだ。

「それじゃ、獅王子。後はよろしく」

それ以上言葉を交わすつもりは無いらしく、どこか投げやりな調子でそういうと、獅王子に目配せをした。

それを正しく読み取って、獅王子が怪しい笑みを浮かべた。

「それは、もちろん」

獅王子の応えに、狼は、唇の端を歪めた。

いびつな、笑いの形に。

それきり、興味を失った風で、くるるときびすを返す。

「それじゃ、ごゆっくり」

それに続いて鷹人も、これだけはと意趣返し of 言葉を残して、その後を追った。

背後の獅王子の気配が、ちょっとだけ尖ったことに、ひやりとしたが、あの程度なら明日には忘れてしまっているだろうと、見えないのを承知でちらりと舌を出す。

やっぱり、やられっぱなしというわけにもいくまい。

「もう、あれだけでいいわけ？」

大して速くもない歩調の狼に追いつくと、ちょっと不安になって尋ねてみた。

明日に向けて、なにか仕掛けるのかと思ったのだ。

「ああ、あれでいい。後は獅王子がやってくれる」

そこには、先ほどまでの様子と、別人のように活気に満ちて機嫌のいい狼がいた。

夜型の彼にとって、これから最も活性化される時間帯だからだろう。

ましてや、明日は満月だ。

もっとも、力の満ちあふれる日。

「全ては明日だ」

その瞳が、暗い深緑に染まろうとしていた。

S c e n e 1 2 (前書き)

作中にグロテスクな表現がありますので、苦手な方はお気をつけください

Scene 12

一片、二片、鮮やかに色付いた花卉が、あえかな風に散る。

現在は木内と、表札も変わってしまったているが、いまだ近所から『立花邸』と呼ばれる、立派な屋敷の建つ敷地は、奥行きのほうが多少長い長方形で、縦三分の一ほどが庭になっており、その半分近くを伸ばした枝葉で占めているのが、一本の染井吉野であった。

この家が建てられたときに、記念として立花夫妻が植えたというその桜は、手入れがよかったせいか、それともよほどこの地と性が合ったのか、幹も太さはまだ子供でも抱きしめてしまえるくらいだが、見上げるその視界いっぱい、淡いピンクの花を咲き誇らせていた。

昨日の晩に招き入れられた、豪華絢爛たるパーティ会場となった、かのリヴィングルームとは、同じリヴィングでも比べようはないが、一般的に見れば十分に広くて感じの良い室内と、この屋敷の一番奥に位置する、広さもきつとほとんど変わらないであろうダイニングキッチンとを行きつ戻りつしながら、木内貴史は最高の気分でデイナーの準備をしていた。

掃除の間は、汚れてもかまわないようにスウェットだったが、埃っぽくなってしまった身体はさっぱりとシャワーを浴び、自宅なので、それほど気張った服はかえっておかしいというか、邪推されてしまいそうなので、ベージュのチノパンに、グレーのアルパカのセーターという軽めの格好だ。

ドイツ風をイメージしたというリヴィングは、白に近いベージュの漆喰の壁に、本当に火がたけるわけではないが、代わりに電気炉が仕込まれた煙突の必要ない暖炉がある。

木製のマントルピースの上に以前は、何枚もの家族写真が、木のフレームの写真立てに収められて並んでいたが、幸恵と結婚してからはそれが、ツーショットや結婚式、新婚旅行に行ったときのもの

へと変わり、それらも彼女の死後にはすべて処分してしまっていたので、なにもなくなつて、ちょっとばかり味気ない感じになつてしまった。

一家族が死に絶えたことを考えれば、縁起が悪いと思わないでもなかったが、貴史は別に迷信深い方ではないので、かまわなかった。それ以上にリッチで趣味のいい造りのこの家を気に入っていたので、できればそこに獅子王子との写真を飾りたいと思っていたし、彼女の反応を考えれば、それほど難しくはなさそうな気がしていた。獲物としてしか見ることのなかった女性に、これほど惚れ込んだのは初めてで、それくらい彼女は、すべてにおいて魅力的だった。

昼間であれば日当たり抜群の、庭に面したここからは、今は盛りの染井吉野が望めるし、そのままサッシを開ければ、古ぼけてはいるが、それなりに広いウッドデッキに出ることもできる。

桜の樹は毛虫がつくから、本当はこの家に住み始めた頃、伐つてしまうつもりでいたのだが、いつもは唯々諸々と従ってきた幸恵と美和子が、これにはそろって大反対したし、危惧した毛虫もつくこともなく、時期になれば大層に綺麗に花を咲かせたので、それならばと、渋々、残しておいたものだ。

両親が植え、家族で慈しんで育てた思い出の樹だからという姉妹の言い分に、表面上は優しく同意しつつ、その感傷っぷりにずいぶんと辟易していたものだが、今日という日を迎えるにいたっては、浅慮を起こさなくて良かったと感謝しきりだ。

思えば立花姉妹との出会いは、獅子王子と結ばれるためのステップだったのかもしれないと、一人悦に浸った。

そしてそれは、めくるめく幸福におぼれきった、昨夜の記憶へとつながる。

思う存分堪能し、大いに満足したベッドの中で交わしたピロートークで、庭の桜が見頃だと何気なくもらすと、ぜひとも見に行きたいと、獅子王子が唐突に言い出したのだ。

外見からしてもそんな日本趣味があるとは思えない獅子王子の言葉

に、貴史はかなり驚いたし、彼女自身も日本古来の行事はあまり好きではないとは弁明しつつも、それでも桜だけは、あの儚い美しさが好きだと呟いた。

もちろん、一族の誰かしらが主催する花見の宴は毎年あるものの、花が咲いたらお弁当を作って、などという一般的な花見とは違い、そうした名所の近隣にある高級料亭やら旅館に予約を入れて、昨日のパーティとさほどかわりばえのない面々が集まるので、結局は堅苦しい席になり、楽しむどころではないし息も詰まる。

もっとゆっくりじっくり、風情を楽しみたいと、豊満な、毛布の下は何一つまとっていない身体を摺り寄せながら、獅王子は甘えるようにささやいてみせたのだ。

その彼女の態度に、貴史はピンときて、にやりとした。

つまり桜云々は、もう一度会うための口実かと、内心脂下がった。とはいえ、お抱えのコックや使用人がいるわけでもないし、男のやめ暮らしにしては、それなりに清潔にしているつもりではあるが、とても招待できるような状況にはないからと、申し訳なさそうに謝ると、獅王子は艶やかなしぐさで、こういうもてなしもしないつもりかと、再び貴史に仕掛けてきた。

後はもう、状況に流されるまま、さらに情熱的に愛し合って、貴史がああビルを後にしたのはすでに、昼を回った頃であった。

もちろん夜に、貴史の自宅で会う約束を交わして。

これから掃除をしたり、食事の手配をしたりと、段取りを考えてみれば、目の回るような忙しさだが、家の方は、美和子の葬式のために一度ハウスクリーニングを入れたので、ざっと掃除をすればそれで十分だし、料理の方は、幸恵がいた頃から鼯肩にしている店に、すぐに携帯で連絡すると、二つ返事とまではいかなかったが、できる限り見栄えのする懷石弁当を作ってもらえる段取りが付き、それから朝食用の食材や、その他もろもろを買いそろえるために、デパートへと回った。

何せ一人なので、普段から食事は外食かケータリング、もしくは

コンビニで、冷蔵庫の中身はほぼ空だったから、夜は良くて、朝食食べるものがなかったせいだ。

本当は、家に料理人を呼んで作ってもらえば、温かいものも食べられるだろうし、そうしてもらうことも可能だったが、せっかく雰囲気がよくなくても、その場でしつぽりというわけにはいかなくなるのでやめた。

家に戻って、買い込んできた食材を冷蔵庫に放り込み、矢継ぎ早に取り掛かった掃除が終わる頃、わざわざお得意様だからと料理の配達に、店の主人がわざわざ来てくれたので、これ幸いと彼に頼んで、ちよつと一人では運びきれなかった、がっちりとした天板のかなり厚い、ダイニングテーブルの移動を手伝ってもらった。

廊下は比較的広いし、ダイニングへの扉は、その幅いっぱいの開きなので、出すのは問題ないのだが、いかせんその重量と、ダイニングに一番近いドアからでは狭くてリヴィングに入れられず、ぐるりと玄関の方まで回り込まなければ運び込めなかったせいだ。

一人でやるとなると、何でもスウェーデン製の床材だという廊下を引きずるしかないのです、そうなればいくら気を使うにしても、ぶついたりなんだりして、見るに耐えない傷が付くのは必至だったから、非常に助かった。

主人とは、幸恵と結婚して以来の付き合いだが、店もそれなりに離れた所があるので、近所の評判を知らず、気が楽だったのもある。すでに初老といっている彼は、浮かれ具合に女性の影を感じ取ってはいたようで、もとより少ない口数が、ますます少なくなっていたのは、幸恵や美和子とより親しかったせいだろう。

もっとも互いに、それを口に出して肯定するような愚行は、犯さなかったが。

蒔絵の見事な漆器類は、傷をつけないように丁寧に洗っておくと約束して、二、三日後に回収に来てもらうように頼んだ。

獅子王が今夜泊まってくのは確実だし、店の開店時間はそれほど早くないので、午前中に来るような野暮はしないだろうが、それ

でもやはり、予防策を講じておくに越したことはない。

姉妹が物心ついたころにはここで食事をしていたというテーブルは、少々傷みも目立っていたので、デパートで吟味した、落ち着いたミントグリーンのテーブルクロスと、オフホワイトのセンターラグを広げる。

探せば、テーブルクロスもどこかにしまっただろうとは思うのだが、幸恵か、もしくはその母親の嗜好は、どうにも少女趣味なので、それを使うくらいなら新しく買ってきた方が断然よかった。

それが、思っていたとおり、最近では珍しくなった、バラの模様をあしらった手織りらしい、室内いっぱいに敷き詰められた、ルーマニア製の深いグリーンの絨毯とマッチしていて、貴史は大変満足した。

元は中央に置かれていた、相当大的な、茶色の革張りのソファのセットは、天板がガラスになっていて、その中に小物を飾れるローテーブルと一緒に、葬儀のときの弔問客の待機場所として、玄関側のドアに程近い、壁際にある大時計の前に、葬儀社のスタッフ総出で移動させられてしまった後、これまた人手がないのでそのままになってしまい、都合よくぽっかりと空間が開いていて、この忙しい中、ダイニングテーブルの場所を確保するため、動かさなければならぬ重労働の手間は省けた。

庭とは反対の壁際には、やはりヨーロッパ製の重厚な作りの食器棚と同じメーカーのサイドボードが並べて置かれ、食器棚の中には、母親の趣味だったという、超有名ブランドのティーカップやコーヒーカップ、ティーポットなどが両サイドに並べられ、真ん中には、そこが作ったという陶器の人形が、シリーズで品良く飾られていた。しかし、サイドボードに、クリスタルやバカラといった高級グラスばかりを、これ見よがしに並べたのは貴史の趣味で、そのおかげで、隣の食器棚とのバランスが取れているのだから、皮肉な話である。

酒瓶は、現在の経済状況を反映して、国産の中の上くらいのラン

クのウイスキーが、中身の残り少ない、数本の高級酒のボトルと、あえてごちゃ混ぜになっていた。

一緒についている小型の、温度管理も可能なワインセラーは、貴史があまりワインを好まないこともあり、必要な時だけ買いに行つて、ストックは置かないので、現在は電源も入れられておらず、常時空っぽの状態だ。

もっとも今晚は和食で、あまり日本酒には詳しくないため、主人に料理に見合つた酒も一緒に見繕ってくれるように頼んでおいたのだが、ぬるめの爛で飲むとうまいという銘柄が、よりによって一升瓶で届いていたのには絶句してしまった。

重箱同様、風呂敷に包まれて、ドンと置かれたその大きさに、急いでいたあまり、合う酒を、としか指定しなかったのは自分のミスなので、二人ではとても飲みきれないが仕方ない。

冷でも飲めると言っていたから、口に合えば、晩酌用にするのも、たまには変わっていていいだろうと、気持ち切り替えた。

なにせ、これはこれで結構な値段なので、捨ててしまうのもあまりにもつたいない。

二つの二段重ねの横長の重箱を、テーブルの上に移して包んでいた風呂敷を解き、それぞれの席の前に、見栄えよく並べる。

キッチンには、ハマグリの潮汁が、小振りな鍋に入つて、これまたきれいな蒔絵の椀とともに、年季の入りすぎた両手持ちの盆にのせられて届けられたので、今はガスレンジの上で弱火にかけられて出番を待っていた。

日本酒も、花びらの模様をあしらつた、淡い桜色の三本の銚子には注いでおいてラップをかけ、後はレンジで温めるだけの状態にしてある。

薬缶で温めるのが本当なのだが、さすがに給仕からなから一人でするのは、手が回りきらないので、これは勘弁してもらうことにした。

食後にでも楽しめるように、ベッドの中で聞き出しておいた、獅

王子が好きだという、目の玉が飛び出そうだった高級銘柄のロゼワインも、それこそ清水の舞台どころか、東京タワーから飛び降りる気分ですに入れてきたので、これで準備は完了と、サイドボードの脇にある、大きな古い時計に目をやれば、針はまもなく八時をさそうとしている。

見るからに年代もののこの大時計は、なんでも姉妹の祖父がフランスに行った折りに、ノミの市で一目ぼれして購入したとかで、当時からすでにアンティークな代物だったらしいが、狂ったり壊れたりしていないのはたいしたものだ。

しかし、ほぼ一日おきにぜんまいを巻かなければならないし、時刻を告げる音が、図体に比例してかなりの大きく、それが三十分毎に、回数之差はあれど鳴るものだから、読経の邪魔になると止めた後は、ついついわずらわしくてほったらかしておいたのだが、獅子を迎えるにあたって急遽ネジを巻いて、時刻を合わせておいた。

昨日のパーティー会場の調度品から見ても、彼女はアンティークを好むらしいとわかっていらからだ。

夕方から、モデル業の打ち合わせが入っていて、少し遅くなるかと、示された時間は昨日と同じ八時だったが、家の中を整えなければならぬ貴史にしてみれば、時刻は遅ければ遅いほど都合が良かったので、否やなどあるはずもなく、二つ返事で承諾したおかげで、なんとか間に合ったようだ。

そうこうしている内に、時計が時を告げて盛大に鳴り始め、その音にかぶるように、リヴィングのドアの横の壁に取り付けてあるパネルが、非常にオーソドックスなチャイムの音を吐き出した。

他に訪問者がいるとも思えないので、胸を弾ませながら、幸恵とここで暮らし始めたときに取り付けた、今でも十分に防犯の機能を果たしているカメラを、門前のものへと切り替える。

一応カラーだし、門柱には球体の照明もついているのだが、すでに暗闇に包まれ、もともと住宅街はそれほど明かりがないので、画像は白黒と変わらず、門の前に黒い服装の人物が立っているとした

わからなかった。

ただ、獅王子は金髪なので、それくらい見えてもよさそうだが、まったくわからないところを見ると、黒系統の色の帽子をかぶっているのか、それとも別の招かれざる客人なのかだ。

どちらとも判断がつかなくて、ボタンを押して、こちらの声が伝わるようにする。

「どちらさまですか」

門のところにあるのは、監視カメラが別の位置にあるからと声だけのタイプで、カメラつきのインターホンは、あまりいたずらされても困るので、玄関ドアの脇にのみ設置されているのだ。

だがこのカメラ、門前を広めに捉えるアングルになっているので少し遠目で、画像も荒いから、男か女かもわからない。

「獅王子です」

すると間髪いれず、澄ました、間違いようなない獅王子の声が返ってきて、貴史の心臓の鼓動がさらに跳ね上がった。

待ち人が、ついに自分のテリトリーへとやってきたのだ。

「お待ちしてました。鍵をはずしますから、どうぞお入りください」緊張と興奮のあまり、指先が震えてしまうのを忌々しく思いながら、パネルを操作して門の鍵をはずし、カメラで獅王子が門を押して開けて敷地へと入り、再度閉めるのを確認してから、また鍵をかける。

これ以降は誰にも邪魔されずに楽しめるよう、そのまま音声をオフにしようとして、すぐに両開きのドアを開いて、一般住宅としてはかなりの広さの玄関ホールへと大慌てで迎えに出た。

このあたりはみな、比較的広い敷地を有しているが、それでも獅王子が身を置いているような最上流ではないので、たかが知れている。

門からドアの前まで普通に歩いたのなら、三十秒とかかるまい。黒のタイルの敷き詰められた玄関に、唯一あったサンダルを引っ掛け、大きくて重厚な、最近、蝶番のすべりが多少悪くなってきた

外開きの木製扉を、ぶつける可能性もあるので慎重に押し開ければ、案の定、広めのポーチギリギリに、アンティークなポーチライトの明かりを吸収するかのとき服装の獅王子が、すでに到着していた。「こんばんは、お招きに預かりまして、ありがとうございます」

優雅に一礼する彼女は、黒の薄手のハーフコートをまとい、その下には黒のシックなツーピースを着ているが、タイトのロングスカートには相変わらず、大胆なスリットが入っている。

自慢のプラチナブロンドもきれいにアップにして、その上に、ローラーと呼ばれる、平べったい円筒形の帽子に、黒いベールのついたものをかぶっていた。

アクセサリーも、白真珠の二連のネックレスに、イヤリングもホワイトゴールドに、小さめの三つの真珠が房状にぶら下がっているものを身につけ、黒のレースの手袋に、大きめな黒革のハンドバッグという徹底ぶりだ。

一見すると、ストイックな装いも、彼女がまといえはかえって妖しいまでに美しい。

「……喪服ですか？」

しばし見とれて言葉を失ってから、ようやく我に返ってそう言うのと、獅王子はにこやかに微笑んだ。

「弔問客に見えた方が、いいのかと思ったんですけど。四十九日もまだでしょう？」

どうやら近所の目を気にしたらしく、貴史は困ったような、複雑な笑顔で、獅王子を招き入れた。

確かに、まだ美和子が死んでからまだ一ヶ月と経過していないので、その方が、泊まってくとしても、遠くの縁者が来たといえは言い訳もたつ。

「それは、気をつかわせてしまって申し訳ない。散らかっています、どうぞあがってください」

すぐ脇に階段があるので、二階まで吹き抜けになっている玄関ホールに入り、獅王子は軽くうなずくと、上がり口に腰かけ、ピンヒール

ールにシャープなシルエットのショートブーツを脱ぐと、やや斜めになってつま先を立てて正座をし、右手できちんとブーツをそろえて立ち上がった。

まったく、ただ置くのですらぐらついているようなあんな靴を、はきこなす上に平気で動き回れるなんてと、いつもながら不思議に思う。

背筋をピンと伸ばし、颯爽と歩く女性の姿は、確かに美しいし、そそられはするが。

それにしても、膝をそろえて靴を直すといった、日本的な礼儀を、獅王子がごく自然体で行っているのに、なんとなく違和感があった。パーティのあったフロアの、ヨーロッパ調の内装は、彼女の趣味だと聞いていたからだ。

「さすがに靴のままとはいきませんから、スリッパを履いてください。夜になると、まだ寒いですから」

その足元に、ウサギのファーのスリッパを差し出す。

ストッキングだけの足元は、まだこの季節では冷え込むからだ。

「あら、お気遣いくださいまして。でも、私も普段は靴を脱いで生活していますのよ」

コートを脱ぎ、どうやらハットピンで留めてあったらしい帽子をとりながら、獅王子はいたずらっぽくそう言った。

「それを聞いて安心しましたよ。こちらにどうぞ」

確かに最近では外国人向けに、靴のままで暮らせるアパートなどもあるが、あまり一般向けとはいえないし、高温多湿の日本の気候を考えれば、雨が降ればどうしても濡れてしまう靴を家の中まで履いているのは、どうかとも思う。

リヴィングのドアレバーを握りながら、誘うべく手を差し出せば、少し戸惑った様子で、彼女らしくもなく逡巡していたが、思い切つて口に出した。

「その……せめて、お線香くらいあげた方がいいんじゃないかしら？」

言いづらそうなそれが、美和子のことだとわかって、貴史はしまったと思った。

訪問する家に不幸があれば、こうして喪服を着るまではしなくとも、焼香をするくらいは礼儀として考慮しておくべきだったのだ。

周囲からも、納骨は四十九日の法要にするものだと、ずいぶん忠告されたが、遺体が帰って来たときにとんだ思いをした貴史にしてみれば、本当ならば火葬が済んだらさっさと薄気味悪い骨など、文字通り墓に葬ってしまいたかった。

しかし、立花家の先祖代々の墓は、関東内とはいえ他県にあり、火葬が済んでから移動したのでは、車でも夜にならなければ着けない場所にあったので、やむなく断念し、代わりに初七日の法要をその菩提寺に頼み、そうまめには来られないからと理由づけて、納骨してしまったのだ。

もちろん、ご近所はいい顔をしなかったが、貴史にしてみれば、一週間も骨壺と同居したのだから、もう十分という気分だった。

仏壇にしても、姉妹が両親の位牌を納めるために買ったという、それなりに立派な家具調のものがあったので、一緒でかまわないだろうと、幸恵の位牌ともども放り込んで、しかもそれを普段に目に付かないよう、階段の傍にある音楽室に移してしまっている。

グランドピアノに限らずピアノは、弾かなければだめになるという知識くらいはあるが、せいぜい「猫ふんじやった」くらいしか演奏できないにもかかわらず、見栄っ張りの彼はその高級感がひどく気に入っていて、そのうちどうにかしようと思いつつ、カバーをかけた状態で売りもせずに、ずるずると放置していた。

そのせいで、普段はまったく出入りしないため、とりあえずは運んだのはいいが、結構重量があるので、台の上のにせるが面倒になって床に直接置いていたのだ。

しかも、こんなことは人に頼めないのも、戸を閉じて、よろめきながら運んでそれっきりだから、中の惨状は相当なものだろう。

とてもではないが、お焼香などしてもらえる状態ではない。

近所連中も親戚も、法事以来、すっかり足が遠のいていたし、骨ももう墓に入っているのです、それでかまわないと高をくくっていたのだ。

「いえいえ、それには及びませんよ」

そこで貴史は、冷や汗をかきながらも、不自然にならないようにやんわりと、獅子子の好意を辞退した。

「妹は、もう十分に供養して、姉や両親と同じ墓に納めましたから、お気持ちだけいただいておきます」

それに、彼女は血縁者ではないし、将来的に『木内』の姓を、もしかしたら名乗ってくれるかもしれないが、それならなおさら、後釜になる女性に焼香をしてもらうのにはさすがに、死者を悼む気持ちがないにしても抵抗があった。

幸恵も美和子も、『木内』ではなく、『立花』の墓に入っているのも匂わせておいたので、それも一応、断る理由にもなっているだろう。

「そうですか……それではお言葉に甘えて」

その辺の機微を理解したのか、それとも単なる社交辞令だったのか、あっさりと引くと、まだ手袋はしたままの手をさしだし、貴史へとゆだねた。

「では、こちらにどうぞ」

獅子子の様子にほっとしながら、その手を恭しく取り、リヴィングへと招き入れた。

自分から視線が外れたことで、獅子子はふと、目を伏せる。

すると、かすかに、胸に迫るものを感じた。

この家を、覆うように満たしている哀しみ。

死んでしまったからなおのこと、彼女達はないがしろにされてしまっているのだろう。

一度は愛した相手だというのに。

それでも、貴史ではありえないが、自分以外にその死を悼み、慰めようとしているものが、確かに存在している。

誰、いや、何なのかは、わからないが。

「たいしたものは用意できませんでしたが、桜だけは美しいですから」

獅王子の憂いを知らず、貴史はコートとバックを受け取り、皺にならないようにソファの背もたれにコートをかけ、その傍にバックを置くと、準備万端に整えた花見の席へと誘う。

比較的高い天井からは、黒く重々しい、金属製と思われる本体に、ろうそく型の電灯をつけたシャンデリアが吊り下がっていて、煌々と明かりを放っているが、そのせいで、よく磨き抜かれたガラスは、鏡のように室内を反射し、肝心の桜は、自分の影をガラスの表面に落とさないとよく見えなかった。

貴史は上座にあたる、暖炉側の椅子を引いて獅王子を座らせる。テーブルの上には、重箱の他、割り箸ではなく、赤い漆の塗箸が、陶器の箸置きの上にきちんと並べられていた。

そして、カラフルなろうそくの入った、大きな目のグラスがいくつも鎮座していた。

「今、お酒の用意ができたなら、電気を消しますね。その方が良く見えますから」

獅王子はそれに、笑い声を立てた。

「あら、意外にロマンティストですね。このろうそくは演出？」
揶揄するその言い方に、貴史はわざとらしく胸をそらせた。

「男は皆、浪漫を追い求める生き物ですよ。それでは、少しお待ちください。いい酒が手に入ったんです」

そう自慢げに背中を向けて、ダイニングに近いドアから出て行った貴史を見送り、深いため息をつく。

当初は面白がっていた茶番劇だが、飽きっぽい獅王子は、もういい加減うんざりしていた。

元からして悪い印象しかなかったし、自分では良い男だとうぬぼれているのかもしれないが、あの程度なら、はいて捨てるほどいるというのに、まったく気がつかない、頭の悪さにもうんざりだ。

そして何より……。

そこで獅王子は、頭を軽く振った。

もう、『狩り』は始まっているのだ。ここで立候補した役柄を、降りてしまうわけにはいかない。

手袋を脱ぎ、両肘をテーブルの上について、指を組んだ手の甲に、あごを乗せて外に目をやる。

満開となった花の散り始め。

染井吉野の寿命は、人間とほぼ同じ、約百年ほど。

だとしたら、せいぜい三十年という齡しか重ねていないこの樹が、これほど見事に咲いているのは、ここに住んでいる一家の命を、心ならずも吸い尽くした結果なのだろうか。

獅王子は深く息をついた。

だとしたら。

桜に、よく見知った、美しい顔が重なった。

「麗しい人は、どんな表情をしても様になりますね。それが、物憂げならなおさら」

パタンと、ドアの閉まる音がして、その方向に目をやると木製の盆に、銚子を二本とお猪口、それに椀を二つのせて、貴史が帰ってきていた。

相変わらずその齒の浮くような賛辞に、それでも獅王子は目を細める。

慣れてはいるが、言われてうれしくないわけでもない。

その表情に、貴史も満足すると、テーブルの上に盆をそっとおろし、持ってきたライターでろうそくに火をともし、インターホンの脇にある、シャンデリアのスイッチを切りにいった。

室内に柔らかな闇が満ちると同時に、ろうそくのやさしい光がほんのりとテーブルの上を照らし、それによってほぼこちら一面を占拠しているサッシは、一気に鏡から、自然の荘厳のなる美を映し出すためのスクリーンへと転身する。

それはさながら、自然という脅威の絵師が描いた、屏風絵のよう

で。

己が身を、夜空へと浮き立たせる桜の樹に、獅王子は演技ではない、感嘆をこぼした。

「本当にきれいですね」

枝を覆い尽くさんばかりの花が描き出すコントラストは、その盛りが短いだけに、よりいっそう鮮やかに感じられる。

魔性とも例えられるその妖しいまでの美しさに、目を奪われている獅王子に、貴史は苦笑した。

「私にすれば、そうして桜に心奪われてしまう、あなたのほうがロマンティストだと思えますがね」

確かに、これだけ咲き誇ればきれいだと、貴史も感じるが、ただそれだけだ。

花はしょせん花だし、それ以上の感慨はない。

それよりもむしろ、目の前にいる獅王子の方が、比較するのも馬鹿らしいほど魅力的だった。

「とりあえず、一献どうぞ。せっかくなので、日本酒にしたものですから……口に合えばいいのですが」

差し出したお猪口を、嫣然と両手で受け取った獅王子に、銚子から、人肌に程よく温まった酒を注ぐ。

穀物酒特有の、わずかに甘さを含んだ、馥郁たる香りが広がった。「確かに洋酒の方が好みだけど、日本酒も嫌いじゃないわ」

それを楽しみながら答えると、自分も手酌で注いだ貴史が、ふつと顔つきをゆるめた。

「それならばよかった」

コップなら、テーブルの上に一旦戻すのも楽だが、お猪口だと小さすぎて、こぼしてしまいそうだったので、ちよつと失礼かもしれないが、たぶんそれを貴史もわかっていて自らやっているのだろうから、ここは黙って待っていることにした。

銚子をテーブルに置くと、貴史はお猪口を掲げ、それに獅王子もならった。

「二人の出会いと、これから」

男女間の乾杯の音頭としては妥当なそれに、二人は杯を干した。わずかに甘口で、するりと心地よく喉を通り過ぎ、口当たりもまろやかな、どちらかといえは女性向けの味わいに思われた。

とはいえ、貴史にとっても十分に美味だと感じたし、おそらく普段は洋酒党の獅王子からすれば、これくらいの方がむしろ飲みやすいだろう。

「飲みやすくておいしいですね」

思ったとおり、獅王子は気に入ったようだった。

「お気に召したようで、何よりですよ。……しかし、わざわざ着替えてきたんですか？」

場が和んだところで、貴史は注意深く言葉を選んで、気になっていたことを口にした。

まさか、完全に喪服ではないといっても、この格好で、外を歩くだけならともかく、モデルの仕事の打ち合わせに行ったとは思えない。

ましてやその喪に服すべき相手は、身内でもないければ、面識も無いのだから。

「それはもちろん。打ち合わせといっても、取材もかねていたから、そのままで来るわけにはいかないもの」

もともと、この姿を見せてやったら鷹人は、そこまでやるかと盛大に呆れかえっていたが。

そんな彼女の説明に、貴史は大いに納得した。

彼女が出るファッションショーはだいたい、庶民の手には届かないような高級ブランド、しかもオートクチュールばかりだから、一般的にはさほど知名度は高くない。

それでもセレブや芸能界、マスコミ関係者などの間では、知る人ぞ知る超有名人だ。

ただでさえ恋の噂多き彼女が、仕事の絡んだ打ち合わせの後、ここに直行したのでは、パパラッチ達のいいカモである。

いまだマスコミから目を付けられている貴史からすれば、それはあまりうれしくない話だ。

「かえって、気をつかせてしまったみたいですね」
申し訳なさそうな貴史に、獅王子は首を振った。

「とんでもない。むしろわがままを言ったのは私ですもの」

それからまた、うっとりとして桜へと視線を移す。

「おかげで、こんなすばらしい桜が見られましたわ」

貴史がどうぞと進めると、おもむろに箸を取り、料理に手を付けた。

急に頼んだにしては、見目もいいし、上出来だろう。

先ほどは酌をしてもらったので、今度は獅王子が銚子を取り上げた。

酒を注いでもらいながら、もう一つ気になっていたことを、口にする。

「そういえば、何か桜に思い出も？」

ずいぶんとこだわっていたようだし、先ほども、なんだか表情を曇らせていた。

同じバラ科とはいえ、獅王子は桜というより、大輪の、情熱的な真紅のバラを好みそうなイメージだ。

「そういうわけではないんですけど……。こう見えて、私も日本人だから、感傷的になっていただけです。だってよく言うでしょう、

『桜の下には死体が埋まっている』って」

ちよっと食事時に向いた話ではありませんけどね、と苦笑する獅王子に、貴史は、頬がかすかに引きつるのを感じた。

桜の木を切りたいと思っていた、それがもう一つの理由だったからだ。

元はといえば根も葉もない、とある小説家が書いた短編が出所だと言われるそれは、迷信よりも信憑性はないと思われるのに、これだけ広がっているのを見ると、桜という花はそうしたイメージが常時、付きまとっているのだろう。

事実、名所といわれる場所は、古戦場跡が多いのだそう。

そんな風に聞かされると、なんだか桜が得体の知れないものに見えて、不気味だった。

「失礼でしたね、義妹さんが亡くなったばかりなのに」

明らかに様子のおかしくなった貴史に、おそらく美和子のことを思い出させたと考えたのだろう、獅王子は箸をおいてうつむく。

それに、貴史の方があわてた。

「いえ、気にしないでください。私も聞いたことがあったので、出典がなんだったのか、思い出そうとしていただけなんです」

意味もなく必死に取り繕うと、獅王子は首をかしげた。

学生だって知っているような、有名な短編だったからだ。

「あまり本は、読まないんですか？」

決まり悪げに、貴史は肩をすくめた。

「あいにくと、純文学の方はさっぱり。読むのはミステリーくらいですね」

さすがに上流階級ともなると、読書歴がないのはよくないようだ。今まで付き合いのあった女性達は、流行物を本当に読んでいなくても、内容だけ把握していれば、たいてい引っ掛かってくれたので世話はなかったが、想像以上に博識の彼女では、そんなごまかしは通用しないだろう。

「あら、私、ミステリーも好きですよ」

こぼれるように獅王子が笑ったのを皮切りに、話題はミステリー談義へと流れ、そこから映画や俳優といった、他愛もない方向へと発展して、大いに貴史を安堵させた。

あまり高尚だと、ついていけなくなる恐れがあったのだが、獅王子にしても、この手の話の合う者が近くにいないのか、かなり不満がたまっていたようで、思っていた以上によく話す上に、その読書量の多さには、舌をまかすにはいられなかった。

なにせ、古今東西、ありとあらゆるとっていいほどの、ストーリーをすべて把握しているのだ。

他にも、有名な恋愛小説にまで詳しいことがわかり、人は見かけによらないものだと感じる。

こんな、読書家というイメージがなかったからだ。

それから、映画や俳優にしても、やけに古い、白黒の頃が好きなのも意外だった。

その話の合間に、箸も酒もすすみ、大時計が九時を知らせる頃には、料理はあらかた胃の中に収まり、気分もほろ酔い加減となって、貴史は、まだ寒いくらいなのでわざわざワインクーラーに入れるまでもないかと、やはりキッチンに置きっぱなしにしておいたロゼを、スクリュータイプのオープナーと一緒に持ってきた。

なんといってもこれからが、大人のお楽しみ時間だ。

テーブルにボトルを置くと、そこに獅王子の姿はなく、サッシが一枚開いていて、外のウッドデッキの上に彼女は出ていた。

ひんやりとした、肌寒い空気がそこから室内に入り込み、せっかく暖炉の電子炉をつけて暖めていた空気を冷やしている。

それでも、凍えるほどではないので、酔狂だと思いつつも声はかけず、サイドボードへとワイングラスを選びにいった。

獅王子は、表面がかなり傷んでいるのでスリッパを履いたまま、完全にリヴィングに背を向けて、自分で自分を抱きしめるような格好で、桜を見上げていた。

はらはらと、微風が吹くたびに舞い散る花びらが、わびしさを誘う。

それを、一枚、一枚、数えでもしているかのように、獅王子は立ち尽くした。

「寒くはありませんか」

そこへ、ロゼのワインを注いだグラスを両手に持った貴史が、声をかけた。

しかし、どちらかといえば上はセーターのみの貴史の方が、明らかに寒そうに見える。

「いいえ、それほどでもないわ」

差し出された片方を受け取って、獅王子は静かに答えた。

グラスを傾けて、その芳醇な味と香りを楽しむ。

獅王子は、猫のように笑った。

それが本気で楽しんでいるときの、彼女の癖だと理解していた貴史は、ご満悦だった。

これで今夜も、昨夜以上に濃厚で楽しい一夜を過ごせるのは間違いない。

口に含まれたワインの美味が、散々味わった肌の、まろやかさのように思えた。

「末期の酒としては、申し分のない味ね」

獅王子の紅い口紅の鮮やかな唇が、三日月のごとき、不吉な笑みに変わる。

低く流れた声とともに、ざっと、思いがけなく強く吹いた風に、桜が大きく枝を揺らし、貴史までそれは届かせなかった。

「なんですか？」

眉をしかめて聞きなおす貴史に、獅王子は、クイ、と三分の一ほどまで注がれていたワインを、一気に飲み干すと、口紅とそろいの毒々しいまでに紅いマニキュアが塗られた指から、ワイングラスを滑るように落とす。

ウッドデッキの上で、グラスは粉々に碎け散り、いつの間にそれほど高くまで上っていたのだろうか、丸い月の光を反射して、きらきらと星がこぼれたように輝かせた。

「あぶない！　いったい何を……」

このデッキは、庭に張り出すように作られているので、一応湿気を避けるために多少の地面から離してはあるものの、さほどの高さがあるわけではないし、庭にはもともと芝生がはってあったとかで、直接降りられるように、柵は設置されていなかった。

破片を避けて、背後へと下がった貴史を一瞥し、獅王子はスリッパを無造作に脱ぎ捨てると、枯れ草ばかりの荒れている庭へ、躊躇もなく、ストッキングだけで踏み出した。

靴を履いていないせいだろうか、音を立てずに、獅子は悠々と庭を歩いていく。

嘲るような笑みを残して。

「何をしているんだ、戻ってきなさい、獅子！」

サイドボードの中でも、一番値のはるワイングラスを、どう見てもわざと落としてわられた上、不可解な行動をとる彼女に、不安と怒りにかられて、思わず貴史は叫んでいた。

あのまま桜の横を通りすぎれば、家の裏手から勝手口の方に回って、裏の道路へと出られるのだ。

靴も、そこどころか、コートもバックも置きっ放しだが、彼女の行動パターンには理解不能な部分が多いすぎて、それだけではとても安心などできなかった。

桜の樹の根元まで来て、彼女は立ち止まると、それまでとはうって変わったような、ひどく冷たい視線を向けてきた。

「気安く、呼び捨てにしないでほしいわね。虫唾が走るわ」

視線同様の凍てつく口調で、吐き捨てるように罵られ、貴史は顔色をなくした。

なぜ、これほどに彼女は豹変したのか、それが理解できなかったせいだ。

怒りは急速にしばみ、大いなる不安と困惑だけが、その胸の中に渦巻いていた。

「いきなりどうしたんですか？ 何が気に入らなかったんです？」

口調を改め、混乱する記憶の中を、必死になって思い返してみるのが、思い当たる節もなく、昨日と同様、楽しい時を送っていたはずだ。

「あんなに、楽しんでしてくれなかったじゃありませんか」

懇願とも取れる貴史の言い分を、獅子は腕を組んでさげすむ。

「楽しんでました？ そう信じてたのなら、あなた相当なお馬鹿さんね」

そして、嘲笑した。

冗談、と言うこともできず、貴史は愕然とする。

侮蔑の炎が燃え上がる獅王子の瞳に、ありありと本気が見えていたからだ。

見つめあう、というか、一方的に貴史が凝視しているそこに、低い、別の声が割りこんできた。

「当然だ。奴は、ただの『餌』だ」

桜が、慄いたようだった。

夜の闇、そのものごとく、獅王子の背後、いや、桜の幹の向こう側から、声は聞こえた。

より強く、正面から吹き付けた風が、花びらをまるで、涙であるかに散らす。

それをまともに浴びて、呆然としていた貴史はたまらず、顔を腕でかばった。

ふと、漆黒が落ちた。

風に流された雲が、満月を隠している。

かきりと枯れ草を踏みしめる音が聞こえて、突然訪れた暗さに視力を奪われながらも、声の主が桜の樹の陰から出てきたことだけを捕らえた。

貴史は必死に目を細め、闇を見透かそうとした。

真っ黒い人影。

輪郭すらが、幻のごとく滲んでいるというのに。

まるで、北天に輝く天狼星のごとく浮かぶ、ダークグリーンのきらめき。

おそらく、頭部と思える位置に、二つの星のような目が、爛々と輝いているのだけが、見える。

背中にガラスに触れた。

いつの間にかずるずると後ずさっていたのに、気がつかなかったようだ。もうこれ以上は、サッシを開けるか、ガラスを壊すかしなければ下がれない。

獅王子が鍵をはずして外に出たのは、最も暖炉に近い端で、ワイ

ングラスで両手がふさがっていた自分もそこから出てきた。

そうしている間にも、迷いもなく影は、前へと進み続けている。

一瞬で、不安が恐怖へとすり替わった。

ずいぶんと中ほどによっているこの位置の鍵は、当然はずしてないし、室内に逃げ込もうにも、もうすでに腰が抜けそうになっていた。

恐ろしいという感情だけが、貴史のすべてを支配している。

「だ、誰だ」

それを懸命に押さえ込み、腹の底から、あらん限りの力を振り絞ったのに、出てきた誰何の声は、自分の耳までも届くかどうかというほど、まるで蚊が鳴くように小さかった。

しかし、それを耳ざとく聞き取った、獅王子が失笑する。

「女を食い物してるだけあって、とんだ意気地なしね」

辛辣な言葉に、反論できるゆとりもない。

すると獅王子は、気まぐれにまた態度を一変させ、妖艶な、しかしとろけるような笑みを浮かべ、するりと樹から離れて影に近づくと、慕わしげにその首へと腕を絡め、押し付けるように身をすり寄せた。

唇と舌で、耳元に口付け、執拗に、恍惚に、耳たぶを愛撫する。

その表情は、ベッドを共にしたはずなのに、見たこともないほど艶やかで、目を見張らずにはいられない。

影はされるがまま、身動き一つしていないというのに、あまやかな喘ぎ声が、獅王子の喉をついて出ていた。

抱きしめている、ただそれだけで。

存分に見せ付けられて、貴史も遅ればせながら、ようやく気がついた。

貴史が彼女を、『獲物』という視点で捉えていたのと同じように、獅王子もまた、好意があるようなふりをしながらも、その心は冷え切っていたことに。

それでも、貴史は他の女性とは一線を画して、特別に思っていた

のに対し、この仕打ちを見る限り、彼女にとっては、そうではなかったのはあまりにも明らかだ。

残酷すぎる現実を突きつけられ、貴史の思考は、真っ白に、拒否を示した。

まわりつく獅王子にかまわず、影が笑う。

「……『闇の狩人』とでも言っておこうか」

大きすぎた衝撃に、自分でも忘れて果てていた問いかけに対して、律儀に返ってきた答えと、獅王子の侮辱に、プライドだけはむやみに高い、貴史の中で、なにかが焼き切れた。

「ふ、ふざけるな！ なにが闇の狩人だ！ 貴様は不法侵入しているんだぞ、とっとと出て行け！」

怒りに任せて、顔をゆがめてわめき散らし、血走った目で、影に抱きついている獅王子を睨みつけた。

そのすべてが手に入ると信じきっていただけに、だまされていたのが無性に腹立たしく、許せなかった。

だますのは当たり前でも、だまされるのは、我慢できるわけもない。

男を、まして自分をだまそうとするような女は、最低の、生きる価値もない存在だと、怒り狂う。

「あんたもグルだったわけだ。とんだあばずれだな」

汚い言葉を浴びせかければ、いくらか不機嫌そうに、獅王子が眉をしかめる。

たかがそれだけでも、多少、溜飲は下がったが、すかさず反撃に転じようとした彼女を、影が軽く手を上げて制止した。

勝気な女王気質の獅王子が、それだけで黙って従うのを見て、また新たな怒りが湧き起こる。

貴史に対しては、要求を突きつけるばかりで、しおらしく見せるための細工か、ほんの少し譲歩はしても、あんなふうに唯々諾々と従うことはなかったからだ。

それにしてもなぜ、獅王子の姿は見えるというのに、その人物は

両目以外、影にしか見えないのだろうか。

煮えくり返っていたはずの貴史の心中に、そんな、どうでもいいはずの疑問が、ぽっかりと浮かんだ。

それこそが、警鐘だったのかもしれない。

雲が通り過ぎ、再び、ガラス細工のような月光が降り注ぎはじめる。

その光に照らし出されて、色素の薄い髪が、冴え渡る美貌が、徐々にあらわになった。

「……！あんたは……！」

氷のような微笑を唇に浮かべる、作り物のようなその美しさには、見覚えが……いや、忘れられるはずもなかった。

「壱守狼……」

無意識にこぼれ落ちたその名前に、微笑が深まった。

「そんな名前も、持っているな」

獅子王に負けないほど、濡れたように紅く、薄い唇が、からかいを含んで、ひらめく。

黒の皮のジャンパーに、薄いグレーのタートルネックのインナー、黒のスリムジーンズと、あのパーティの時とはうって変わったワイルドな格好というだけではなく、貴史は自分の目が信じられなかった。

ただ生きていくのすら面倒だといわんばかりの無気力さはまったくなり、潜め、黒だと思っていた瞳は、畏怖すら感じさせる、あの輝きを放っているではないか。

まるで、夜の闇に潜む、肉食獣のように。

射すくめられながらの、からからに干上がった口内になんとか湿り気を取り戻して、貴史は必死に声を絞り出した。

このままではいけない。

体の中に潜む、第六巻ともいうべきものが、金切り声を上げた。

「そ、その女の正体を見抜けなかったのは、俺の落ち度だからな、警察を呼ばれる前に出て行くなら、見逃してやる。さっさと俺の前

から消えうせろ！」

崩壊しそうな矜持をなんとかぎりぎりですて直し、この家主としての威厳を保とうとはしているが、口調とは裏腹に気持ちにはもはや懇願である。

もうどうでもいいから、ここから出て行って、二度と来ないでほしい。

それほどになぜか、ただそこにいるだけの狼という存在が、脅威だった。

いったいそれがなぜなのかわからないまま、その妖しく光るダークグリーンを見るだけで、見返されるだけで、危機感を神経を焼く。

じりじりと少しずつ、摺り足で移動していく。

家の中にさえ逃げ込めれば、セキュリティもあるし、サッシも強化ガラスを使っているの、鍵をかけてしまえば、そうやすやすと入ってはこれない。

そうなれば、警察に通報されると思って、あいつらもあきらめて、立ち去るかもしれない。

それに望みをつないでいた。

一步、狼が踏み出す。

感付かれて、一気に間をつめられてしまえば、腕っ節などまったくからっきしな貴史は、恐怖でガチガチになっていることもあり、さして体格的により細身の彼が相手でも、どこまで抵抗できるかわからない。

まして、見たところは素手だが、ずいぶんと余裕がある様子からして、どこかに武器を隠し持っている可能性も高いのに、貴史が持っているものときたら、作りが華奢なワイングラスだけでなのだ。

また一步、狼が踏み出し、その口角が、にいつと持ち上がる。

その笑みの冷徹さ、酷薄さに、ぞっとした。

『闇の狩人』と名乗ったとおり、この男は、自分が恐れおののいて追い詰められていくさまを、明らかに楽しんでいるのだ。

貴史の、凍えきっていた腹の中が、かっと熱くなった。

そんな理不尽なことが許されるものか、すぐに立場を逆転させて、今度は俺が、吠え面をかかせてやる！

まだいくらか距離はあったが、この程度ならば、相手よりも先にリヴィングへと戻れるだろうと、身を翻しかけた時、その方向から、思いもかけぬ衝撃を受けて、身体が吹っ飛ばされた。

びりびりとガラスが震え、狼は立ち止まって、その衝撃波をやり過ごす。

「ちよつと往生際が悪すぎるなあ」

頭上から降ってきたそれは、ぺつたりとウッドデッキの上に尻餅をついている貴史に向かって、どこかのんきな声を発した。

開いているサッシの前をふさぐようにうずくまっているそれは、人間というには大きさが中途半端で、中学生の子供くらいだろうか。やけにもさもさとした、マントのようなもので全身を隠し、屈み込んでいるように見えた。

「自分がやったことのツケが、回りまわってきたんだから、その辺の責任は、きちんと取ってもらわないと」

すぐ脇にガラスがあるせいで、片方しか広げられないらしく、ばさりとかなりの音を立てて広げられたそれを目にして、貴史は完全に腰を抜かした。

「ひ、ひいいい」

現実が、崩壊した。

そうとしか思えなかった。

完全にひっくり返った情けない悲鳴が、ぎゅっと縮こまってしまった声帯から、なんとか搾り出された。

まだ燃えている、ガラス越しの頼りないろうそくの炎に照らされたのは、広げた片翼だけでもゆうに一メートル以上にはなる、考えられないほどに大きな鷲、もしくは鷹だった。

しかも先の曲がった、鋭いくちばしがカタカタと動くたび、信じられないことにさっきまで聞こえていた、人間の言葉が吐き出され

ていたらしいのだ。

ややオレンジ色の強い、朱色の瞳が、夜がだめなはずの鳥類には信じられないほど、強烈な光を放って浮き上がっている。

まるで、狼の瞳と同じように。

それは、あまりにも理不尽で、悪夢としか思えない光景だった。

こんな大型の猛禽類が、日本に、こんな都会にいることさえ信じられないのに、それがよもや、人間の言葉をしゃべるなんて！

「……情けない男」

驚愕と恐怖のあまり、口から泡を吹き、みっともなく這いずって、なんとかこの場から離れようとしている貴史に向かって、獅王子はいらだたしげに吐き捨てた。

突然現れた、巨大な鳥にも、彼女は平然と立っている。

それは狼も同様であることから、その存在の出現を、彼らは知っていたのだ。

つまり、この鳥がなんなのか、わかっているのだ。

「それでも、立花美和子は、心の底から愛していた」

狼の目が細められ、流れる声に寂寥感が生まれた。

風が、音を立てて桜の枝を揺らし、獅王子は頭上の枝を見上げ、

鳥は、朱色の瞳を上げさせた。

哀悼を示すように。

「その立花美和子の願いだ」

朗々と、宣告が響く。

貴史はそれに引かれるように、ギクシャクと狼へと視線を向けた。

「死んでもらおう」

何かが変わった。

狼を取り巻く目に見えないものが、急激に変化し、その右目が、まるで血を吸い取ったような真紅へと染まっていく。

その時、ありえないものを目にして、呆けたようになっていた貴史が、気の抜けた声で呟いた。

「美和子を殺したのはお前か」

ただの思い付きだった。気がつけば、口から滑り出ていた。
ありえない話だ。

美和子は何か、獣、それも大型のイヌ科の生き物に、喉笛を食い
ちぎられて死んだのだ。

人間ではない以上、その犯人が、目の前の麗人である可能性は皆
無だ。

しかしそれでも、なぜか間違いないと思った。

この男が殺したのだと、確信した。

真紅とダークグリーンの瞳が、すうっと眇められる。

「そうだ」

短い、しかし、確かな肯定。

通常的狀況であれば、戯言と信じはしなかっただろう。

貴史の目に光が戻る。

狂気の光。

こみ上げる憎悪と、生への執着。

いや、もう真実など、どうでもよかった。

黙って、殺されてなどやるものか。

どす黒く湧き出すものが、貴史を突き動かした。

渾身の力をこめて、握り拳をガラスへとたたきつける。

鋭い音を立てて、滅多なことでは割れないはずの強化ガラスが砕
け散り、その中の大きくとがった破片を凶器として、ガラスをわっ
たことによって血にまみれた手で、握りしめる。

痛みなど、もはや感じない。

「殺してやる」

貴史は呻いた。

ぎらぎらと異様な輝きを宿し、血走った目が、狼を捕らえた。

もはやそこに、正常な思考はない。

「殺してやる！」

腰が抜けていたのが嘘のように、猛然と跳ね起きた貴史は、恐ろ
しい雄叫びを上げながら、ガラスを振りかざして突進した。

履いていたスリッパが飛び散り、靴下だけで庭へと、飛び掛らん勢いで降りた貴史に、よけるしぐさすら見せず狼は静かに言った。

「迎えだ」

あとわずかで、振り下ろせばガラスを、その喉元に突きたてられる位置まできた貴史の身体が、ぴたりと止まった。

正確には、つんのめりそうな急制動がかかり、いきなり足が動かなくなったのだ。

なにかが絡みついている。

しかし、絡みつきそうなものといったら枯れ草くらいしかなかったはずだし、枯れ草では、歩きづらくなるかもしれないが、動けなくなるわけではない。

「ひいひい！」

あわてて視線を足元へとおろした貴史は、今にも絞め殺されそうなか細い悲鳴を上げて震え上がった。

青いというよりは青黒い、なんとも言いようのない不気味な腕が、まるで地面から生え、片足に二本ずつしがみついているのだ。

そしてその腕の間からのぞいているのは、どろりと瞳を濁した、美和子と幸恵の姉妹の、土気色をした顔が、怨めしく貴史を見上げていた。

次々、自らに降りかかるこの世ならぬ事態に、貴史はパニックに陥った。

「は、放せ！放せ！放せえ！」

半狂乱になって暴れるが、女の細腕だというのに、それが死者としての恨みの力なのか、びくともしない。

貴史は、手にしたガラスを、自分の足をも傷つけるのもかまわず、二人の腕に突き立てた。

しかし、肉に突き刺さる不気味な手ごたえはあっても、力は一向に緩まない。

それどころか、地面の中へと引きずり込もうとするかに、増していく。

狼は足音一つ立てず、足を血だらけにして悪あがきを続ける貴史の前へと、歩み寄った。

「立花美和子からの依頼だ」

男とは思えないような、しなやかな白い手が、見た目はやんわりと、しかし肩の骨がきしきしするような強さで貴史の肩をつかんだ。

びくりと、足元の二人に気を取られ、その存在を忘却していた貴史は、大仰に肩を震わせ、血走った目で狼に瞳をあわせ。

美和子を殺し、今また自分を殺そうとしているのに、その色を変えた瞳は、それが嘘のように澄み切っていた。

その中に、醜く顔を歪めた、貴史自身が映り込んでいる。

突然、だらりと両手から、全身から力が抜け落ちた。

あの魔性の瞳に魅入られたのか、ガラスの破片が、血まみれになった手から、地面へと落ちて突きささった。

「その命、貰いよう」

その耳元へと、唇を寄せた。

まるで、恋人に囁くように。

優しく、貴史の身体を引き寄せた狼は、かっと開いた口内に、いつの間にか生じていた鋭い牙で、無防備にさらされていた喉元へと喰らいついた。

柔らかい皮膚に肉に、牙が食い込み、流れ込んでくる温かい血を、喉を鳴らして飲み込む。

脳天を貫いたその激痛に我に返り、絶叫をしようと、貴史の口がむなしく大きく開け、両目がこぼれんばかりに開かれる。

ようやく抵抗することになった手が、食い込んでくる牙をなんとか押し留めようと、無駄に、狼の背中を掻き毟ってあがいた。

めきめきと音を立てて、狼の全身が黒く固い毛に覆われていく。

その形が、明らかに人外のものへと変貌を遂げていく。

その変化に耐え切れず、服が断末魔の響きをたてて、破れ、引き千切れて、あたりに散った。

尻尾がふさりと、降りかかる花卉を払い。

満月の下、その光を吸収してしまうような、漆黒のオオカミが、その完全なる、しなやかな体軀をあらわす。

かぎ状に曲げられた貴史の指が、行き場を失って空を引っ掻いた。パクパクと、開いたり閉じたりを繰り返していた唇の奥から、ゴボゴボとくぐもった濁音がもれ、やがて、赤い泡が、血と共にこぼれ出す。

すでに身体を支える力はないというのに、足に絡みついた腕と、いまだギリギリと侵食を続けるオオカミの牙とが、貴史が倒れることを許さない。

生気を失いつつある、虚ろなその瞳から、涙が伝い落ちた。

断末魔の痙攣を始めた全身を、ぼうっと、くすんで濁った赤いオーラが包み込んだ。

美和子と幸恵の、暗黒の洞穴ごとくぽっかりと開いた口から、頭の中に直接響く、鳥肌が立つような歓喜の叫びが発せられる。

首の骨が碎ける鈍い音が、貴史の苦悶に満ちた最後の意識だった。その直後にオーラは、すべてオオカミに吸い取られ、バクンと、その口が力任せに閉じられる。

吹き出した血が、その黒い毛皮を染め、奇妙に顔をゆがめた貴史の頭部が、まっすぐ落下して地面に激突する瞬間に、姉妹は喜び勇んでそれを捕らえると、あっという間もなく地中へと自分達もろとも引きずりこんでしまった。

腕の支えを失った貴史の身体が、その後を追って、のしかかっていたオオカミと共に倒れ伏した。

周囲に、耳に痛くなるような静寂が戻ってきた。

さらさらと、桜が静かにゆれ、花卉を降らせる。

「……言いたかないけど、壮絶だね」

器用に、片翼でお手上げのポーズを作る大鳥に、獅王子は頭を振った。

「あの男のどこがそんなにいいのか、私には理解できないわ」
オオカミがのそりと身を起こす。

イヌ科最大のハイイロオオカミよりその全身は大きそうだが、ピンと立った耳、スレンダーなシルエットからして、オオカミ以外の何ものにも見えない。

ただ、首の後ろ辺りから肩、胸元にかけてマフラーのように、色素の薄い、周りより長めの毛がぐるりと生えている。

瞳とそれだけが、人だったときの狼の面影をとどめていた。

その様子を見て、獅王子は大きく息を吐いた。

「服は？ 持ってきたんでしょう、鷹人？」

そう言われて、鷹人と呼ばれた鳥は、半ば自分の下敷きにしていた黒い紙袋を、オウムのようにバランスを取りながら、右足でつかんで前へと差し出した。

「まったく、こうして着替えを持ち歩かなきゃならないなんてさ。なんかカッコ悪いよな」

つまらないことを嘆く鷹人に、獅王子は今度はため息をつき、袋を受け取るために桜の樹から離れ、首がなくなつたため、いまだ大量の血を流している貴史の亡骸を踏まないように、わざわざ足元へと回り込んでウッドデッキへとあがる。

死者に対する敬意を払っているわけではない、血がつくのが嫌なだけだ。

「そんなに服を破くのがいやなら、脱いで、たたんでおけばいいのよ」

それに、鷹人はジト目をかえした。

「素っ裸になってから、変われって？ もっとカッコ悪いよ」

ああいえばこういう鷹人に、獅王子は機嫌悪く眉を跳ね上げる。静まり返っている庭からすれば、貴史が殺されたことで彼女達が満足したらしいのうかがえても、なんだか不愉快さが消えないのは、身勝手だろうか。

最初はそれなりに面白いと思っていたのに、こうなってみると、なんでこんな男と一晚を共にしたのかと、忌々しくなる。

「……私が、殺せばよかったかしら」

「それじゃ、意味ないでしょうが」

つい口からこぼれた獅王子の呟きに、あきれ返った鷹人が間髪いれずに突っ込みをいれた。

わかっているのに、さらに不機嫌になって紙袋を奪い取った獅王子は、中を見ていぶかしげになった。

「自分の服はどうしたのよ」

そこにはどう見ても一人分の衣類と靴、他にはタオル類しかなくて、獅王子の問いかけに、大鷲は首をかしげた。

「飛べるのに、わざわざ人間の格好に戻ることないでしょう。このまま帰るよ」

今度は獅王子が、ジト目になった。

「なによ、鳥目の癖に」

それに、鷹人は首の羽毛を逆立てた。

「失礼な！そこらへんの野鳥と一緒にしないでよ！夜目のきく人間並みには見えるんだから！」

あれだけ凄惨な現場を目にしたというのに、いつものように、軽口の応酬がはじまる。

それだけ、こんな光景にも、慣れてしまったのだ。

これで何度目なんて、数えるのすら馬鹿らしくなっていた。

オオカミはわれ関せずと、すたすたと、生命活動が完全に停止し、もはやただの肉の塊と化した貴史の身体を見捨て、軽やかに歩き出した。

「ちょっと、どこへ行くのよ狼！あんたは鷹人と違って空を飛ぶわけにいかないんだから、そのまま帰ったりしないでよね！」

それに気がついた獅王子は、あわててその後を追いかける。

いくら夜とはいっても、こんな犬とごまかすのもいささか苦しい。黒いオオカミが闊歩したとあっては、目撃された時が大変である。

だからこそ、わざわざこうして着替えまで準備したというのに、その労苦をふいにされたのではお目付け役の名が廢る。

靴は玄關に置いたままだし、どうやら人の姿に戻る気がない鷹人

に、まさか取ってこいとも言えず、獅王子は急いで、またストッキングのままで狼を追いかけた。

その際、貴史の遺体のどこかを踏んづけた気もするが、もちろんそんなものかまいはしない。

さすがに鷹人もそれはまずいと、かちやかちやと爪を鳴らしながら、ウッドデッキの端まで歩くと、巨大ともいえそうな翼を広げて、夜空に舞い上がった。

先に回り込んで止めようとしたのだが、意に反してオオカミは、人の姿であった時に立っていたのとはほぼ同じ桜の樹の傍まで来ると、ぴたりとそこで止まってしまった。

肩透かしを食らった鷹人は、一瞬桜の枝に降りようかとも思ったが、とてもではないが、鷹人の体重を支えきれそうにないので、小さく旋回し、枝先を掠めるようにして結局、オオカミの背後へと降りた。

じっと、樹を見つめるオオカミに追いついた獅王子は、その行動を理解できずに、眉をひそめた。

「いったい、何をやってるのよ」

ちらりちらりと、花が散る。

しばしそれに見入っていたオオカミは、おもむろに、桜の幹へと近づくと、まだ血がこびりついている口を開き、牙を突き立てた。

「な!？」

その思いもしなかった行動に、一人と一羽が、驚きの声を上げる。オオカミが噛み付いたあたりから、まるで血のように、真紅の透き通った命のオーラが滲み出した。

オーラは、見開かれた四つの瞳の前で、みるみる幹を伝い、枝を呑み込み、やがては花も、樹全体を覆いつくしてしまった。

「なに？」

しかし、それだけでは納まらず、オオカミを包み込むとさらには、獅王子、鷹人までも瞬時のうちにその紅い奔流の中へと、巻き込んでしまったのである。

「！」

思わず、両手と翼で、顔をかばったその途端、意識の中に、一気に映像が流れ込んできた。

かぐわしい風が吹く。

その下で、二人の男女が、仲良く一本の苗木を、庭に植えている。よく見ればそこは、ずいぶん真新しい感じではあるが、間違いくここ、立花邸だ。

そして、狼がいたのとは同じ位置と思われる、しかしまだなにもない庭の一角に、彼らはしゃがみこみ、うれしそうに言葉を交わしながら、まだひ弱な感じのする苗木を、シャベルで掘った穴の中に植え、大事に根元に土をかぶせている。

降り注ぐ日の光がやわらかい。

女性の方のお腹は、もうずいぶんと目立ってふつくらしていて、時々いとおしそうになでている様子からしても、そこに新しい命が宿っていることは明らかだ。

太陽がきらめく。

二人のまだ幼い姉妹が、さっきよりもずいぶんと強くなった日差しの下、庭で、ホースで水撒きというよりも、水遊びに興じている。まだ作ったばかりというウッドデッキに足を投げ出して、最初に見たときよりも、幾分年齢を増した男女が、その二人を目を細めて見守っていた。

その庭に、少しずつ、木陰を提供できるほどに育ったあの苗木。

あれはおそらく、交通事故で無くなった立花夫妻だと、見当がついた。

そして、色づいた葉が庭へと散る頃、喪服に身を包んだ姉妹が、互いに互いを支えあい、見上げるほどに成長したこの桜の樹の下で、泣いている。

やがて、崩れるように座り込むと、涙をぬぐうことも忘れ、根元を少し、手で掘り返すと、そこに白い何かを、いくつか埋めた。

それは、たぶん両親の骨の欠片だろう。

舞い散る木の葉を浴びながら、姉妹はいつまでもそこで泣き続けていた。

しかし、いつしか寄り添っていたはずの姉の姿は消え、もはや泣くことすらせず、絶望に染まった瞳で、美和子が一人、一枚残らず葉を落とした桜の木の下に、立ち尽くしていた。

打ちひしがれ、疲れきっているその肩に、花びらの変わりのように、白い雪が降る。

美和子はゆっくりとしゃがみこむと、きれいに整えられた指先が汚れるのもかまわず、過去に姉と二人で掘ったあたりの土を、また掘り返した。

そしてそこに、ハンカチの中にそっと持ってきた、小さな骨をころりと落とし、土をかぶせる。

姉の幸恵の骨。

美和子はのろのろと立ち上がると、ふと、誰かに呼ばれたのか、後ろを振り向いた。

その先にいたのは、一応喪服を着ているが、その顔に好色そうな笑いを浮かべている貴史。

桜の樹が、軋んだような気がした。

そして。

再びあたりを闇が包み込んだ。

すべてのオーラが、オオカミの口へと吸い込まれていった。

花びらが降る。

それまでの、風に吹かれていたのとは明らかに違う。

まるで雨のように、花が、その姿をとどめたまま、降り落ちてくる。

「……どうして美和子さんの依頼を受ける気になったのか、不思議に思ってたんだけど」

命のすべてを吸い尽くされて、みるみる枯れていく、桜の花びらを手を受けながら、獅王子は呟いた。

「この桜が、本当の依頼主だったわけね」

ぼんやりとしていた意識を、ようやく現実へと返した鷹人が、目を丸くした。

「じゃあ……！」

苦々しく獅王子は、ゆっくりと牙をはずす狼を見やった。

「普通の人間の生気なんて、場しのぎ程度にしかないし、まだそんなに切羽詰っていないはずなのに……。でも、この桜の樹、一本丸ごとの生気なら、報酬という意味なら十分ですものね」

おそらくこの樹は嘆いたのだ、愛し、愛してくれた家族に降りかかった不幸を。

そして、さらなる不幸を招き寄せた男を、恨んだのだ。

身を引き換えにしても、許せないほどに。

横たわる身体を、獅王子はかえりみた。

月光の中、首を失い、無残な死に様をさらしている。

馬鹿な男だ。

愛されるままに、気持ち返しておけば、その生活に満足していれば、こんな結末を迎えずに済んだというのに。

彼は死ぬまで、本当の愛を、知ることはなかった。

それは、生きるものとして、もっとも不幸なことではないのか？

「……さびしい男」

獅王子は、ほんの少し憐れんで、ポツリと呟いた。

その言葉は、夜をふるわし、鷹人は無言で獅王子を見上げた。なぜかそれが、妙に切なく心にしみた。

「……首を、どこへ持っていったんだろう」

そう口にすれば、白い裸体が、血と血臭をまわりつかせながら、立ち上がった。

瞳はまだ、満足そうに、真紅と暗緑色に揺れている。

獅王子は紙袋を探ると、バスタオルとふわりとかぶせかけた。

「あれは、立花姉妹じゃない。桜が見せた幻覚だ」
血を拭いとりながら、狼が答えた。

「幻覚？」

羽を少し逆立たせながら、うそ寒そうに、鷹人は聞き返す。
見上げた先には、命を終えた、しかしなんの変哲もない桜。
そんなことができるものなのだろうか？

狼が、鷹人に視線を向けた。

「思いは、強ければ力になる。力が積もれば、奇跡も起こす」
それが、なんであろうとも。

淡々と、感慨もみせず語る彼が、少しだけ怖かった。

その牙が、二人の喉を食い破り、三つの命をすすり上げたのに。
彼は変わらない。

この行為は彼にとって、ただの捕食でしかないから。
生きていくための糧。

「掘り返せば出てくるだろう、この樹の下から、根に巻きつかれた
頭がな」

うつすらと、笑みのはかれた唇から、出てきた言葉に、鷹人はブ
ルリと身体を震わせた。

こういう時、狼が、得体の知れない、別の生物に見える。

いや、同じだと思っているだけで、本当は違うのかもしれない。
月光に照らされる、白皙の肢体に。

桜が降る。

すべての望みを成し遂げて、満足そうに。

その最後の一片が、落ちるまで、三人は桜の下で、見守っていた。

Scene 13 エピローグ

殺人事件を担当する警視庁捜査一課はその日、午後三時をまわった頃にいきなり、上へ下への大騒ぎになった。

所轄から殺人事件の一報が入り、その被害者がなんと、あの木内貴史らしい、というのである。

なぜ断定ではないかといえば、首なし死体として発見されたからで、第一発見者は、三日前に出前をした日本料理店の店員で、器を回収に来て発見したのだ。

何度チャイムを鳴らしても出てこないの、門に手をかけると、鍵がかかっていなかったため、これは勝手に入ってこいという意味だと思って、中に踏み込んだらしい。

前にも同じことがあったので、不審には思わなかったそうだ。

ところが、玄関には鍵がしっかりかかっていて、やはり応答はないので、様子をうかがおうと庭に回りこんだところで、遺体を発見したのだ。

その連絡を受けてすぐ、館川と虎賀は現場に飛んでいったが、これがまた、当惑することになった。

木内貴史の首の断面は、またしても獣が、力任せに噛み切ったようなひどい状態になっていたが、肝心の頭部がいくら探しても見つからないのである。

周囲は血まみれだが、持ち去った痕跡は見つからない。

遺体の傍に、土が軟らかくなっている部分があったそうだが、そこも埋めた跡とはどうも違うし、実際掘り返してみたが、なにも出ては来なかった。

それにもう一つ不思議なのは、庭にある桜の樹だ。

染井吉野は確かに、そろそろ花のシーズンは終わりを迎えているが、近所に聞き込みに行った者の話では、確かに三日前までは、満開になっていたというのに、散ってしまったどころか、すっかり枯

れてしまっていたのだ。

根元も徹底的に調べられたが、掘り返した跡も、薬品等をかけられた後もなく、これもどうしてそうなったのかわからない。

三日前という符合からしても、なにか関係があるのではないかと、そこにいた誰もが首を思い切りひねる中、いきなり桜の樹は根元から、腐っていたわけでもないのに倒れ、しかもその下から、根にぐるぐる巻きにされた、木内貴史の首が発見されたのであった。

もちろん、白骨化していたわけではない。無念の表情を浮かべていた首は、腐乱さえしていないのに、指ほども太さのある根っ子に、まるで抱え込まれるように絡みつかれていたのだ。

倒れた樹によるけが人はなかったが、現場に戦慄と、ちよつとしたパニックが発生したのはいうまでもない。

いかに経験を積んでも、こんな不可解極まりない事件に遭遇した者など、到底いるわけもなかった。

若手の捜査員の中には寝込む者まで出たのも、ある意味無理はないだろう。

その当事者の一人である虎賀は、さえない表情で、大塚にある東京都監察医務院に来ていた。

三階建ての鉄筋コンクリートのこの建物は、東京都二十三区内で起きた、死因不明の遺体の司法解剖を行う医務院である。

彼がここまで足を運んだ理由は、当然、例の木内貴史の死因を知るためだった。

顔色がよくないのは、不思議な現象を目撃したせいではなく、すでに捜査が行き詰まりを見せてしまっていて、寝不足だからだ。

本来なら、ピシッとしているはずの茶系の背広も、少しよれて、皺が目立っている。

「よう、きたな」

一階の受付に行こうと入り口をくぐったところで、待ち構えていたらしい誰かから声をかけられた。

本来、必要書類は送ってきてもらえるのだが、監察医からより詳

しい話が聞きたかったので、連絡を入れてわざわざ出向いてきたのだ。

それが、ここを訪れるための表向きの理由だった。

「例の、首なし死体の件だろうか？」

声の方を見るとそこには、こちらも忙しいのか、よれた白衣にぼつぽつと無精髭の生えた、四十半ばほどの眼鏡の男性が、その奥の瞳をしょぼしょぼさせて立っていた。

虎賀は眉間に皺を寄せて、記憶の中をひっくり返した。

面識はなかったが、覚えていた顔の造作。

「え……と、狐塚先生ですよね……？」

写真で見せられただけなので、自信がなさそうに聞き返すと、虎賀より少し背の低い彼は、からからと陽気な笑い声を上げた。

「ああ、そうだ。俺の部屋で話そう」

なにせかなり特殊な状態で発見されたし、解剖にはもちろん刑事が立ち会ったのだが、そうしたことに慣れているはずの彼らですら、気分が悪くなったのでいうので、その結果を虎賀が代わりに自ら立候補して聞きにやってきたのだ。

本当は、館川も一緒に行動すべきなのだが、彼は現在、やっと自宅に戻って休んでいるので、上司には捜査に行くわけではないから、一人で大丈夫だからと断りを入れた。

これが終わって、書類を警視庁に持ち帰れば、虎賀も自宅に帰れることになっている。

目配せされて首肯すると、先を歩き始めた狐塚の後についていく。一般人の出入りもある場所で、話ができる内容でもない。

見るからに手狭な受付から、少し奥に入った、関係者のみ利用可能なエレベータに乗って、三階にわりあてられているという、狐塚の仕事用の個室へと向かった。

彼はここでも、一、二を争う、腕利きの監察医なのだそう。

しかし、こうしてこっそり観察する限りでは、気のいい中年にしか見えない。

エレベータを降りると、白い、病院というよりは大学か研究所という雰囲気のある廊下を抜け、いくつか同じような白いドアの並んだうちの一つに通される。

中に入ると、それほど広くはない縦長の室内に、資料やら書類やらありとあらゆるものが、机の上に乱雑に積み上げられている有様に、正直虎賀は固まった。

動いただけで、崩れてきそうだった。

「もてなしてはやれないが、勘弁してくれ」

部屋の真ん中に集まっている、よくあるタイプの事務用机から、椅子を一つ失敬して、虎賀へとキャスターで転がす。

机にもがたがたぶついているので、大慌てで受け止めたが、思ったよりも安定しているらしく、揺れても崩れてくるようなことはなかった。

しかし、これだけ机があるというのに、狐塚以外誰もいないということは、人払いがされているようだ。

そういえば、入り口でも待ち伏せされていたみたいだしと、目の前の人物に目をやる。

両サイドの壁は、事務所などでよく見かける、灰色のスチール製の棚やら戸棚が占拠しているので、狭くて多少圧迫感がある。

扉の正面の、唯一の窓の前にくっついていて同じ型の机が狐塚のものらしく、その椅子を引っ張り出して、背もたれを前に、その上に腕を置いて逆向きにまたがるように腰掛けた。

虎賀も、その前へと椅子を引っ張っていつて座る。

まだそっちの方が、広く床が見えているからだ。

「木内貴史だが……死因は、立花美和子と一緒にだな。喉の噛み傷……どころか、食い切られちゃったがな」

おそらくは面倒くさいからだろう、短く切られている髪を狐塚は掻き回して、虎賀の顔をうかがった。

名目上は、それを聞きにきたのだから、出だしとしては当然の話題だ。

「……そうでしょうね」

それは予想されて、しかるべき死因だった。

虎賀の落ち着いた態度に、狐塚はよくわからない唸り声を上げた。それから、急に顔を上げ。

「あんた、名前は……」

少し考え込んでから、今更ながら、そう尋ねてきた。彼も写真は見たのだろうが、名前は忘れてしまったらしい。

「虎賀です。虎に、年賀の賀です」

間髪いれずにそう答えると、狐塚は肩をいからせ、じっと虎賀の顔を、穴が開きそうなほど凝視する。

そして、ためらいながら、一つの地名を口にした。

「……月城から来たのか？」

そのあまりに直接的すぎる問いかけに、虎賀は吹き出したくなる。だいたいにおいて初対面では、こんな風に腹の探りあいになるのが常だが、彼はちよつと、そうしたことをするには感情が素直に表に出すぎているようだ。

「そうです」

こういう人が相手では、あまり焦らすのはかえって気の毒なので、あっさり肯定すると、狐塚はそれで大いに安堵したようだった。

「そうか、それじゃあんた、上の人だな。こないだのパーティには参加したのかい？」

膝をぽんとたたいて相好を崩しながらそう言うと、やつと思いつ出したようにごそごそと、机の上の、おそらく書類一式を探し始めた。それを見やって、虎賀は表情を曇らせた。

「いえ、仕事の方が急がしくて……」

「確か、あんたの相棒は、あの館川さんだって聞いたぜ？ それじゃ、無理ないや」

あの人、まさしく刑事そのものって感じだからな。

そう言って、またからからと笑うと、かき分けた書類の山の中から、これだこれだと、封筒に入れてあるそれをようやく見つけ出し

て、虎賀へと差し出した。

「これがそうだ。……それじゃ、まだ、あの三人には会ってないわけだな」

それを、軽く頭を下げて受け取って、いきなりまじめな顔になった狐塚に言われたことに、無言でうなずいた。

空気が少しばかり重さを増す。

狐塚は、重苦しそうに息を吐いた。

「それじゃ、次に会う時でかまわないから、あんまり頻繁に事を起こすなって、釘を刺しておいてくれ。まだ、ごまかさなくても大丈夫なようだが、こちとらその度に、寿命が縮む思いしてるんだからな。いくら人間の一生が短いって言っても、お前さんの相棒みたいに、忘れない奴が出てくるからな」

虎賀は、はあ、とその剣幕に気おされながらも、困惑して首をかしげた。

「狐塚さんが、直接言えはいんじやないですか？」

それに、狐塚はとんでもないとぶんぶん手を振った。

「俺は、あのパーティに呼ばれるほどの血筋じゃないんだ。だから言ってるのさ」

狐塚も、月城の出身ではあるが、瞳の色すら変わらない。

事情に通じているというだけで、後は、ただの人間と差はないのだ。

虎賀は、それならとため息をついた。

「……わかりました。でもまだ、先の話でしょう」

承知したものの、次のパーティが開かれるのは、少なくとも四ヶ月後になるはずだ。

その時に自分が注意をするということは、それまで、野放しということにはならないのだろうか。

虎賀のもっともな疑問に、狐塚は渋い顔になった。

「その前に機会があるんなら、頼んどきたいが、いろいろ事情もあるしな。他の連中からも、注意ならぬ嫌味は相当言われてるだろう

し、まさか塙守だって馬鹿じゃないから、それくらいは、自肅するだろう」

ただ……と、言いよどむ。

「ここんところ、インターバルが短くなってきたるようだから、それが気にかかってるんだが……。職業柄、あんたが言ってくれるのが、一番効果がありそうなんだな。一応一族にかかわることだから、頼むよ」

片手を顔の前でたて、すまなそうにいうのに、虎賀はうなずいた。「狐塚さんが気にすることはありませんよ、そのために来たようなものですから」

それに、狐塚はさらに渋面になった。

「……やっぱり噂になってるかい？」

やはり気にはなるらしい問いかけに、虎賀は、天井を見上げ、しばし考え込んだ。

なんと言ったらいいのだろうか。

「……噂にならない方が、不思議でしょう。彼は『異端』ですから」
いたましげなその声音に、狐塚は目を伏せた。

彼が、悪いわけではない。

それは、天が与えた宿命であり、彼が望んで得たわけではない。
わかつてはいるはずなのに、同族の者さえ、彼を忌み嫌う。

生気をすすって、命をつなぎ続けるがゆえに。

しかしそれを、やるせないとは思っても、自分達はどうすることもできない。

彼自身、同情されることを、快くは思わないだろう。

だからこそ彼は、ありとあらゆる感情を呑み込んでいる、新宿という街に身を潜めているのだ。

あの街は、どんな存在も拒まないし、受け入れもしない。
ただ、流されるように生きるだけ。

「ま、よろしく言っておいてくれよ。あんたの相棒にもな」
立ち込める暗い空気を振り払うように、あえて狐塚が明るくそう

言えば、虎賀もはいと返事をして立ち上がった。

胸の内を、隠して。

用はこれで全部済んだ。

必要な書類は受け取ったし、狐塚に会うという本当の目的も果たせた。

「それでは、また……といたいたところですが、あまり顔を合わせないほうがいいんでしょうね、私達は」

別れの際の常套句を口にしかけて、虎賀は気がついて、肩をすくめる。

それに、狐塚は笑った。

「まあ、職務上はまた会うこともあるさ。その時には、三人が元気だったかどうか聞かせてくれよ。俺達は、忙しくない方がいいんだからな」

それは暗に、彼らに会うまでは、個人的には会わない方がいいということだろう。

自分達の存在は、人に知られてはならない。

それが、一族の不文律。

冗談めかしているそれに、虎賀もここに来て初めて、にこやかな笑顔を浮かべた。

「刑事としちゃ、困るんだろうが、この件が無事迷宮入りするのを祈ってるよ」

狐塚の皮肉に、虎賀は苦笑すると握手を求めた。

人間は、一族以上に、異端に対して容赦がないから。

「これからよろしくお願いします。それでは、失礼します」

瞬きをした虎賀の瞳が一瞬、鈍色に光る。

だから、人間の中に、こうして紛れ込みながらも、自らを偽る。

「ああ、気をつけてな」

その様にうなずいて、部屋を出て行く背中を見送るだけにとどめる。

送ることはしない。こう見えても忙しいのだ。

虎賀を話をするために、助手達をこの部屋から追っ払ったのだから、もうすぐ不機嫌になりながら戻ってきて、次の仕事へと追い立てられるに違いない。

自分の担当したわけだが、あの事件は近々、闇から闇へと葬られることになるだろう。

どんなに優秀な刑事であろうとも、解決できるはずもない。

本当の闇を知らない、人間達には。

「知らない方がいいのさ」

この真実はな……。

呟きは、誰もいない部屋に溶けた。

闇中輝眼

Scene 13 エピローグ（後書き）

これにて『闇中輝眼^{あんちゅうきがん}』終了です。

ここまでお読みくださいますと、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1730b/>

闇中輝眼

2010年10月8日14時39分発行